

---

# 魔法少年の物語 ~ 奇跡の神子 ~

灰色の野良猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少年の物語 ～奇跡の神子～

### 【Nコード】

N5113K

### 【作者名】

灰色の野良猫

### 【あらすじ】

「魔法少年の物語」からの続編

舞台はストライカーズへとシフトする！

様々な思惑が交差するミッドチルダで起こる事件

ロストロギア【レリック】を回収せんと動く機動六課

未来を掴むために動くソラ

妹を探し暗躍する龍也

今、二人の神子が動き出す……。

## 第1話『始まり』（前書き）

「魔法少年の物語」より見てくださっている方はありがとうございます

はじめましての方はこれからよろしくお願いします

では、始まります。

## 第1話『始まり』

Side とある廃棄区画

晴れ渡る空の下、二人の少年が準備体操をしていた。

漆黒の髪を適当に切った髪の少年と、短く綺麗な赤みがかった茶髪の少年の二人だ。

「リュウトつち、準備はできたかい」

「まあな……アリーもちゃんと体調はばんぜんなんだろうな？」

アリーと呼ばれた黒髪の少年、アリスト・ノヴァと赤みがかった茶髪の少年、リュウト・ハザマだ。

「おいらの場合デバイス次第かね？ 安物で中古だかなあ〜」

「俺も同じだな、骨董品のアームデバイスだからな……壊れないか心配だ」

アリストが持っているデバイスは支給品の簡易ストレージデバイスである、たたし恩師からのお下がりで多少ガタが来ているが。

そして、リュウトのアームデバイスは簡素な長剣型である、これはとある騎士から譲り受けたモノだ。

<はいはい！ お待たせしましたです！>

空間にモニターが現れる、銀色の髪をピンでバツテンに留めた少女が現れる。

<今回の試験官を勤めるリインフォース・ツヴァイ空曹です！ よ

ろしくですよ

受講者のアリスト・ノヴァ二等陸士にリュウト・ハザマ二等陸士です  
ね？>

「はい」「

二人は敬礼をしながら答える。

<では、始まりです！ ゴールで会いましょう >

ウィンクをして手を振るツヴァイに対して、アリストのみが手を  
振り返す。

モニターが消えると、代わりにカウントが現れる。

「へマすんなよう、リュウトっち」

「お前こそな」

3

2

1

GO!

Side ヘリ内部

ヘリ内部では5人の少女と1人の少年がいた。  
そこにいるのは皆さんご存知の三人娘である、なのは、フェイト、  
はやて。

先程試験を受けていた、スバルにティアナ、この二人は周りに高  
官ばかりでかなり緊張している。

そして、一見一番年下のように見えるソラである。

『ティアア！ ティアア！？』

『な、何よ？』

『あの人ってソラー等空佐だよね！？』

『そ、そうね……』

管理局で一番の有名人でもあるソラ、雑誌でも何度も取り上げら  
れているソラになのはに会った時以上に混乱しているスバル。  
ティアナも表情が固くなって緊張がかなり見られる。

「くちゅ……んむう〜」

「ソラはホンマ変わらんなあ」

隣に座っていたはやてがちり紙を取り出してソラに渡す。

「うん……誰かが噂してたみたい」

「ソラは有名人やからねえ……どないしたん？」

「い、いえ！」

「何でもないです！」

ソラは苦笑して何となく察していた。

「ん……いいペースだね、あの二人は」  
「危なっかしい所もあるけどね」

なのはとフェイトはアリストとリュウトの試験を評価していた。  
二度目の試験をクリアした二人もモニターを見る。

「あ、ミスショット？」

「外したわね……、精密射撃じゃないのね……」

「砲撃主体の火力重視の問題児らしいんよ、あの子」

モニターを見ながらはやてがそういうとティアナ達が振り返った。

「ボクの部下候補の子達だね、アリストくんは……訓練次第で改善可能、リュウトくんは経験を積ませるのが主になりそうだね」

## Side 試験会場

二人は今、最後の喚問である大型のいるビルの屋上に来ていた。

「んじゃ、リュウトっちは足止め、おいらはアレを使ってあの大型潰すから」

「まあ……いいだろう」

リュウトは屋上の床を切り裂き一つ下の階層に降りる。

「凍てつけ大地、フリーズセイバー！」



剣を床に突き刺し一つ下、つまり大型スフィアのある階層に貫通、剣先から放たれた魔力が氷結変換され、一階層まるごとを凍らせバリアを消滅させる。

「ミラーシールド！」

その時屋上では空中に鏡のような大きなシールドを展開する。

「フォースバスター！」

そこに向けて放たれた砲撃は鏡に反射するように曲がり、ビルの中にある大型スフィアを撃ち貫いた。

「うっし！ 後はゴール目指すだけだぜ！」

こうして、二人の試験は無事終了した。

第2話『機動6課』（前書き）

短いです

スランプです

お待たせしました

……誰か俺に文才をくれええ！（  
|  
）

## 第2話『機動6課』

Side アリスト

右見ても女の子、左見ても女の子。

うは やつべ

『……アリー、何を考えてるか解らないが、顔に締まりがないぞ？』  
『だってよ？ 女の子。』6 人に囲まれてるんだぜ！』

テンション上がるよな！ やつぱり！

『……俺の目の前にいるのはソラ・フォード一等空佐……男だぞ？』

『なん……だと？』

え？ だって無茶苦茶かわいいじゃん！

しかも俺らより年下じゃ……。

『ちなみに19な？』

『何イイイイ！？』

一斉に俺に向けられる全員視線、いや、フォード一等空佐は静かにオレンジジュース飲んでる、めちゃくちゃ似合ってるな、おい。

「どないしたん？ アリストくん？」

「え！？ いや、あの……」

「ふふ……念話で驚くような事を聞いたんじゃないのかな？」

口に手を添えながら笑うフォード一等空佐、うわ、もしかしてバシてる！？

「顔にでているからね？　こんなに小さいから、年下に見えたんじゃないのかな？」

「あの……、おっしゃる通りで……」

うわぁ、俺ヤバイどうするよ！？　どうするよ俺！？

脳内ラ○フカード

切腹

ジャンピング土下座

スライディング土下座

「女の子みたい」と言う

まともなカードねえええええ！？

つか四枚目は言っちゃいかんだろ！

「さて、次はそっちの子達の合否判定だよ」

「帰ってくるですよ、アリスト二等陸士さん？」

「はっ！」

いかんいかん、そういうえばそのための舞台じゃねえか！

「二人も特に減点はなし、それにいいタイムをだしたからね、おめでどう、Bランク試験クリアだよ」

「これが認定証ですよ」

おっしやあ！ これで俺もBランク魔導師だ！

「で、ティアナ達には既に誘ってあるんだけど、君達に機動六課に入らない？」

「機動六課？」

なんぞ？

「一年間のみの実験部隊、部隊長にははやて二等陸佐、隊長にはボクになのは一等空尉、フェイト執務官、経験を積むにはかなり良いところだよ」

「フォード一等空佐の方が八神二等陸佐より階級が上なのに隊長なんですか？」

「ボクはアドバイザーですから、それに指揮能力ははやてさんの方が上なので」

苦笑しながらオレンジジュースを飲むフォード一等空佐。

俺が納得して頷いていると、フォード一等空佐に突然の通信が入ってきた。

『すみません！ 緊急事態につき無礼をお許しください』

『どうしました？』

さつきまでのほんわかした雰囲気が消え、その階級に相応しい覇気を纏っている。

『街中に推定AAAランクの違法魔導師が逃げ回っています、出勤していただいてよろしいですか？』

「わかりました、ではポイントを送ってください、急行します……では今回はこれまでです、お返事はまた後日」

颯爽と飛び出していくフォード一佐……普通にカツコイイなおい。

「じゃあ、俺は帰るぜ」

「俺も家に帰るか……」

さて、これからどうなることやら…

第2話『機動6課』（後書き）

～あとがき物語の神子の館～

ソラ「というわけで今回はこれで終わりです」

アインス「次回はリュウト視点で話が進むぞ」

ではまた次回お会いしましょう！

### 第3話『帰る家』

Side リユウト

バイクを走らせ裏路地に入り、目的地に着いた。

鍵をかけて喫茶店の中に入る、カウンターでカップを拭いている恩人へ挨拶する。

「ただいま、龍也さん」

「お帰り、リユウト」

カップを置き笑みを浮かべながら龍也さんが応えてくれる。

あの空港火災の時に俺はこの人に助けられた、とあるプロジェクトで生み出された人造魔導師だった俺はあの火災の時にある人物に売られる予定だった。

しかし、偶然にも起こったあの火災で俺は逃げ出せた。

しかし、当時幼かった上にろくに運動もしていなかったせいですぐに追いつかれ、あわや殺されそうになった所に現れたのが龍也さんだった。

目にも留まらぬ速さで五人の男達を気絶させ、俺に問い掛けた。

『強くなりたいか？』



今でもその言葉を、その時の目を忘れない。

問い掛けに俺は一つ頷くだけで答えた、龍也さんは何も言わず、俺の手を引いて歩きだした。

そして連れてこられたのがこの喫茶店、ここで俺は4年間暮らした。

その4年間は訓練漬けの日々だった。

そのおかげで今の技術があるわけなんだけど。

「リュウト、新しい部隊はどこなんだ？」

「機動六課です、あの人の読み通りでしたね」

苦笑しながらカウンター席に座る、するとドアが開きフードを被った人が入店してきた。

「いらつしゃい、今日は客は来ないだろうからカウンターにどうぞ」「ありがとう、龍也」

ドアを閉め、フードを取った女性。

金髪にカチューシャをしている、教会名誉騎士のカリム・グラシアその人だ。

「噂をすればなんとやら……ですね」

「あら？ リュウト君もいたのね」

「まあ、今日丁度試験だったのだから」

カリムさんとの出会いもある意味凄かった。

ある日、何時も通りに訓練を終え、喫茶店の手伝いをしていた時にこの喫茶店に逃げ込んで来たのがこの人だった。

どうもお忍びで街にでたところ、ゴロツキに絡まれたらしく従者のシャツハという人と共に店内に逃げ込んだらしい。

街の中では魔法の無断使用は違法だからだったみたいだ。  
ただ、龍也さんは実は広域次元指名手配犯にされているらしく、いきなりシャツハさんが武器を構えていた。

Side 過去の店内

「貴方は！ 広域次元指名犯・ミナヅキリュウヤですね！？」

グィンデルシャフトを構えたシャツハが鋭い目で龍也を睨みつける。

それを見ていたリュウトは自らの腰に提げているアームドデバイスに手をかける。

瞬間、部屋の温度が一気に下がる。

リュウトの魔力変換資質の『氷結』の影響だ。

「止めるリュウト、この人達は“敵”ではない……奥の席にどうぞ  
何時も通りに接客する龍也に、その場にいた全員が呆気にとられた。

「どこかあ！？」

丁度その瞬間、この二人を追っていたゴロツキ達が入ってきた。

「帰れ」

恐ろしい威圧感を放ち、ゴロツキ達に短く言い放つ龍也、ゴロツキ達は一瞬震えた後、脱兎の如く逃げて行った。

Side OUT

それからというものの、どうもカリムさんが龍也さんに一目惚れしたらしく、週に2、3回はこの店を訪れている。

もちろんシャツ八さんは反対したが、トイレに連れていかれ出てきた時には。

( ) ( ) ( ) ( ) カタカタカタ

小刻みに震えながら目のハイライトが消えていた。  
アレは見ていて女性を怒らせないよう心に刻んだ。

「リュウト、こつちにはあまり顔は出さなくてもいいぞ、情報もそれなりに揃ってきたからな」

「龍也さんも動くんですね」

正直、龍也さんに勝てる存在があるかどうか怪しいものだ。

あのソラ・フォード一等空佐でも無理だろう。

龍也さんの戦闘スタイルは緻密な戦闘理論と並外れた身体能力、さらに帯電体質を活かしたクロスレンジ戦、魔導師だろうが戦艦だろうが一撃で屠る力を持っている。

「という事はしばらくはここもお休みなのかしら？」

すごく寂しげに呟くカリムさん、俯いて表情は分からないけど多分涙目なんじゃないか？

「いや、どうやら奴らはミッドに拠点を持っているらしいからな、たまにしか休まんよ」

苦笑しながらカウンターから出て外に出ていく龍也さん。

多分クローズにしてきたんだろっな。

さてと、このあとは日課かな？

### 第3話『帰る家』（後書き）

「あとがき物語の神子の館」

ソラ「さて、また短いですけどお贈りしました今回です」

アインス「今回はゲストをお呼びしている、『魔法少女リリカルなのはStrikers』アルターコード」より、主人公の沢月聖也だ」

聖也「突然だが、失礼する」

ソラ「えっと、アルターコードの作者の天城式さんが灰猫さんのリアルの友人で今回のゲスト出演が実現しました」

聖也「うちの作者は苦笑していたがな」

ソラ「いつもアドバイスをくださるいい友人なんですよね」

聖也「うちは更新遅いがな」

アインス「さて、時間だな……作者の気力が無くなったようだからな……」

聖也「最後に宣伝をしていくか……、突然の光共に俺は見知らぬ土地へと飛ばされていた、そこで巻き起こる事件で俺は驚きの出会いをする」

ではまた次回もお楽しみに！

## 第4話『エンカウト』（前書き）

とりあえずスランプは抜けられそうです……

感想&あとがき出演依頼お待ちしております

では本編をドゾ

## 第4話『エンカウト』

Side リユウト

降り立ったのは店の裏にある特殊なフィールド。

この家の元の持ち主が作り上げた訓練用の特殊フィールドだ。

かなり頑丈に出来ていて龍也さんの技を放つても辺りに被害が出ない、管理局でも本局で使用されているすごい技術らしい。

「さて……始めるぞ」

龍也さんが言う指輪が光り、二丁の銃がその姿を現す。

「回避訓練及び瞬間戦闘思考展開訓練だ……いつも通り当たれば痛いぞ?」

龍也さんが銃のトリガーを引き、瞬間に雷の弾丸が撃ち出される。一発の大きさも小型の砲撃並だ、それを俺に向けて連射してきた。

「はっ!」

即座に飛び出し、弾丸を避けていく。

「そつちに避けていいのか?」

着地した瞬間に目の前まで迫ってきた雷の弾丸。



ヤバッ！

瞬間、世界から色が消え、音が消え。  
俺は膝を曲げ体勢を低くして獣の如く飛び抜ける。

「くっ……はあはあ……」

「ふむ、一瞬だが“体現”したな」

銃を下ろし、微笑む龍也さん……でも……限界。

「す、みません……吐きそうです……」

「……トイレに行つてこい」

俺はトイレに走る、本気でヤバい。

Side 龍也

仕上がりは中の下か……俺ではこれ以上は危険だな。

たしかカリムの話してはあいつの上司はあの少年だったな、あの少年なら教えるのは俺以上に上手いだろう。

「……電話？」

着信番号を確認。

あいつからか。

「俺だ」

「一つ情報が入った……ある無人世界の一つだ……」

「準備はできているな？」

「もちろんだ、三番を使い……」

では……行くか。

Side とある無人世界へ神能寺瑠華視点へ

ふん……、何故このような場所に来なければならんだ……。

「ごめんねリュウカ、無理言っ……」

「……八雲は出れないのか？」

「さすがに執務官二人が同じ任務にはつけれないから……」

後ろから近いてきたフェイトに尋ねてみるが、返ってきた答えは望んだ物ではなかった。

ちっ、いくらイヴとソラからの頼みとは言えど面倒事はごめんなんだがな……。

「してフェイト、今回の任務は何なのだ？ 俺は早く終わらせてゲームの続きがしたいのだが」

せつかく買った最新ソフトだ、先が気になる。

「この辺りにロストログリア反応が出たって連絡がきたからその調査パターンが私達が追ってるレリッククっていう物に近いんだ」

そういう事が……。

「む？」

嫌な予感がして【王の財宝】ゲートオブバビロンを展開し撃ち放つ。

「ほう……神童……それも【宝玉の神子】か？」

「ちっ、避けたか……」

「っ！ 貴方は……！」

むっ？ 知り合いか？

しかし、神子の存在を知っているとは……コイツも同じ系譜の人間か？

「久しいな……、あの場ではまだ幼かったが」

「……ミナヅキリュウヤ、貴方は広域次元指名手配されています、大人しく投降をしてください」

フェイトがバルディッシュを構える。

執務官の職ゆえ、仕方ないとはいえ、無謀だな。

「俺はやらんぞ、初撃を避けられた時点で俺の負けだ」

俺はとりあえず森の中に向かう、アレを相手取るのは俺では力不足だ……、不本意ではあるがな。

「リュウカ！？」

「ふむ……俺も探し物があるから行くぞ？ 追いかけて来てもいいが……まあ、無理だろうな」

妙に軽い音と共にその場から消え失せる龍也とかいう男。  
フェイトも辺りを見回しているが分からないようだな。  
やれやれ……さっさとアンラとロストロギアを回収して帰るか。

Side アンラ・マンユ

たき火をしながらさつき釣り上げた魚を焼く。  
なんか某魔物狩人の音楽が聞こえる気がする！。

「上手にできm「消せ」ぬおおお！？ 俺の魚があああ！？」

いい具合に焼けたと思った瞬間に上から水をかけられた。  
振り向くとそこにいたのは男、だいたい20代前半じゃねえか？

「てめえ！ 俺の魚が台なしじゃねえか！？」

「知らん、それよりもこんな乾燥した空気の中たき火なんぞすれば  
山火事になるだろうが」

うぐっ……、た、確かにこの世界は空気が乾燥気味だろうけどよ  
……。

「さ、魚が」

「知らん」

うわっ、ヒデェー！？

「何をしている、アンラ……それに貴様は龍也だったか」

「瑠華じゃねえか！ 聞いてk「嫌だ、面倒くさい」をい！？」

「コイツもヒデエなおい！？」

「つたく、これならミゼット婆ちゃん達とチェスやってた方が万倍いいぜ。」

「さて……………、この世界には目的の物はなかったからな……………もうたき火なぞするなよ」

「コイツ……………、しかし、つえーな。」

「自然体のくせして隙なんぞ一切ねえ、しかもさつきからコイツの気配が掴めねえ……………、ないわけじゃねえが存在感がでかすぎる。」

「ソラだって結構な存在感あるけど、それとは存在感の質が違うな……………」

「あいつは包み込む感じだが、コイツのは引き裂くような感じだな。」

「龍也とやら、一つ言っておこう……………ソラをあまり痛め付けるなよ」

「……………？」

「これ以上強くなつては手がつけられん……………」

「あ……………、そついや瑠華が模擬戦したときに嘆いてたな……………」

「ふ……………覚えておこう」

「あんなのが敵に回るのは御免だな……………、まったく。」

「帰るぞアンラ、どうやら別動隊がロストログアを発見した」

「どんなのだったんだ？」

「……………お風呂の玩具のアヒルみたいなやつらしい……………」

.....  
元  
.....  
。

#### 第4話『エンカウント』（後書き）

～あとがき物語の神子の館～

ソラ「というわけで始まりました、あとがきコーナーです」

イヴ「今回から私も参加……アインスは忙しい……」

（ ）つ【ゲスト来たよ】

ソラ「今回のゲストは『魔法少女リリカルなのは』光を継ぐもの～  
より御門錬くんです」

錬「（そっぴや歳上だったな）今回は呼んでくれてありがとう」

イヴ「ん、感謝するといい……」

錬「誰？」

ソラ「皆忘れかけているだろう神王のクローン、イヴだよ？」

錬「あ……居たな」

イヴ「出番ないから……ここにきた」

ソラ「ボクが忙しい時には一人でやってもらおう予定です」

錬「しかし、ソラって強いのか？」

ソラ「最近戦ってないですからね……」

イヴ「ソラつよい……この前シグナムの剣腕で防いでた」

錬「え……？」

イヴ「あと、ハンドガン質量兵器を素手で握り潰してた」

錬「(･･････)」

ソラ「ボクって硬いらしいんですよ、アームドデバイスくらいならBJ無しでも傷つきませんよ？」

錬「チートだよ……」

ソラ「あ、もう時間ですね。お土産のガトーショコラとそちらへの出演依頼書です、では番宣どうぞ」

錬「ありがとう、んじゃ

白き騎士【御門錬】の宿命を負った俺が運命に立ち向かう、繰り返される戦いに果たして終わりはあるのだろうか、【闇の書事件】から4年後の地球にて歯車は動き出す……『魔法少女リリカルなのは』光を継ぐもの』をよろしく！」

ソラ「それでは次回またお会いしましょう」

イヴ「……ばいばい」



ラグナシア様、こんな感じでしたでしょうか？

番外編『With & 神子』（前書き）

今回は番外編です

とりあえず本編どうぞ

## 番外編『With & 神子』

Side とある無人世界（ソラ視点）

緑豊かな無人世界であるここでちょっと困った事になった。

本来なら簡単な調査で済むはずの任務で大規模次元震並の魔力を感知、直ぐに急行したところ傷だらけの青年を発見、そこまではよかつたんだけどあの膨大な魔力のせいで時空間に歪みが生じたみたいで空間跳躍が不可能になってしまった。

単独で現場に来ていたボクにとっては死活問題です、主に精神的に。

「えつと……とりあえずこの人は誰なんでしょう？」

ユーノさんから教えて貰った癒しの魔法を施しながら様子を伺う。魔力はあまりない、というより封じられている印象を受ける。

着ている服は厚着……この世界では暑そうだったので横に畳んで置いていた。

ポケットの中から出てきた身分証明だと、名前は『神崎ウィズ』と言っらしい。

夜、未だ目を覚まさないウィズくんの頬を突いているとつつすと目を開けた。

「やっと起きましたか？」

「……なの姉の声……？」

「うゅ？ なの姉？」

なのはさんのお知り合いでしょうかね？

【再起動確認……………相棒！ 死にましたか！？】

わっ、びつくりしました。

デバイスの方も再起動したみたいですね、でもそこは普通『死んでないですか』って聞くんじゃないんですか？

【おや？ お嬢さんは誰でしょうか？】

「ボクは男ですよ？ ボクは時空管理局地上部隊【エルベンラルト】部隊長、ソラ・フォード一等空佐です」

【相棒のデバイス、アテナです……………って、『エルベンラルト』？ 聞いた事ないですね】

あれ？ 意外と知られていないんでしょうか？ でも海ですら知らない人の方が少ないはずなのに……………。

「俺は……………無視か？」

【相棒が喋らないのが原因じゃないんですか？】

「……………俺は神崎ウイズ、機動六課所属で、階級は二等陸尉だ……………」

「機動六課！？ ありえないですよ！ まだ設立すらされていないんですよ」

「【え……………？】」

あの後、色々話しを聞いた結果、彼等は並行世界から来た人物のようでした。

未来については聞かない事になりました、もし聞いて実際と違うとそれだけで何が起るかわかったものではないからね。

「魔導師ランクSSS!？ ありえないっしょ、はや姉だって総合SSだぞ!？」

【相棒はAAA+……天と地ですねww】

「一応今はリミッターでBランクくらいまで落としてありますよ？」

実際、ボクの全力は危険が伴う。

ボクがではなく、相手が……だ、いくら非殺傷設定をしたところでその衝撃だけでもかなりのものだ。

相手に実力と肉体が一定レベル以上なければボクは体術以外を使う気はない、Bランクまで下げておけば危険性のある砲撃や収束砲撃などは使用できないから安心だ。ただ、ナイトにもリミッターがかけられたのは残念だったなあ。

【しかし、相棒はボロボロですね】

「生きてただけ感謝しなきゃな……帰れるかわからないけどな……」

【レイラは停止したままですし……アナザーはないですし……私が目立てない!】

「あ、そこが一番重要なんですね」

面白い方ですね、アテナさんは。

【相棒はヘタレですからね、私がいなければなにもできませんよ!】

「そんなことないからね!？ 俺だって……だって……orz」

「でも陸戦AAA+と言えばそれなりに高いランクですよ、何故そこまで落ち込むんですか？」

陸の魔導師ランクは平均してだいたいBランク、AAA+ランクの魔導師は海では執務官にもなれるランクだ。

「いや……その……」

【相棒はしぶといただけで射撃魔法の適性は低いし空も飛べない、さらに魔力は少ないですからねえ】

「魔法は近代ベルカ式ですか……飛翔適性がないなら剣技でAAA+をとったんですね……」

実戦経験の積み重ね、あとは工夫ですね。

修行ではあんな筋肉の付き方はしませんし。

「ならこうしましょう、一撃でもボクに当てられたなら多少無茶をしても貴方達を元の世界に届けてあげます」

いくらボクでも並行世界の壁を越える『想像』は難しいですが、実戦経験豊富な方との模擬戦は得るものが多いでしょうし。

「マジか!?!」

【相棒、いくらBランクまでリミッターがかかっている相手とはいえ……勝てるんですか?】

「勝つ! んで帰る!」

ふふ……、よっぽど自分の世界が好きなんですな……愛されてる証です。

「まあ、まずは2、3日は休養してくださいね、一応本気で行きま  
すから」

「……はい、お手柔らかにお願いします」

【へタレですね】

両者はお互いに向き合い一礼する。

「ナイト、モードリリース、B J及び魔法補助に専念」

【了解、B J展開します】

「アテナ、セットアップ！」

【セットアップ】

両者が光に包まれ、互いにB Jを着る。

ソラは昔と変わらず上下黒い服で腰には赤い外套、今回は空戦をしないため『天の翼』は展開していない。

対してウイズも黒い上下、ただ白い外套を羽織っているのが違う。アテナはノーマルで起動している。

「さて……、では始めましょうか」

ソラの構えは攻防両立の一番使い慣れた構え、腰を落とし重心を安定させ如何なる動きにも対処できるようにする。

対してウイズは今までの戦闘経験から来る勘で動けないでいた。

『アテナ……ソラは本当にはや姉達と同一年か？』

【（本人の言葉を信じるなら間違いないでしょうけど……、強いです、隙なんて全然見当たりません）】

普段なら軽口を言い合う二人だが、今回ばかりは真剣そのもの。

かつて戦ったトウギやアングなどよりも濃密な威圧感、第三拘束までしか外されていないウイズではソラへの攻撃への糸口を見つけれられない。

「見え透いた隙には手を出しませんか……なら、こちらから仕掛けますよ?」

【ホークムーブ】

宣言した瞬間、高速移動魔法で一氣に間合いを詰めるソラ、ウィズはその速度に驚くがすぐさま行動を起こす。

「アテナ!」

【ハイペリオン!】

ウィズの正面、ソラとの間にハイペリオンを展開する。  
だが。

「崩拳」

踏み込みと同時に打ち出された右がハイペリオンを粉々に打ち砕く!

「ちっ、アテナ! テクニカル!」

【ロードカートリッジ! テクニカルシルエット!】

ウィズの掛け声と共にアテナはテクニカルへと変化、速度上昇の魔力付与を全開にして未だ硬直しているソラへと迫る。

「プラスパワー!」

【プラスパワー・エクステンション】

しかし、ソラは身体強化魔法を発動、ブレイクダンスのような動きで切り掛かってきたウィズの攻撃を避け、足払いをする。



「うおっ!?!」  
「せい!」

バランスを崩したウイズの襟を掴み、上空に投げ飛ばすソラ。  
何気に片手でウイズを上空10mほど投げ飛ばす。

「ハイペリオン!」

しかし、ウイズはそれを利用して上空でハイペリオンを足場にし、  
距離を稼いだ。

「アテナ! ガンシルエット!」

【ロードカートリッジ、ガンシルエット!】

アテナの姿がガンシルエットへと変化、それを見てソラは出方を  
伺っている。

「ブランコスファイア!」

【ブランコスファイア】

10の魔力弾を生み出し狙いを定めるウイズ。

「……ナイト……コード・神罰」

【コード・神罰承認……術式・断罪光剣……生成開始】

対して、ソラの周りに浮かんだのは強烈な光を放つ剣群。

神罰・断罪光剣の術式を組み込んだ直射型魔力弾である。

一撃の威力はだいたいアクセルシューター並、しかし、その速度  
は他の追隨を許さぬ光の速さ。

「【ファイア!】」

「レディ……ゴ―！」

打ち出された両者の魔力弾、だが。

「へ？」

【……相棒、終了のお知らせです】

一瞬でブランコスフィアを貫いた光剣群がウィズを取り囲み。

「チェックメイト……ですね」

ソラの笑顔でこの戦いは終了となった。

「【想像具現化】……開け！ 世界を越える【次元の門】！」

結局、ソラの【想像具現化】をフル回転させ、向こうと繋がりのある二人を媒介に世界を越える門を形成、二人を送り出した。

「ふう〜……早く帰ってお風呂入りたいなあ……あ、アリサさん達とデートもしたいなあ」

苦笑しながらその場に座り込むソラ、一日は休養しなければならぬ疲労感を感じていた。

番外編『with & 神子』（後書き）

（あとがき物語の神子の館）

ソラ「八神様の作品、【魔法少女リリカルなのはwith 2nd】とのコラボSSをお送りしました」

アテナ【相棒が魅せる間もなくやられましたけどね】

ウイズ「……」

灰猫「俺の文才不足ですorz」

ソラ「次回はがんばりましょうね」

では次回をお楽しみに！

第5話 『機動六課設立・FWメンバーの実力』 (前書き)

遅くなって申し訳ありませんでした

とにかく、本編をどうぞ

## 第5話 『機動六課設立・FWメンバーの実力』

Side ソラ

初めて袖を通す六課の制服。

相変わらず着られている感じがするけど、ボクの見ただ目では仕方ないのかもしれない。

「ソラ、準備はできましたか？」

「アインスですか、ええ、問題ないですよ」

ボクと同じく六課の制服を着たアインスが入って来る。

「あ、ソラ着替えたんだ」

「ふふ、似合ってるよ？」

その後ろからアリサさんとずかさんも入ってきた、二人とも同じく六課の制服に身を包んでいた。

「八雲さんは？」

「今他の隊長陳と開設式の打ち合わせ中ですね」

「新人の子達も揃ってるわよ」

「あとは時間になるのを待つだけだね」

ふむ、なるほど。

じゃあそろそろ行きますか。

開設式の中、はやてさんの演説を聞きながら整備班・バックヤ-

ド・FW達を見る。

みんな優秀な原石達、この先どう成長するか楽しみだなあ。

「ほなら次は、今回六課のアドバイザーとして来てくれとるソラ・フォード一等空佐からのお言葉です」

ボクが一步前になると一斉に敬礼する全員。それを見て苦笑しながら咳ばらいを一つ。

「時空管理局地上部隊『エルベンラルト』部隊長、ソラ・フォード一等空佐です……皆さんはまだまだ原石です、ですから持てる全ての力を出し切って後悔がないように頑張ってください、一人では無理な事も支え合い補い合えば如何なる困難も越えられます。皆さん、これから一緒に頑張りましょう」

ボクが一礼すると、一斉に拍手が巻き起こる。

ああ、やっぱりちよつと恥ずかしいな。

Side 訓練スペース

訓練スペースにはティアナさん、スバルさん、エリオくん、キャロさん、アリストくん、リュウトくんの新人FWメンバーが揃っていた。

「じゃあ、訓練始めようか」

ボクが着いた時には既に訓練を開始する時だった、空間シミュレーションで展開してあるのは市街地、仮想敵にはガジェットドロー

ンが10機。

さて、彼等はどんな戦いを見せてくれるんだろう？

Side 新人FWメンバー

開始早々、逃走するガジェットを追いかけるスバル・エリオ・リユウト。

最初にガジェットと対峙したのはエリオだった。

「やああああ！」

【ルフトメッサー】

エリオがストラダを振り、空気の刃を飛ばすが簡単に避けられ、素早く逃げられてしまった。

「ダメだ、ふわふわ避けられて当たらない……」

次いで接触したのはスバル、だが。

「なにこれ！？ 動き速っ?!」

ガジェットの機動に追いつけず攻撃が当たらない。ビルの上でその光景を見ていたティアナは少し苛立っていた。

「前衛3人！ 分散しすぎ！ ちょっとは後ろの事考えて！ ちびっこ、威力強化お願い」

「はい……ケリュケイオン！」

【ブーストアップ・バレットパワー】

威力強化を確認し、ティアナが4発のシュートバレットを打ち出す。

直撃しようか、というところでティアナの魔力弾が何かに掻き消される。

「バリア!？」

「違います、あれはフィールド系……」

「魔力が消された?」

「そう、このガジェットドローンにはちょっと厄介な性質があるの、攻撃魔力を掻き消すAMF……普通の射撃は通じないし」

「あ、くっそお、ウイングロード!」

「スバル、馬鹿! 危ない!」

ウイングロードで追いかけるスバル。しかし。

「ちなみに、このAMFを全開にされると……」

ガジェットドローンのAMFが広がり、ウイングロードが途中で消える。

「うわあああ!」

「飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる……スバル、大丈夫?」

「つつう……な、なんとか」

「まあ、訓練中ではみんなのデバイスにちょっと工夫して擬似的に再現してるだけなんだけどね。でも現物からデータを取ってるし、かなり本物に近いよ」



苦笑混じりに説明するシャーリー、ビルの上で観察を続けているリュウトが頷く。

『対抗する術は幾つかあるよ、どうすればいいか素早く考えて素早く動いて!』

「あんなる! フォースバスター!」

その頃、やっと狙える位置まで来たアリストがガジェット群に向かって砲撃を放つ、単純に大威力で吹き飛ばそうと考えたアリスト。だが。

「いつ!? おいらの砲撃が消された?」

『アリストくん、収束をまともにしてない砲撃ではガジェットは落とせませんよ?』

実はアリスト、馬鹿魔力に任せた放出…のみの砲撃しかできない。

収束系は才能が一切なく、あの大型スフィアも魔力任せの力押しで破壊出来たにすぎない。

「うお!? デバイスから煙りが!?!」

「……オーバーフローね……、アリストは使えなさそうね……ちびっこ、名前なんてつたっけ?」

「キャラであります」

ティアナは周囲を確認、今まで動きを見せていなかったリュウトと目が合う。

『俺はアレに当てることができる……4機までならな』

「『分かった』キャラ、手持ちの魔法とそのチビ竜の技で何とか出

来そうなはある?」

「……試してみたいのが幾つか」

真剣な表情で言うキャラに微笑み、ティアナは観察用のウィンドウを閉じる。

「あたしもある……」『スバル!』」

「オツケー……」『エリオ、あいつら逃がさないように先行して足止めできる? ティアが何か考えているから時間稼ぎ!』」

『やってみます!』

Side ソラ

「へえ、みんなよく走りますね」

「危なっかしくて、ドキドキだけどねえ」

「ですが、新人にしてはまあまあ動きだよ……ね? 八雲さん?」

なのはさん、シャーリーさんが驚いて振り向くと、片目に眼帯をした男性、神代八雲が立っていた。

「一応気配は消したんだが……驚いてはくれないか……」

「なのはさんに気づかせていないだけ凄いですよ? あと不意打ちはいヴさん並になってからボクに挑戦してくださいね?」

苦笑しながら八雲さんは画面へ目を向ける。

「データは取れてるか?」

「あ、そっちはいいのがとれていますよ? 4機ともいい子に仕上げ

ますよ」

実に楽しそうな笑顔で操作するシャーリーさんがとても印象的でした。

Side 新人FWメンバー

悠々と逃走中のガジェット、その進行方向に待ち構えるエリオ。

「行くよ、ストラダ……カートリッジロード！」

【エクスブロージョン】

エリオの足元に浮かび上がるベルカ式魔法陣、それと同時にストラダを頭上で回転させ力を溜める。

ガジェットが十分近づいた所で足元の橋を破壊し、足止めに使う。タイミングがよかつたらしく二機のガジェットが足止めされる。抜け出した二機に対してスバルが肉薄する。

「潰れてろお！」

スバルの拳がガジェットに当たるが、AMFの影響で攻撃が通らない。

「やっぱり魔力を消されるとイマイチ威力がでない……そんなら！」

後ろから迫ってきたガジェットに反応し、身体を反転、足で地面に落としマウントポジションをとる。

「ううううりやあああ！」

そして、魔力強化で覆うのではなく、内部に魔力を溜めて威力を増加、見事ガジェットを破壊した。

その近く、ビルの上でキャロが動いた。

「連続行きます、フリード……ブラストフレア」

「きゅううう」

「ファイア！」

フリードから放たれた火球が打ち出され一気に燃え上がる、ガジェットはその熱で動きを鈍らせ止まってしまう。

「我が求めるは戒めるもの、捕らえるもの、言の葉に応えよ、鋼鉄の縛鎖、錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

ガジェットの足元に浮かび上がる菱形の魔法陣、召喚魔法専用のものである。そこから現れた鎖が生き物のように動き、3機のガジェットを捕らえた。

ティアナはビルの間を跳び移り、視界の開けた場所に移る。

「こちとら射撃型、無効化されてはいそうですか？下がってたんじゃ、生き残れないのよ！！」

ティアナは二発カートリッジをロードし、魔力弾を生成、同時に念話でスバルにそのままガジェットを追うように指示、自分は作業

に専念する。

「……っ……（攻撃用の弾体を無効化フィールドで消される膜状バリアで包む、フィールドを突き抜けるまで外殻が持てば本命の弾は……ターゲットに届く！）」

フィールド系防御を突き抜ける多重弾殻射撃、本来ならばAAAランクのそのスキルをティアナは使用する。

「（固まれ……固まれ……固まれ……固まれ……固まれ！）やああああ  
！バリアブルシュート！！」

膜状バリアに包まれた弾丸がガジェットを追っていたスバルを追い越しガジェットに到達、先程は一瞬で消されたティアナの魔力弾が拮抗し、ついにはフィールドを突破、そのままの突き抜け二機を貫いた。

リュウトはビルから降り、じつとガジェットが来るのを待っていた。

鞘から抜かれた状態で右手に剣型アームデバイスを構え、左手には鞘が握られていた。

「はあああ……」

呼吸を整え、身体を万全の状態にする。

リュウトは剣士ではない、故に剣の型などは存在しない、正規の訓練もここ一年間ほどで、それも“魔導師”としての訓練のみだった。

「我流二刀流……氷狼牙爪ひょうろうがそう」

呟くように言った瞬間、足に魔力を溜め、爆発させるように加速！

「はっ！」

4機のガジェットの間を通り抜け切り付ける。

3機はリュウトの剣により爆発するが、一機だけ直撃を免れ抜けられた。

「突貫！」

しかし、その先にいたアリストが膨大な魔力を纏いガジェットに突撃！ 見事落とす。

『訓練終了、みんなお疲れ様』

なのはの声と共に本日の訓練は終了した。

第5話『機動六課設立・FWメンバーの実力』（後書き）

くあとがき物語の神子の館く

ソラ「本日もゲストが来ています！」

イヴ「魔法少女リリカルなのはRainbow Flower虹  
ノ花、此処にくより、カノン・クリスタルさん、ロキ・ブラドクオ  
ーツさんです」

カノン「はじめまして！」

ロキ「失礼します」

ソラ「いらっしやいませ」

イヴ「……お茶とお菓子、いる？」

カノン「いただきます！」

ロキ「ありがとうございます」

ソラ「さて、今回はどうでしたか？」

カノン「うん、アリストくんってさ、最後までやったの？ たし  
かデバイスはオーバーフローしたよね？」

ソラ「あれはデバイスなしでただ体当たりしただけですね」

ロキ「……ただの体当たりなんですか？」

イヴ「言うなれば猪……」

カノン「何だかビドイ評価だね」

ソラ「彼は才能はないですからね」

イヴ「ん…時間」

ロキ「もうそんな時間なんですか……」

ソラ「では番宣どうぞ」

カノン「じゃあ、私たちのリーダー、ヒスイ・リヴァイスこと御剣  
翡翠が様々な体験をし、成長していく物語、実の姉に敗れた翡翠は  
どうなるか!？」

ロキ「魔法少女リリカルなのはRainbow Flower」虹  
ノ花、此処にをよろしくお願いします」



第6話『模擬戦』（前書き）

遅くなりました、すみません……

来週も中々更新できないと思うので、申し訳ありません

では本編をどうぞ

## 第6話『模擬戦』

六課設立より数日、今日も新人FWメンバーは訓練に勤しんでいた。

「はい、整列」

「はい、はぁ…はぁ…」

スバルが大きく返事をし、他のメンツも集まってくる。

皆息をきらしているが、リュウト一人がまだ若干余裕を見せている。

ちなみに1番スタミナが切れているのは……。

「ぜえ……ぜえ……げほっ……」

何故かソラ特製の重りを付けさせられたアリストである。

両手両足に合計20kgのバンドを付けており、かなり辛そうである。

リュウトも付けてはいるがこちらはまだ息があがっていない。

「じゃあ、本日の早朝訓練、ラスト一本……皆まだ頑張れる？」

「……はい！」「」「」

「……む、無理……」

若干一名死にそうな表情だがなのははあえて無視して、微笑みながら。

「じゃあ、シュートイベーションをやるよ？ レイジングハート」

【了解、アクセルシューター】

レイハの声と共になのは周りに浮かぶ幾つものアクセルシューター、それを見てアリストなどは愕然とした表情になる。

「私の攻撃を5分間、被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア、誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ？ 頑張って行こう！」

「……はい！」「……」  
「……だから……無理っ！」

一人否定するが周りは無視、そこにビルの上で観戦していたソラからアリストに声がかけられた。

「これをクリア出来たら事務仕事減らしてあげますよ？」

「うっしやあ！ やったろーじゃねえか！！」

いきなり元気になるアリスト、しかし、膝が笑っている辺り意外と本気でヤバいらしい。

「このボロボロ状態でなのはさんの攻撃を5分間、捌ききる自信ある？」

「ない！」

「同じくです」

ティアナの問いに否定するスバルとエリオ、今までの経験上明白な答えだった。

「じゃあ、何とか一発入れよう！」

「はい！」

ティアナの宣言に全員が同意を示す。  
アリストは笑っている膝を一度大きく踏み込んで落ち着かせる。

「ぜってーにクリアしてやる！」

「……剣は持つか？」

杖を構えながら気合いを入れるアリスト、対してリュウトは最近  
軋みを上げる自分のデバイスに不安が拭えない。

「準備はオツケーだね？ それじゃあ、レディー……ゴー！」

なのはが腕を振り下ろすと共にアクセルシューターが六人に向か  
って降り注ぐ！

「全員絶対回避！ 二分以内に決めるわよ！」

「……応！」「」

一気に散開するFWメンバー、アリストのみはその場で回避しき  
って後方に跳んだ。

「うん、アリストくんもいい動きになってきた……っ！」

今まで直ぐに被弾していたアリストも回避できた事に喜ぶのは、  
しかし、突如自らの後ろに現れたウイングロードに反応し振り返る。

「うおおおおお！」

スバルがウイングロードを走りながらなのはに接近、ティアナも  
ビルの中からはへ狙いを定めていた。

「アクセル！」

【スナイプショット】

しかし、そこはエースオブエース、冷静に二発のアクセルシューターをスバルとティアナに打ち出す。

だが、アクセルシューターは二人を通り抜け二人の姿を掻き消した。

「シルエツト……やるねティアナ……っ!？」

ティアナの技能に感嘆していると頭上からウイングロードがおりてくる、そちらを振り向いた瞬間、ティアナの魔法で姿を消していたスバルが現れる。

「てえええりやあああ!!!」

リボルバーナックルでなのはに殴り掛かろうとするスバル、しかし、そこはなのはのシールドに防がれてしまう。

そこへなのはが制御したアクセルシューターが二発スバルへ向けて飛んで来る。

「はっ……くっ!」

それに気づき即座に後退、退避する。

「うん、いい反応」

逃げるスバルに代わってビルの上からリュウトが落下しながらなのはに迫る、もちろんなのはのシールドで防がれてしまうが。

「ちっ、はっ！」

シールドを抜けないと悟ったりユウトは反動を活かして後退、退路はアリストが砲撃を放つ事で確保した。

『ナイスだ、アリー』

『慣れたもんだよな、おいらも』

軽口を言いながら走って物陰に隠れるアリスト、リュウトもビル内部へ侵入し機を伺う。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に駆け抜ける力を！」

【ブーストアップ・アクセラレイション】

キャロの補助魔法で強化されたストラーダが淡く桜色に光り、エリオの足元の魔法陣も強く光りだす。

「あの、加速ついちゃうから気をつけて！」

「大丈夫、スピードだけが取り柄だから！」

そういつとエリオは真つすぐなのはを見る。

「行くよ！ ストラーダ！」

準備が整ったエリオ、ティアナはスバルを追いかけている魔力弾を破壊し、さらに二発の魔力弾でなのはの気を逸らす。

そこへさらにフリードのブラストフレアが降り注ぎなのはが回避アクションをする。

なのはが視線を向けた時、準備を終えたエリオの姿を捕らえる。

「エリオ！ 今っ！」

「いつけえええええ！」

【スピーアアングリフ】

猛スピードで突進するエリオ、なのはと接触した瞬間爆煙に包まれ見えなくなるが、エリオだけが弾き飛ばされて来る。

「エリオ！」

「外した!？」

煙が晴れ、悠然と立っているのは。

【ミッションコンプリート】

「お見事、ミッションコンプリート」

「ホントですか!？」

かなり吹き飛ばされ窓に捕まりながら問いかけるエリオ。  
なのはは自らの左肩辺りを指差しながら。

「ほら、ちゃんとバリアを抜いてジャケットまで通ったよ？ じゃ

あ、今日はここまで、一旦集合しよ」

全員が集合し、反省などをしている。

「きゅくう？」

「どづしたの？ フリード」

「何だか焦げ臭いような……?」

皆が疑問に思っているとティアナが下を見た瞬間、驚き。

「ズバル！ あんたのローラーブーツ」

「あつ！？ やっぱー……あちゃあ……無茶させちゃったあ……」

「オーバーロードかな？ あとで技術部の人に見てもら……『パギ』……ん？」

なのはの話している最中、何か輝が入る音がする。

なのはが視線を移すとアリストがorzになっていた。

「俺の……デバイスが逝っちゃった……」

「あー、アリストくんのは古いからね……ティアナのアンカーガンもキツイ？」

「はい……だましましたです」

ちょっと申し訳なさそうに答える。

その時、ビルの上部から飛び降りてきたソラが軽やかに着地、なのはを見ながら。

「皆さん訓練にも慣れてきましたし実戦用の新デバイスを渡してもいいと思いますよ？」

「新……」「デバイス？」

「なんだと！？」

「嫌いぞ？ アリー」



第6話『模擬戦』（後書き）

（あとがき物語の神子の館）

ソラ「灰猫さんが不調なため今回はお休みです」

アインス「次から二作は番外の予定だ、楽しみにしていてくれ」

番外編2「戦いとは？」（前書き）

すみません、かなり遅くなり申し訳ありませんでした

スランプに陥ってますががんばります！

では本編をどうぞ

## 番外編2「戦いとは？」

爆発音が響く中、ソラとアインスは戦場を駆け抜ける。

無人世界の一つだが、犯罪者の巣窟になっており銃弾が飛び交う中管理局は引け腰になり逃げてしまっている。

「やれやれ……、この程度で逃げていては意味ないじゃないですか……っと」

「ふむ……しかし、大した事はないな」

こちらに飛んできた銃弾を弾き、敵勢力を無力化していく。

～ 一時間後 ～

ようやく全員を捕縛、転送しようとした瞬間、一人の犯罪者がソラに向かって宝石のようなモノを投げつける。

「?」

反射的にそれを掴むと強烈な光りを発してソラとアインスを巻き込み世界から消えた。

Side リポ1

病院でエナと会った後、爺さんからの緊急連絡で無人世界に向か

うことになった。

「で、俺も一緒ってな」

「ふうん……、まあいいけどな」

任務は単純明解、無断転移してきた魔導師の捕縛。  
あの爺さん、まだ戦力が欲しいらしい、貪欲だな。

「先に偵察に行った局員の話だと10歳くらいの姉妹だそうだ、  
推定魔導師ランクはS〜SSS……旦那がいねえのが痛いな」

「何とかなるだろ、俺とお前がいりゃあよ？」

Side ソラ

飛ばされて来た世界はさっきと変わらない風景、だが、部隊で使  
っている端末に一切反応がない所を見るとどうやら並行世界らしい。

「困ったね……、こつちだと管理局に捕まりそうだよ……」

「帰る方法は？」

「あるよ、ただ……強い気配が二人……こつちに向かってきている  
んだよね」

強者特有の【気】と【魔力】を感じる、二人ともかなりの修羅場  
をくぐり抜けているみたい。

威嚇すれば【次元の門】を呼び出すくらいの時間を稼げるかな？

「アインス、気を引き締めてください、…威嚇…します」

「分かった」

アインスが答えるのを確認、深く息を吸い普段は秘めている「覇気」を表に出し威嚇する。

S i d e    ヒュドラ

ゾクッ

感じたのはとんでもない威圧感、本能が逃げると警告を発して歩みが止まる。

リポールの奴もソレを感じたのか冷や汗をかいている。

「なんだ？ この異様な威圧感……」

「わからんが……どうやらやる気満々みたいじゃねえか？」

とりあえず落ち着く為にタバコを取り出し火をつけ一服。

凄い威圧感だ……こりゃ面白い。

「リポール……久々に骨のある相手だな」

「ああ……ワクワクしてきた！」

さて、居場所は把握した……やるか。

S i d e ソラ

あれ？ 一時的には止まったけど凄い速さでこっちに来てる？

「ああ……失敗……」

「迎撃するか？」

実際そうするしかないですね、幸いリミッターは今回の任務で外されてますから全力が出せますし。

「アインス、ユニゾンしますよ？」

「心得た」

「ユニゾン・イン！！」

S i d e O U T

立ち上る三色の魔力光、それが収束し白い光りが辺りを照らした。ちょうど到着したりポーとヒュドラ、魔力だけ見れば圧倒的な量だが二人は実に楽しそうな表情だ。

「おらぁ！ いくぜえ！」

真っ先に飛び込んだのはリボー、管理局ならば本来勧告をしなければならぬのだが、ソラの威嚇を布告と認識しているため突っ込んできたのだ。

リボーは希少技能である【重力操作】を使い拳に纏い殴り掛かるが。

ガンッ！

「ぐっ……かてえ!？」

人体から発するにはありえない音が響く、ソラの肉体は度重なる負傷を越えてそれらに堪えられる肉体へ改変されていつていた。魂に刻み付けられた【豊饒】の力の一端である。

「これならどうだ!」

揮発性の麻醉毒を散布しソラの動きを鈍らせようとする。しかし。

「即効性の麻痺毒……まあ、ボクには効かないですけど……ね!」  
「ちいっ……リボー! コイツ毒が効かねえから決めは任せる!」

ヒュドらは毒酸を出すことも出来るがソラは体術を使ってきている、万が一それで殺してしまったては任務の意味がない。直ぐさまバックステップで後退、入れ替わるようにリボーが重力を纏った拳をソラに叩き込む。

「仕方ねえ……おらあ!」

「っ!?! ぐう」

両手を交差し拳を防ぐソラ、しかし先程とは違い殴るのではなく潰す”ように攻撃を変化させたのだ。

いくら重力を乗せ重い攻撃でもソラの防御は抜けない、だが、断続的にかかる重力を堪えるのはソラにとって岩盤を支えるようなもの。

「闇に……染まれ……」

だが、忘れてはいけない。

ソラは今一人ではない、その身の内にはアインスがいるのだ。

「デアボリックエミッション！」

そして、選択した魔法は広域空間攻撃のデアボリックエミッション。

さすがに危険を感じワームホールで退避するリボー、ヒュドラも何とか逃げ出す。

「おい、あれってたしか……」

「ああ……夜天の書……リインフォースの魔法だな……」

闇よ集いて剣となれ

デアボリックエミッションが収束し、大剣の形に変わる、その数約20。

デアボリックエミッションの収束射撃魔法攻撃、デアボリックエミッション・ブレイズ。



光よ集いて剣となれ

更に、ソラの神罰・断罪光剣の射撃魔法版。

「光と闇に抱かれて……倒れよ」

上空には20の黒い闇の大剣群、周囲には80にも及ぶ光の剣群。断罪光剣は光速で発射・到達する射撃魔法、威力自体はCランクと低く連続で当てなければダメージはない、デアボリックエミッション・ブレイズは威力自体はSランクと高いが速度が遅く見切られやすい、着弾後に10m程の空間攻撃になるが普通なら走っても避けられるものだ。

しかし、この二つを組み合わせる事により凶悪な『殲滅魔法』となる。

断罪光剣は威力を削った速度で足止めを、そしてデアボリックエミッション・ブレイズでトドメを刺す。ソラの対広域殲滅戦用の魔法である。

「げっ！？ ワームホー……」

ゆけ……光と闇の剣群よ

瞬間、ワームホールを開こうとしたリボートとヒュドラを神罰・断罪光剣が発射され二人が何も出来ずにその場に釘付けにされ、降ってきたデアボリックエミッション・ブレイズによって意識を刈り取られた。

「さて、【想像具現化】……開け！次元を越える【次元の門】！」

開かれた門をくぐりこの世界から消えるソラ、残されたのはボロボロにされたりボーとヒュドラだけだった。

番外編2「戦いとは？」（後書き）

（あとがき物語の神子の館）

ソラ「というわけで、【魔法少女リリカルなのはGoing My Way】とのコラボSSです」

アインス「今回は勝てたが、状況によつては負けていたかもな」

リボ「ちくしょー！ 攻め方間違えたぜ……」

ヒュドラ「相性悪かったなあ……まさか俺の毒が効かねえとは」

こんな感じになりましたが、シグマ様、よろしかったでしょうか？

次回も番外、U・Tさんの作品とのコラボ、【二人の神仏vsゼフィロス】です

番外編3 「二人の神仏 vs 片翼の天使」 (前書き)

スランプ抜けられないです……

今回はU・T様の作品とのコラボです！

正直こんなんでもいいのかと自問自答してますが……とりあえず本編をどうぞ

### 番外編3 「二人の神仏 vs 片翼の天使」

Side 廃棄された無人世界

ここは度重なる戦争によって不毛の大地となった世界、大地は荒廃し細菌すらいらない世界。

今は管理局すら使用しない廃棄世界だ。

そこに対峙しているのは管理局地上部隊「エルベナルト」部隊長ソラ・フォードとアインス、広域次元指名手配を受けた水無月龍也だった。

「さて、そろそろボクも貴方に勝ってみたいんです」

「ふっ……お前がどれ程成長したか見てやろう」

二人がプレッシャーをぶつけ合うと空間がまるで陽炎のように揺らめく、両者の『気』がぶつかり合い視覚的にも見えるものになってきているのだ。

キーン……

しかし、そこに思わぬ乱入者が現れた。

「むっ……転移を失敗したか……」

黒い魔法陣から現れたのは白い長髪の男、セフィロスだった。

「「「「……………」」」」」

その場にいた全員が黙る、ソラと龍也は一度『気』のぶつけ合いを止め現れたセフィロスを見る。

「血の臭い……………」

「ちっ…………胸糞悪い」

二人は互いに視線を一瞬合わせ、セフィロスに向き直る。

「ほう…………中々面白い経験を積んでいるな…………目の前で母親を見殺しにした少年に、妹をむざむざさらわれた憐れな青年…………クク…………実に愉快だ」

ピシッ

ガラスに輝が入るような音と共に大気が凍りつく、ソラと龍也はそれぞれが覇気を撒き散らしている。

セフィロスは自分の愛剣『正宗』を構える、龍也は自然体のままセフィロスを睨みつける。

「アインス、ユニゾン」

「了解した」

「「ユニゾン・イン！」」

ソラとアインスがユニゾンし、ソラの背中には黒い翼「スレイプニル」と白い翼「天の翼」が現れる。

「ナイト、2nd」

【2ndモード、ロングソード】

さらにナイトも長剣型となり、ソラの手におさまる。

「お前の罪を数えろ……」

龍也とソラが呟いた瞬間れば具現した、ソラと龍也の後ろ。

ソラの後ろには憤怒の形相をした明王、不動明王憤怒尊。

龍也の後ろには黒いマントを着て鎌を持った髑髏、死神がいた。

これらはもちろん実際にいるわけではない、強すぎる覇気が感覚に作用しその影を見せる、わかりやすく言えばスタンドと思っただければいい。

「っ!？」

もちろんセフィロスもそうだった気迫が具現化したものを見たことがないわけではない、だが、二人が放つソレは“神”の座に近い……いや、神と並ぶものだ。

いくら幻影とはいえ、身の丈に合わないものなど具現しない。

“姿”は“本質”を表す、故に十字架や仏像などにも僅かながら“神”が宿る、それを自らの覇気だけで具現させるのは相当の実力がなければならぬのだ。

「ほう……ソラ少年の“影”は不動明王か……」

「そういう龍也さんは“死神”<sup>タナトス</sup>ですか」

二人は冷静そのもの、ちなみにユニゾンしているアインスはソラのおかげで気を抜かなければ耐えられる。

「くっ……（この私が気圧されている？　ありえない……だが、間違いなく目の前にいる二人は規格外……今まで対峙してきた何者より……）」

動けないでいるセフィロスは無造作に歩きだすソラ、剣を向けるでもなくただ歩いて近づくだけ。

「ぐっ……」

だがセフィロスは動けない、ただ歩いているだけということは攻撃の初動がないということだ。

高レベル同士の闘いは先に隙を見せた方が負ける、故に先に動く事ができないのだ。

「……かあ！」

しかし、自らの間合いに深く入ってきたのに耐え切れず刀を振るってしまつ、常人なら見切れぬ速さで放たれる刃、だが。

「甘い……」

「なっ……！？」

その刃はソラの手に捕まっていた、防いだのではなく捕らえられた。

「神罰・轟天雷鳴」

「っ！？」

掴んだまま刀に神罰・轟天雷鳴を打ち放つソラ、セフィロスは鋭



い痛みに片足をつく。

「神罰・怒号烈風」

一度刀から手を離し上空へと吹き飛ばす、そこでようやく龍也が動きだす。

一歩歩いたかと思えば次に現れたのはセフィロスが飛ばされたさらに上空、そこで右腕に雷を纏った状態で制止して狙いを定める。

「墮ちろ……トールハンマー」

拳をふりぬくと巨大な雷の柱となりセフィロスをとらえ打ち落とす。

「がは!?!」

成すすべなく地面に叩きつけられ受け身もとれない。だが、それでも意識を手放さないのは流石といったところか。

「ほう、なかなか頑丈だな」

着地した龍也が無造作に近付き見下ろしながら呟く、その龍也に對してすぐさま飛び起きダメージを感じさせない鋭い突きを放つ。

しかし、龍也は特に驚くこともなくその場から消失する。

「遅いな、この程度か？」

消えたはずの龍也はあの一瞬で背後へと移動していた。

瞬動や縮地ではない、単純な足の速さだけで龍也はセフィロスの背後を取った。

「飛べ」

そして放たれる蹴りによってドラゴンボールよろしく吹き飛んでいくセフィロス、100mほど吹き飛んでそこでようやく停止する、だがこれで終わる訳がない。

「行け……光と闇の剣群よ！」

「降り注げ、数多の雷槍よ」

ソラのデアボリックエミッション・ブレイズと神罰・断罪光剣。さらに龍也の上空から降り注ぐ槍の形をした雷により爆音を響かせセフィロスの姿が見えなくなる。

「逃げた？」

「そのようだな……生き汚い奴だ」

着弾の寸前無理を通して練り上げた転移魔法で逃げ出したセフィロス、もし直撃していたならば五体満足ではなかっただろう。

「……………帰るか」

「そうですね、あまり悪い噂をたてないでくださいよ」

何事もなかったように立ち去る二人。

残されたのは大きくえぐられた大地だけだった。

番外編3「二人の神仏vs片翼の天使」（後書き）

「あとがき物語の神子の館」

イヴ「久々の出番、頑張る」

セフィロス「ぐっ……ここは？」

イヴ「あの世……黄泉の世界、または星の還る場所？」

セフィロス「……………」冷や汗をかいている

イヴ「……ふっ」不敵な笑み

セフィロス「いや……、しかし、たしかに転移で事なきを得たはずだ、それに星に還ればこうしてあることはないだろう」

イヴ「頭いいやつ……、貴方は負けた、それだけ。早々におかえり願う」

セフィロス「……………」

イヴ「粘るのはいいけど貴方ではソラや龍也には勝てない、完結している貴方では進み続ける二人に敵う道理はない」

セフィロス「くっ……………」

イヴ「言うなればあの二人はセフィロトの樹の最上位に位置する、

多少人間辞めても追いつけない、せめて世界に喧嘩売れるくらいにならないと」

セフィロト「二度と来るものか……こんな世界……」

次回からようやく話が進みます！ 次回もお楽しみに！

第7話「ファーストアライト」(前書き)

調子でてきた!

でもあとがき書けなかった……

お待ちしている方は申し訳ありません……

ちなみに今回ちょっと(?)砂糖多めです

では本編をどうぞ!

## 第7話「ファーストアラート」

Side ソラ

訓練を終え、皆で隊舎へ向けて歩きだす。

「じゃ、一旦寮でシャワー使って着替えてロビーに集まるっか？」

『はい』

「うーっす」

アリストくん、上官相手にその態度はいただけないよ？

まあ、彼の自然体だからとやかかくいわないけど。

「あれ？ あの車って……」

前方から走ってきたのは二台の車、前のはスポーツカーで後ろのはリムジンタイプ。ということは。

「はやてさんにフェイトさん、それにアリサさんにすずかさん、あ、アインスも到着ですね」

フェイトさんの車の屋根の部分がオフになり、二人が手を振る。

後ろのリムジンから降りてきたのはアリサさん、すずかさん、アインスの三人。

「あ、新人の皆は初めてだよね」

「うはっ、めちやくちや美人ww」

「こら、ボクの彼女さん“達”を変な目でみないでくださいよぬ？」

「サー、イエツサー！ ……ん？ 複数系？」

少し威圧感を出すと敬礼するアリストくんだけど、何か腑に落ちないみたいで首を傾げている。

「はじめまして、私はアリサ・バニングス、階級は陸曹よ、そしてソラの恋人よ」

「私は月村すずか、階級はアリサちゃんと同じく陸曹だよ、私もソラくんの恋人」

「リインフォース・アインスだ、階級は一等空尉、ソラの融合騎だ」

三人の自己紹介に新人FWメンバーは呆気にとられている。

「あ、ちなみに私もソラくんの恋人なんよ？」

「ぶ、部隊長まで!？」

はやてさんの言葉にティアナさんが驚きの声を上げる。

「ふふ、まあ実はまだいるんですけどね？」

「何股かけてるんです？ ソラさん……」

「同意の上ですよ？ それに全員愛してますから」

笑顔で言うところエリオくんやキャロちゃんも真つ赤になっていた。

ティアナさんやスバルさんも顔を少し朱に染め視線を逸らしている。

「あつついすねえ、つかソラさんって意外と欲張りっすか？」

微笑みながら頷くと、尊敬の眼差しで見られた。

「ほら、皆さん、シャワーを浴びて来て下さい、ロビーには一時間

後に集合です」

『はい!』

Side リユウト

シャワーを浴び終わり、ロビーでアリストやエリオと話していた。

「へえ、エリオって初めての自分専用デバイスがストラダーなんだ、いいなあ」

「はい」

「俺はそこまでのいいのは貰ったことないな」

実際俺のは龍也さんから訓練の為に貰ったやつとカリムさんに貰ったこの剣型のみ、まあアリストに比べれば高価なものだがな。

「ところでエリオよう、ぶつちやけキャラ好きなんかあ？」

ニヤニヤしながら聞くアリスト、エリオは突然の事にアタフタしている。

「え!?! あの時?!」

「ククク……初々しい反応じゃのうww」

「やめる馬鹿アリー、邪推するな」

拳一発黙らせる、だが諦めてないようでニヤニヤを止めてない。

「ククク……俺は知ってるぞリユウトっち?」



「何をだ？」

思い当たる所がないから聞き返すと、さらに笑みを深める。  
なんだか知らないが嫌な予感がするぞ？

「お前さん、時々目でティアナを追っかけてるだろ？ しかも訓練  
終了あととか何気ないときにな？」

「なっ……そんなわけな……」

「ククク……、しかも胸やお尻なんかを……リュウトっちも男だね  
えww」

ちっ、そんな事はないはずだ！ 俺はコイツとは違うんだからな。

「そういう貴様はスバルを見ているだろう！ 俺より露骨に！」

「うぐっ……や、あの身体つきは卑怯だて？ 思わずガン見するく  
らいによう？」

「あ、あの……後ろ……」

「「？」」

ゆっくりと振り返るとそこには湯上がりの少女が三人、ティアナ・  
スバル・キャラロが微妙な表情をしている。

「む……」

「う、わ……」

何と言うか……、ばつがわるい……。

「アリスト、あんたスバルをそんな目で見てたわけ？」

「そ、その……」

「……アリストくんのえっち……／／／」

「ぐはっ」

俺が言うのも何なんだが……、アリストに対して頬を染めながら上目遣いにその発言は逆効果だと思っぞスバル？

Side ティアナ

呆れ顔のリユウトを見ながら先程の会話を思い出す。

リユウトとは度々視線が合うから不思議に思ってたんだけど、まさかそんな目で見てたなんて……。

あゝも、変に意識しちゃうじゃない！ リユウトって見た目力ツコイイし落ち着いてる、それに気遣いできるやつだから人気は六課内でも高い、そんなやつが私なんかを気にしてるって聞けば私だつて動揺するわよ！

……って、誰に言ってるんだか。

「悪いか！ だってあの揺れるおっぱいがどうしてもきになっ」制裁……覇っ！」「グベラッ！？」

リユウトの鋭いボディーで吹っ飛んでいく、まあ自業自得ね。しかし、気になるわね…… 本当に私を気にしてるのか……。

「あら？ 皆どうしたの？」

「なんか騒がしいわね」

そこに現れたのはソラさんの恋人という二人、たしか……。

「バニングス陸曹、それに月村陸曹」

「名前でいいわよ？ 何？ なにかあったの？」

床で痙攣しているアリストを指差しながらバニン……アリサ陸曹が聞いてくる。

「えっと……実は……」

「あゝ、なるほど」

「ふふ、皆青春だね」

アリサさんとすずかさんは納得の表情、そして。

「リュウトだっけ？ たしかにあいつはティアナを気にしてるんじゃない？ さつきからちらちらとこっち伺ってるし」

「まあ、恋愛感情を抱いているかは定かではないと思うけど、たしかに気にしてるね」

さ、流石恋人持ち……説得力あるわね。

「でもソラは受け身よ？」

「そうだね、ソラくんからの告白ってないよね？」

ソラさん、貴方一体何者ですか？

「ま、ぶつちゃけ私たちが先に告白しちゃうからなんだけどね」

「あ、あはは」

わ、わからない。

ソラさんのイメージがわからなくなってきたわ。

Side カリム

今日の書類を片付けて一息つくと、計ったようにシャツハから連絡が入る。

どうやらはやてが来たみたいね。

「いらつしゃい」

「今大丈夫やったか？」

「ええ、今からお茶を用意するわね」

テーブルに並べられたクッキー、それにケーキが一つずつ。

「ごめんな？ すつかりご無沙汰してもうて……」

「気にしないで、部隊の方は順調みたいね」

「カリムのおかげや」

「そういう事にしておくと、イロイロお願いもしやすいかな？」

実際色々厄介になりそうなのよね……、今回の事件は。

「なんや？ 今日の会って話すんはお願い方面か？」

私は一旦言葉を切り、部屋を暗くして最近上がってきた報告案件をディスプレイに表示する。

「これガジェット……新型？ それに見慣れんのもあるなあ……」  
「今までの1型以外に新しいのが二種類、戦闘性能はまだ不明だけど3型はわりと大型ね。 それと最近現れ始めた【アンノウン】、仮称【キメラアニマル】……こちらも詳細は不明ね」

一応クロノ提督には触りくらいは報告したけれど、大丈夫かしら。

「これは！」

「それが今日の本題、一昨日づけでミッドチルダに運びこまれた不審貨物」

「レリック……やね？」

「その可能性が高いわ、2型と3型が発見されたのも昨日からだし」

キメラアニマルにしてもそう、どうもこのアンノウンもレリックを狙っているみたいだし。

「でも、レリックが出るにはちょうど早いような……」

「ええ、だからこそ会って話したかったの」

レリックにしても、その後にしても対処を失敗するわけにはいかない……。

気になる情報もあるし、それにあの方からの話ではそれだけではおわりそうにありませんし。

「大丈夫や、うちの即戦力の隊長陣はもちろん、新人FWメンバーも育ってきてる、そやから安心してな？」

「うわぁ、これが……」

「あたし達の新デバイス……ですか？」

「そうです　設計主任私、協力、なのはさん・フェイトさん・レイジングハートさんとライン曹長」

おいらは目の前にあるデバイスを注視する、形はロケット型、中央にデバイスコアが嵌められている。

リュウトつちのは指輪型、得に装飾とかはない。

「皆が扱う事になる6機は、六課の前線メンバーとメカニックススタッフが技術と経験のスイを集めて完成させた最新型！ 部隊の目的に合わせて、そして、皆さんそれぞれに合わせて作られた文句なしに最高の機体です」

ライン曹長が手を動かすとそれに招き寄せられるようにライン曹長の周りに浮かび、おいら達の手に渡される。

「う、あ……感動」

Side　なのは

遅れて到着するとどうやらもう皆デバイスを受けとった後みたいだね。

「ナイスタイミングです、なのはさん」

「今から説明？」

「はい」

シャーリー説明中

デバイス説明中にティアナがリミッターについて聞いてくる、そういうえばチャンス説明してなかったなあ。

「あゝ、私達はデバイスだけじゃなくて本人にもだけどね」

「え？ リミッターがですか？」

まあ、地上じゃあんまりないもんね。

「能力限定って言うてね？ うちの隊長や副隊長は皆だよ？」

皆がイマイチ理由がわからないようで首を傾げている、ティアナやリュウトくんはちよつと感づいてるみたいだけど。

「ほら、部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない？」

「あ、はい……そうですね」

「一つの部隊でたくさん優秀な魔導師を保有したい場合は、そこに上手く納まるよう魔力の出力リミッターをかけるですよ？」

「まあ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね」

たしかに、色々無茶をしたからなあ。

「うちの場合だとはやて部隊長が4ランクダウンで、隊長たちはだ

「いたい2ランクダウンかな？」

「4つ?! たしか八神部隊長つてSSランクのはずだから……」  
「Aランクまで落としているんですか？」

まあ、普通は驚くんだろうけど、うちの部隊にはまだ上がいるからなあ。

「ちなみにソラさんは6ランクダウンですう、無茶って言ったのに聞かないんですよ?」

「6ランク?! Bランクまで落としてるんですか?」

私は2.5ランクダウンのAAランク、このままだと皆の相手はきつくなりそうだなあ。

そろそろデバイスの説明をしようとした瞬間、けたたましく鳴り響くアラート。

第一級警戒のアラートだった。



第8話『キメラアニマル』（前書き）

今回は短いです

あと今回あとがきにゲストが来ています！

では本編どうぞ！

## 第8話『キメラアニマル』

Side ヘリ内部（ソラ視点）

今回の出撃はスターズ・ライトニング・フェザースの隊長達と新人達。

ボクはフェザース1、リュウトくんはフェザース3、アリストくんはフェザース4。

「作戦はスターズとライトニングがリニアの前後から重要貨物室のリックを確保を、フェザースは車体上で新たに発見されたアンノウン”キメラアニマル”を相手にします」

キメラアニマル、映像情報だと恐らくクローン技術の失敗。それも”動物”ではなく”人間”の。

そして、恐らくは”神子”のクローンだ……。

神子の遺伝子は通常の人間と比較すると0.1%ほど違いがある、本来これ程違いがあると”人間”の姿にはならないのだが、神子は全員ちゃんと人の姿だ、中身まではわからないですけどね？

これを無理矢理クローン技術で造ろうとすると差異の0.1%の遺伝子の影響で人ではないナニカになってしまっ、そのあたり、イヴを生み出したあの男は天才だったのだろう。

「ソラさん！ 準備完了です、どうぞ！」

っと、思考に走りすぎていましたね。

「では行きますか、フェザース1、ソラ・フォード行きます」

Side out

「次！ フェザーズの新人共！ 気張れよ！」

「フェザーズ3、リュウト・ハザマ」

「フェザーズ4、アリスト・ノヴァ」

「「行きます！」」

二人がへりから飛び出し、新たに手に入れたデバイスを取り出す。

「行くぞ……スコル！ セットアップ！」

【セットアップ】

機械音声と共にリュウトの服装が変わる、水色の半袖に灰色の長ズボン、そして白い腰布。

デバイスであるスコルは小太刀型、デバイスコアは柄に組み込まれている。

「テンション上がってきたああ！ アレス、セットアップ！」

【セットアップ】

機械音声と共にアリストの服装が変わる、緑の半袖に藍色のズボン、リュウトと同じく白い腰布。

デバイスであるアレスは管理局魔導師の標準と同じ姿の杖になっている。

「ふむ」

「あべしっ!？」

リュウトは無事着地、アリストは着地失敗しこける、それでもちやんと落ちてないのは幸いだったのだろう。

「二人とも、攻撃準備。ボクはなるべく手を出しませんからいつも通り頑張ってくださいね?」

「「はいっ!」「」

二人がいつも通りの位置につく、だが、二人は直ぐには動けなかった。

目の前にいるアンノウン“キメラアニマル”は分かりやすく言えばエ〇アのシトに似ている、大きさはだいたい3mほどで見た目はヒトガタ、ただ目らしきものが4つほどある。

「捕獲は考えなくていいです、アレは生物として終わってしまったていますから……」

悲痛な表情のソラ、無茶なクローンのせいでもかなり遺伝子に異常が出ている、自然ではない方法で生み出されたクローンはただでさえテロメアの量が少なく寿命が短い、更に遺伝子情報が人間と異なる神子の場合さらだ、それを“創り出す者”である豊饒の神子であるソラは痛いほど理解してしまっていた。

「だから……あの子を眠らせてあげましょう」

「「了解!」「」

先に駆け出したのはリュウト、小太刀を逆手に持ち走り出す。

「スコル!」  
『アイスブレイド』  
「氷剣」

【アイスブレイド】

リュウトの足元に蒼色のベルカ式魔法陣が現れ、スコルに冷気を伴った魔力が刃を覆う、最短距離を駆け抜け。

「氷狼一閃！」

渾身の一撃を見舞う、だがキメラアニマル自体の強固な身体には外傷は見当たらない。

「アレス、収束はまかせた！ フォースバスター！」

【フォースバスター】

打撃に強いと判断してアリストが砲撃を放つ、収束を完全にアレスに任せ自分はその他の全ての術式を構築する。

アリストは馬鹿である、だが、ある意味天才でもある。

アリストはあらゆる才能に欠けるが魔法“圧縮”に関してのみ類い稀なる才気をもつ、“収束”とは違い“圧縮”は魔力の効率運用性を指す。魔力の圧縮を高めると術式の展開速度が上がり、リソースが通常の三分の一まで低くなる、この才能を持つ者は本来はユニノなどのデバイス適性が低い者に多い。

故にアリストは苦手な収束をデバイスに任せ、本来ならばかなりの負担になる他の術式を一手に引き受けられるのである。

<クオオオオオオオオ！！！>

ダメージが通り多少怯むキメラアニマル、しかし、頭を振り咆哮を上げる。 どうやら決め手には欠けているらしく、逆に威圧感が増す。

「……予想以上に強いですね……」

ソラが一步踏み出す、そしてナイトを構えキメラアニマルに切っ先を向けて深く息を吸う。

「……ナイト……カートリッジロード！」

【カートリッジロード】

ソラの掛け声と共に通常の倍はあろうかというカートリッジが排出されナイトの刃が強く輝き出す。

「砲撃は久しぶりですね……ジャッジメントカノン、レディー！」

【ジャッジメントカノン、チャージ開始】

展開されたのは環状魔法陣、そして、アリストのフォースバスターを軽く凌ぐ収束率の魔力球。

その危険性に気付き、キメラアニマルが攻撃しようとするが既に遅し、チャージは完了していた。

【撃てます】

「ゴーツ！」

ソラの掛け声と共に撃ち放たれたジャッジメントカノンはキメラアニマルの上半身を蒸発させ、空へと軌跡を残し消えた。

「……」

「す、すげえ……」

その光景に思わず固まるリュウトとアリスト、遠くでフリードに乗っていたキャロとエリオは啞然としていた。



## 第8話『キメラアニマル』（後書き）

「あとがき物語の神子の館」

ソラ「短いですけど、今日はこれまでです」

イヴ「今日はゲストがいる、『魔法少女リリカルなのは七つの大罪』より、アリスに鈴蘭が来た」

アリス「ソラくんFC会長！ アリス参上 久しぶりのソラくん」

ソラ「むきゅう」

鈴蘭「初めまして……って、アリスさん？ 何故抱きしめているんですか？」

アリス「ソラくん分補給よ？」

鈴蘭「え？ あ、はい？」

イヴ「アリス、放れた方がいい……遅いかも知らないけど」

アリス「ん……あと5分」

ソラ「よつと」 器用に抜け出した

アリス「あゝあ……っと、そういえばソラくん、アリサ・すずかはやてに次いでまだ彼女がいるってホント？」



鈴蘭「も、モテモテですね」

ソラ「えっと……多分前作から読んでいる方なら予想可能ですよ?」

アリス「……………紅い子?」

ソラ「正解です」

鈴蘭「?????」

イヴ「気にしたら負け、もうそろそろ時間、お土産わたす」

【ソラ手作りワッフル】

【イヴ手作り各種フルーツジャム】

アリス「いただいてくね、じゃまたね!」

鈴蘭「お、お邪魔しました」

村正様、こんな感じでいいでしょうか?

第9話『スキルアップ』（前書き）

最近執筆が遅くてすみません

更には感想なども書けずすみません

感想・リクエストなどお待ちしております

皆さんの声になりますゆえ

では本編どうぞ

## 第9話『スキルアップ』

Side アリスト

前回の初出勤後、個人指導が始まった。  
皆自分専用のデバイスが揃ったからなんだろうな。　おいらとり  
ユウトっちはソラさんから教わることになったんだけど……。

「ぶへっ!?!」

「ほら、弾道予測が甘いですよ」

ソラさんの指導は肉体に刻み込むタイプらしく、あんまりアドバ  
イスはない、リュウトっちは基本スペックが高いからいいんだろう  
けど。

「ソ、ソラさん……断罪光剣は……無理……」

「慣れればいけますよ？　ほらほら、避けないとちよっと痛いです  
よ」

「アリー、強く生きる」

「ぐっ……うおおー!」

リュウトっちは辺りを見渡し避けれるルートを見つけて駆け抜け  
ている。

ソラさんは事前においら達に魔法を一つずつ伝授してくれた。

おいらは直線高速移動系魔法『ストライクムーブ』、リュウトっ  
ちは多変速移動系魔法『ホークムーブ』。

スキル的にはおいらはCランクくらいスキルでリュウトっちは  
AAランクのスキル、使い勝手はどちらもいいけど場所によっては  
優位性がかかる癖のある魔法だ。

「こうなりや自棄だ！」

ソラさんは事前にもう一つだけアドバイスというかヒントをくれた、曰く、『閃いたら試す』らしい。

「アレス！ フルアーマーフィールド！」

【フルアーマーフィールド展開】

で、閃いたのがこの魔法。

フィールド系魔法の応用でガジェットを倒したのもコレの原形、防御をそのまま武器として使うもので意外と使える。

思惑通り断罪光剣は貫通せずに目標ポイントまで到達……したけど。

「つ、疲れた……」

「ふむ、やっぱりアリストくんは回避より突撃ですね、リュウトくんは回避つと……」

何やら頷きながらいつてらっしゃるが、もうつこけません……。

「訓練はこれまで、二人は他の皆よりかなり負担がかかる訓練でしたから先に休憩にしてもいいですよ？」

「うつつす……」

「はい……」

休憩しながら空を見上げる、まだ他の所からは訓練の音が聞こえる。

おいらとリュウトっちは他の皆と違い身体が出来上がってしまった、だから訓練内容も大分違うらしい。

本来ならスバル達みたいに地味な訓練ばかりなんだろうけど、ソラさんはおいら達を今までのスタイルから変えようとしているからというのもある。

本来センターガードのおいらをフロントアタッカーに、ガードウイングのリユウトっちをオールラウンドにしようとしている。

ソラさん曰くその方がおいら達に合っているらしい。

ピーー

聞こえてきた笛の音に身体を起こして集合場所に向かう。

「はいお疲れ、個別スキルに入るとちよっとキツイでしょ？」

「ちよっとと……はあはあ……言うか……」

「その……かなり……」

その発言には同意だぜい、ティアナにエリオ、これは地獄や。

「フェイト隊長は忙しいからそうしょっちゅう付き合えねえけど、あたしとソラは当分お前らに付き合っつてやるからな」

「あ、ありがとうございます」

苦笑いでヴィータ副隊長に返すスバル、そっか……この地獄のような特訓はしばらく続くのか……。

「それから、ライトニングの二人は特にだけど、スターズの二人も身体が成長してる最中なんだからくれぐれも無茶はしないように」

「……はい」「……」

「あ、フェザースの二人は身体は完成してるからビシバシいくよ？」

「……はい」「……」

ソラさん……、ちょっとは優しくしてください……。

「じゃ、お昼にしよっか」

『はい！』

おいらもだけど、お昼って単語には皆元気に返事しちゃった、仕方ないよねww

隊舎のメイン玄関につくとちょうどはやて部隊長とシャーリーさんが中から出てきた。

「あ、皆お疲れさんや」

『はい』

「はやてとツヴァイは外回り？」

「はいです！ ヴィータちゃん」

「うん、ちょうどナカジマ三佐とお話してくるよ、スバル、お父さんやお姉ちゃんになんか伝言あるか？」

へえ、ヴィータ副隊長って身内には呼び捨てなんだ……。

「いえ、大丈夫です」

「じゃ、はやてちゃん、ツヴァイ、いつてらっしやい」

「ナカジマ三佐とギンガによろしく伝えてね」

「はやてさん、道中気をつけて」

「うん！」

「いつてきまゝす」

おいらは厨房の一部を借りておいらはちょっとした作業中、少ない趣味の一つのデザート作り。

スバルはアイス好きらしいという情報を入手したからな、腕によりをかけて作ってる訳だ。

「すごいねえ、男の子なのにい〜」

「コック長、パティシエには男も多いっすよ?」

「まあねえ〜、でもこのレベルは中々いないよう?」

うちには舌の肥えたお母様がいらっしやるからねえ〜。

「ジェラートにフルーツソース……しかも付け合わせも手作り……」

FW辞めてうちでパティシエやらない〜?」

「お断りっすよ」

うっし、完成!

「んじゃあざーした!」

「はいよ〜、青春しなあ〜」

厨房を出て保冷ケースにしまったアイスと共に皆の所に行く。

「あ、アリストさん」

「よう! つかすげえ量だな……」

山のようなスパゲティーを見て思わず呟く、すげえなあおい。

「おいらも食っていいかい？」  
「いいよ、そのケーキ何？」

お、スバル食いつきいいな、女の勘ってやつか？

「おいらお手製ジェラートアイスだ、お好みでフルーツソースも用意してあるぜ」  
「うわあ」

あ、スバルに犬の耳としっぽが見える、やべえ……かわいい。

「ん？ かなりの量を作ったんだな、アリー」

「まあね」  
「…なるほど」

食事を進めているとあの山がどんどん減っていつてる、これでもだデザート入るんだからすげえよな。

「それにしてもアリストくんって意外な才能あるんだね」  
「まあねえ、残念ながらデザート以外は作れないけどね」

む、飽きてきた……山のようなスパゲティーだけではやはり味が単調だな。

「アリストくん！ アイスアイス」  
「あいよ」

保冷ケースからアイスを出してコック長から借りたガラスカップに山盛り乗せてスバルに渡す。



他の皆にも普通の量に乗せて渡す、フルーツソースは中央に置いておいた。

「ん〜 おいしい〜 ソースもイイ感じだね」

「へえ、おいしいじゃない」

「甘くておいしい〜」

「すごいですね、アリストさん」

「また腕上げたな……」

「うおっ！？ 予想以上に大好評、これは嬉しいねえ。」

「ん〜、アイス？」

「誰が作ったの？」

皆でアイスを食べるとアリスさんとすすかさんがやってきた。

「おいらっすよ？ 食べます？」

「いただくわ」

「うん、貰うね」

やっぱり女性ってのは甘いのが好きなんだろうな。

「後でソラにも差し入れてあげてくれない？ あの子甘いもの大好きだから」

「イイツすよ？ しかし、アリスさんもソラさんにぞっこんなんすね？」

「当たり前よ、既に10年の付き合いだしね」

「10年！？ 長いな！？」

「籍はまだ入れてないからね、まだ恋人なんだよ？」

あの人、多重婚するつもりなのかな？

「ん？ アリサにすずかじゃねえか、何食ってたんだ？」

「あ、ヴィータじゃない、アリストからアイス貰ったのよ」

「マジかよ！ おいアリスト、あたしにも食わせる！」

うわっ！？ すげえ食いつき？！

なんだ？ ヴィータ副隊長もアイス好きなのか！？

「あ、はい、幸いまだ量はあるんで」

「ギガ盛りにしてくれよ」「了解！」

あ、あんなに（15人分）作ったのにもう一人分しかない……、  
恐るべし。

Side ソラ

アリストくんからの差し入れでアイスを貰って食べながら訓練メ  
ニューを考える。

「アリストくんは……体力付けてもらうしかないね……リュウトク  
んは剣技と抜刀を教えようかな？」

となると、久々にアーサーの出番ですね。

抜刀についてはすずかさんをお願いすればいいかな？

「ん〜……あと……」

あのキメラアニマルについての報告書、コレについても進展があった。

「まさかイヴの作り手の弟子とは……」

あの男、ホントに余計な事ばかり……。  
ああ、忙しくなりそう……。

「ソラ、午後の訓練はじまつぞ？」

「あ、ヴィータさん、わかりました」

椅子から立ち上がり一度背を伸ばしてから、ヴィータさんに近づく。

「ソラ、その……なんだ……あ、アレしてくれ／＼」

「……一応仕事中だけど……最近仕事ばかりではやてさん以上に会ってなかったから特別だよ？」

ヴィータさんの前髪を少しずらしてキスをする。

たまに甘えてくれるから、応えないといけないですよね？

「……ん……あふ……／＼」

「ん……、さ、訓練に行きますよ？」

「……おう／／」

頭を撫でて二人で訓練スペースへと向かった。

## 第9話『スキルアップ』（後書き）

（あとがき物語の神子の館）

イヴ「私もアイス食べたかった」

ソラ「つと、今日もゲストが来ていらっしゃいます、えーつと…」  
魔法少女リリカルなのは ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつのやることだ』から、菅原京平さんと炎九龍くんです」

京平「うお、ここがああ館かあ」

九龍「こら、ソラさんに失礼だろ！」

ソラ「気にしないでください、たしかに珍しいものがいっぱいあります」

イヴ「ソラのファンクラブの人とかからの貰いもの多い」

京平「ファンクラブあるんだ……」

九龍「すごいな」

ソラ「九龍くんも出来てそうだね」

京平「聖祥の三大天使のせいで活動は下火だけだな」

九龍「????」

ソラ「あ……九龍くんって将来女性で苦勞しそうですね」

イヴ「ん、たしかに」

京平「俺に被害がなければいいや」

九龍「よくわからない」

イヴ「残念ながら時間、作者の氣力が限界みたい」

ソラ「こちらはお土産、【三盾のレリーフ】と【三大天使のレリーフ】、一応厄除けにしてあるよ」

イヴ「番宣どうぞ」

京平「うし！ 平穩に生きたい俺の下に如何にも訳ありな女性が舞い降りてきた所から始まる物語」

九龍「親友である京平は如何にしてそれらを乗り切るのか」

京平「『魔法少女リリカルなのは ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつのやることだ』をよろしくお願いします」

九龍「長いよな、タイトル」

安眠枕様、  
こんな感じでもろしかったでしょう？

第10話『ホテル・アグスタ 前編』(前書き)

短いですが

前中後編予定です

感想が欲しいです……

では本編どうぞ

あとがきではアリスト&リュウトのちょっとした設定があります

## 第10話『ホテル・アグスタ 前編』

Side ソラ

深夜、午後の訓練が終わった後訓練スペースで一人反復練習をこなす。

最近嫌な予感が多いから調子を戻さないと痛い目にあいそうだしね。

「よっ……はっ！」

1stモードのナイトを振り型を確認する、重い大剣型のナイトでは高速の戦いは難しい、本来ならホークムーブやプラスパワーなどと併用するのが望ましいけど、あまり魔力を無駄遣いは出来ない。

「ふう……」

汗を拭い、空を見上げる。

記憶に靡げな故郷の空とも、地球の空とも違うミッドの空を見ながら、守るべき人が増えた……と、そう思う。

言うなればこの空がボクの守るべき人達、夜天のはやてさん、月のすずかさん、太陽のアリサさん、雲はヴィータさんかな？

空を見上げていると近づく気配をして振り向く。

「……ん、八雲さんですか？」

「ああ、よっやく一区切りついたからな、帰還できたよ」

現れたのは八雲さん、あのキメラアニマルについて調べてもらっていたのだ、【エルベンラルト】において捜査に適しているのは八



雲さんくらいだったからというのもあるけど。

「わかったのは、あれらキメラアニマルが神子のクローン体であること、それを行っているのがあの男の弟子だということ、そして、それらの最終目標が【奇跡の神子】の復活だということだ」  
「っ!？」

【奇跡の神子】の復活!? まさかそんな大それたことをしようとしていたとは……。

【奇跡の神子】とはエルベンラルト初代の神子にして、全ての神子の母、彼女はたった一人でエルベンラルトを築き上げ【受胎告知】によって全ての神子を産んだとされる、因果を操り如何なる攻撃をも彼女を傷つける事はなかったらしい。

「なるほど……それでキメラアニマルなんてものを……」  
「ああ、正直胸糞悪い話だな……、まだ普通に人の形をとっているなら救いようはあるが、あそこまで“壊れて”しまつては殺すほか救う手だてがない」

たしかに、アレは酷かった。

「……どれだけ犠牲をだせばいいんでしょうね？」  
「わからない、だがそう多くない事を祈るだけだ」

肩を竦めながら咳くように言う八雲さん、その目には悲しみの色が見て取れた。

Side はやて

キメラアニマルについての報告書を読み、思わずため息をついてまう。

数はそない多くはないやろけど、対応魔導師ランクAAA以上推薦ゆうのは痛いなあ。

「明後日はアグスタの警備任務やし……、現れんのを祈るしかないなあ」

新人メンバーでは火力不足やし、あんまソラに出てもらわうわけにもいかへんしなあ。

しかも殺すほかあらへんちゆうのはいただけへんな、アリストくんやリュウトくんは一度戦闘しとるけど大してなにもできへんかったし、殺しはして欲しくない、後からソラに聞いてみたらトドメは最初から自分が刺すつもりやったらしいし。

「……フェイトちゃんやなのはちゃんにも頼みたくないなあ、絶対背負ってまうし」

あかん、結局はソラに頼む事になるわ……、あとは八雲くんくらいしかおらへんな。

「あゝ……レリックだけでも辛いのに……」

これはあの予言は間違いないんやろ……。

翌日

Side ソラ

翌日の訓練、最初の打ち合わせの時間。

「アリストくん、2ndのリミッターを外します」

「へ？ お、おいらっすか!？」

「うん、君はもう射撃や砲撃の成長は見込めませんからね」

実際彼はクロスレンジの方がいい、彼の収束技術を見ればあのフルアーマーフィールドを活かしたクロスレンジ戦を鍛えたほうが確実だ。

Side ティアナ

その言葉に耳を疑った、あのへりでの会話では一番才能がないと聞いていたアリストが誰よりも早くリミッター解除。

たしかに私達の中で一番の魔力を持っているのはアリストだ、でも技術面ではまけているとは思ってなかった、やっぱりこの部隊で凡人は私だけなんだ……。

Side アリスト

あれから午前の訓練、アレスの2ndモード、ダブルシールドナツクル。

おいらのクロスレンジ戦に大いに活躍していた。

「うりゃー!」

「ん、いい感じだね」

相手はソラさん、こっちはBJと2ndモード起動した状態で本気でかかっているのにソラさんはデバイスすら起動せずにおいらを相手に余裕みたいだ。

「くう……フォースフィスト！」

「甘い、せやつ」

「のおおお!？」

魔力を纏った拳で殴りかかったが片手で腕を掴まれ投げられた。マジパネエ。

翌日

Side ヘリ内部

アグスタ警備任務、その概要の説明がされていた、その時ガジエツトの作者のジェル・スカリエツィ、さらにキメラアニマルについての情報も示されていた。

驚きはあったもののとりあえず新人メンバーは今後は今まで通りガジエツトを相手にすることとなった。

万が一遭遇した場合は撤退する事になる。

「あの……シャマル先生、さっきから気になっていたんですけど、その箱って？」

「ん？ ああこれ？」

一通り説明が終わった後、キャロが控え目に手を挙げてシャマルの足元に置いてある四つの箱について質問する、それに対しシャマ

ルは笑顔で。

「ふふ 隊長たちのお仕事着」

S i d e ホテル・アグスタ

「いらっしやいませ、ようこそ」

差し出された身分証明書、それを見て驚く受付。

「こんにちは、機動六課です」

そこにはそれぞれ社交用のドレスに身を包んだ4人の人物がいた、黒を貴重としたドレスのフェイト、薄い青色を貴重としたドレスのはやて、桃色を貴重としたドレスのなのは、そしていつぞやと同じ紫に金の刺繍の上に白いロングスカートの上のソラ。

ちなみにソラは眼鏡をかけて髪を流しているため周りにはソラとは認識されていない。

S i d e 龍也

ホテル・アグスタの裏手で一服、スカリエッティの談ではここに奴が欲しがっている骨董品があるらしい、アイツは悪ではあるが嫌いな部類ではない。

「とは言え、暇だな」

時間的にあと4時間はある、あの少年が居ては迂闊に動く訳には  
いかん、今のアレに手加減出来るか微妙だからな。

「ん？ この気配は騎士ゼストにルーテシアか……」

やれやれ、奴は頭がいいな……俺は陽動か。

「まあ、奴の尻尾を掴むために協力するか」

## 第10話『ホテル・アグスタ 前編』（後書き）

（あとがき物語の神子の館）

ソラ「ホテル・アグスタ前編でした」

イヴ「ん、今回はゲストいない。だから新キャラのアリストとリユウトの設定をのせる」

名前：アリスト・ノヴァ

年齢：17歳

魔法：ミッド式

身長：168cm

体重：59kg

髪：黒（ボサボサで目がかくれている）

瞳：深紅

技能：魔法圧縮

特技：お菓子作り

備考：

普通の家庭に生まれ育った青年、性格は陽気でお調子者。  
管理局に入った理由は父親の影響。

名前：リユウト・ハザマ

年齢：16歳

魔法：近代ベルカ式

身長：175cm

体重：62kg

髪：赤みがかった茶髪（短くも綺麗な髪質）

瞳：深い青

技能：魔力変換資質・氷結

特技：機械整備

備考：

プロジェクトFの遺産、本来ならスカリエツティに引き渡されていた。

龍也の下で今の技術を学び、そして自らのような被害者をださせないために管理局入りする。

ソラ「ではまた次回」

イヴ「お楽しみに」



第11話『ホテル・アグスタ中編』（前書き）

だいぶ遅くなりました……けっこう省いたりしています  
風邪のと家の事情のため更新は遅くなります

あとアリストがちよい主人公っぽく見える回です

まあサブメインではある子でありますから間違いはない

感想・リクエストお待ちしております

では本編どうぞ

## 第11話『ホテル・アグスタ中編』

Side ゼスト

遠くに見えるホテル・アグスタ、あそこにはレリックはないがルーテシアが来たがった為足を運んだ。

しかし、あの立ち上る二つの大きな気配はなんだ？ 一つは機動六課のソラという少年だろうと予測はつくが……。

「……ドクターのおもちやが近づいてきてる」

「……そうか、だがお前の捜し物はあるそこにはないんだろう？」

何も言わずアグスタを見つめるルーテシア、その目線の先にモニターが現れる。

『やあ、騎士ゼストにルーテシア、ごきげんよう』

「ごきげんよう、ドクター」

「何の用だ」

知らず口調が冷たくなるが仕方のない事だろう、私は一度コイツに殺されているのだからな。

「いや、今回はお願いしたいことがあってね、実は僕の宿敵が欲しい骨董品が一つ密輸されているんだ、よければ回収して欲しいんだが……」

「断る、レリックが絡まぬ限り互いに不可侵と決めたはずだ」

宿敵という所で珍しくあの男が苦々しい表情をしたのが気にはなかったが、わざわざ片棒を担ぐ積もりはない。

「ルーテシアはどうだい？ 頼まれてはくれないかな？」  
「いいよ」

「優しいなあ……ありがとう、今度は是非お茶とお菓子でも奢らせてくれ。ターゲットと協力者のデータは君のデバイス、アスクレピオスに送ったからね」

「うん、それじゃあごきげんようドクター」

「ああ、吉報を待っているよ」

静かな微笑みと共にモニターが消える、あんな表情をするとは珍しい。

「……いいのか？」

「うん、ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターの事そんなに嫌いじゃないから」

「…そうか」

マントを受け取り少し離れる。

俺の目が曇ったのか……、それともルーテシアの目が正しいのか……。

「吾は乞う……」

Side アリスト

ガジェット反応が現れてからおいら達はアグスタ前を固めていた。どうも空気が悪い……、何とも言えない重苦しさ。

「はあ……嫌な予感」

「……気を引き締めるアリー、こういう空気の際はミスが出やすい」  
「あ……おいらは大丈夫、慣れてっから……けど気負ってる奴は  
やばいな」

独特の緊張感には慣れない奴にはキツイ、エリオやキャロはそれで  
動きが鈍るかもだしな、あとはティアナあたりか？

「あ！」

「キャロ、どうしたの？」

「ん？ どした？」

「近くで誰かが召喚を使ってる……」

シヤマル先生の方でも感知したらしい、かなり大きい魔力反応ら  
しい。

「……ん……アレス、今のうちに2ndに変更、何かヤバ気だし」  
【2ndモード移行します】

やれやれ、こりゃ副隊長達は突破されるなあ。

「遠隔召喚……来ます！」

ほれみる……、数は……1型21機、3型3機か……。

「あれって召喚魔法陣？」

「召喚ってあんな事もできるの？」

「優れた召喚士は転送のエキスパートでもあるんです」

なるなる、そゆこと……。

「なんでもいいわ……、迎撃行くわよ！」

相変わらずティアナは動きが微妙だなあ、スバルは攻めあぐねいてるみたいだし。

「アリー！」

「コード・FAF」

【フルアーマーフィールド】

振り返らずフルアーマーフィールドを発動、背後からの攻撃を無効化。

「ストライクムーブ！」

【ストライクムーブ】

すぐさま反転、フィールドを纏ったまま2機のガジェットを跳ね飛ばす。

当たり所が良かったみたいで爆発した。

「ちと動きが良くなってんだけど3型以外ならなんとかなるな」

このまま防衛続けりゃヴィータ副隊長辺りが加勢に来てくれるだろっし、なんとかか……。

「っ！」

嫌な予感、しかも今までで最上級の。  
勘を信じてスバルが展開している方に向けて走り出した。

Side ティアナ

いくら撃つてもAMFで減衰した魔力弾はガジェットに届かない。  
焦る、狙いも少しずつ甘くなる。

さつきから主にガジェットを落としてるのはリュウトにアリスト、  
スバルですら掴めない攻撃の糸口を二人は簡単につかみ取ってる。

「ティアさんっ！」

「ぐっ！」

背後に迫っていたガジェットの攻撃を避けてカウンターの魔力弾、  
でもそれも簡単にAMFに掻き消される。

『防衛ライン、もう少し持ち堪えててね、ヴィータ副隊長がすぐ戻  
ってくるから』

また証明できない？ 何もできないままヴィータ副隊長に任せる？

「っ！ 守つてばっかじゃ行き詰まります、ちゃんと全機落としま  
す！」

『ちよっ、ティアナ大丈夫？ 無茶しないで！』

「大丈夫です！ 毎日朝晩練習してきてるんですから」

そっだ、.. 証明.. しないと！

「エリオ！ リュウト達のところまで下がって、私とスバルのツープで行く！」

「あ、は、はい」

「スバル！ クロスシフトA、行くわよ！」

『おう！』

“証明”するんだ。

特別な才能やすごい魔力がなくなつて。

一流の隊長のいる部隊でだつて。

どんな危険な戦いだつて。

「私は……… ランスターの弾丸”はちゃんと敵を撃ち抜けるんだつて”」

身体に過剰なほどの魔力が走る、でも”大丈夫”。

『ティアナ！ 4発ロードなんて無茶だよ！ それじゃティアナもクロスミラージユも………』

「撃てます！」

【はい】

「クロスファイアアアア……シユウウウツツ！」

当てる！ 敵を撃ち抜けるんだって証明するんだ！

「ヤアアアアア！」

撃墜！ 撃墜！ 撃つ……それ……た？

弾丸の先には……スバル！？

弾丸は物理破壊設定、つまり人に当たれば重傷を負わせてしまうもの。

それが、スバルに向けて……。

「知った……事かああああ！！！」

Side アリスト

ティアナの無茶なクロスファイア、嫌な予感は的中しやがった。

精度の甘い一発が逸れてスバルに直撃コース、幸いおいらが勘に任せてスバルの後ろを追走してたから追いついたけどなあ。

「なにやってやがんだ！ ティアナ！」



久しぶりだ、俺がここまでキレたのは。

「無茶やった上に仲間撃ちやがって!!」

「ア、アリストくん、これはねコンビネーションの……」

「フォローになんねえ言葉いうんじゃねえ、直撃コースでコンビネーションもクソもねえよ!」

スバルはたじろいて一歩後ずさる。

「冷静になれねえセンターならいらねえ、ミスを認めねえフロントもいらねえ、てめえら纏めて後ろに下がってろ!!」

イライラする、失敗なんてもんは誰でもある、俺だって今まで何度もあった。

だが今回はかりは許せねえ、あいつらソラさん達の教導の意味を理解してねえのか!?

「アレス、モード1st……リュウトっち、トップ頼む……エリオも」

後残すのは1型5機、3型2機。

「よくやったアリスト、指揮はあたしがやる」

「ヴィータ副隊長……」

「遠目だが見てた、オメエは正しい、んな顔してんじゃねえよ」

小さく頷く。

あゝ……スバルに嫌われちまったかねえ?

S i d e    ティアナ

スバルを置いて一人森の奥に逃げる。

「くっ……私は……私はあ……」

すれ違いざまにリュウトに告げられた言葉に私は涙が抑えられな  
かった。

『満足したか？』

冷たかった、あんな目をしたリュウトはじめて見た。

キーンッ！

俯いていると突然結界が張られた。

（な、なに？）

少し先、そこに二つの影があった。

一人はバリアジャケットを着たソラ隊長、もう一人は長身の細身  
の男性。

私は二人の背後にとてつもない何かが居るように幻視した。

**第12話『ホテル・アグスタ後編』（前書き）**

ちよつと短いですけど更新です！

新作も上げましたのでよろしければそちらもどうぞ

今回あとがきにゲストが来ています

次回は番外です

では本編をどうぞ

## 第12話『ホテル・アグスタ後編』

Side ソラ

外の戦闘音、それを聞きながら近寄って来る十二カに警戒を強める、人の気配とは違う生物の気配。

「あちらを無視しておけない……けど……」

先程まで漠然と感じていた気配が凝縮、よく知っているあの人の気配。

「あ……これはあの人の方に行かなきゃね……」

わざわざ気配をさらしてきたんだから行かないわけにはいかない。

「ナイト、BJ展開」

【了解】

“あの予言” もありますし、あの人の真意を確かめないといけませんよね。

Side out

対峙し向かい合うのは二人、木に寄り掛かった水無月 龍也、タバコを口にくわえ紫煙を吐いている。

もう一人はソラ・フォード、バリアジャケットに身をつつみ警戒

している。

「お久しぶりですね、龍也さん」

「ああ、少年も元気そうだなによりだ」

二人は和やかに、されど一片の隙なく語り合う。

両者ともかなりの実力者、それゆえに二人から発せられる“気”により空間が陽炎が如く揺らめく。

「(う……何だろう……気持ち悪い……)」

そして、二人から50mほど離れた場所にいるティアナはその気に当てられて気分が悪くなっていた、本能と言うべき部分が拒絶反応を示しているのだ。

「一応貴方は広域次元指名手配されています」

「らしいな……、で？ 少年はどうするのだ？」

「お仕事ですので、拘束させていただきます」

龍也は苦笑と共に問う、ソラは微妙な表情で頬をかきながら答える。

しかし龍也に動揺はない、無言のまま再び紫煙を吐く。

「……というのは建前で、本当は真意を確かめに来たわけですけどね？」

苦笑しながら構えるソラ、防御を捨てた攻勢の構え。

「良からう……、だが、俺の拳は重いぞ？」

木に寄り掛かったままニヤリと笑う龍也、そして次の瞬間。

ドオンッ！！！！

爆音と共にソラが吹き飛ばされる、それを見ていたティアナは何が起きたか理解出来なかった、魔法も使わず質量兵器を使ったわけでもない、にも関わらずソラが居た場所は土煙が上がり、背後の木々は吹き飛んでいた。

「ふむ……全力でやらなくて正解か？」

自らの左手を見ながら呟く龍也、先程の爆音は龍也の左ストレートがソラを打ち据えた音、先の一瞬で殴り元の位置までまた戻った、たったそれだけの事。

「あいたた……、久しぶりに効きました」

「硬いな……まさか殴ったこちらがダメージを負うとは」

「貴方のせいですよ？」

土煙の向こうから歩いてきたソラ、腹部のBJは吹き飛び素肌が見えている、しかしその肌には傷は見当たらず無傷。

「やれやれ……、あの宝玉の神子の言っていた意味はこれか」

苦笑しながら右手に持っていたタバコを携帯灰皿に押し込み、指輪の一つを外し握りしめる。

「ではコレを使うか」

次の瞬間現れたのは銃身が長いハンドガン、しかし通常の銃口はなく横長に切れた穴があるのみ、コレは銃弾を撃つ為ではなく、龍也の“電気”を撃ち放つ為の武器、“ライオットバリスタ”である。

「雷槍・鬼神咆哮」  
らいそう・きしんほうこう

ライオットバリスタから一息に撃ち放たれた三つの槍の様な雷、それがソラへと向かう！

「【天の翼】+ホークムーブ！」  
【ホークムーブ】

しかし、ソラも焦る事なく天の翼を展開、ホークムーブを使い木々の間を飛び回る、本来高速移動系魔法は障害物の多い場所では使づらいモノだが、ホークムーブはこういった障害物をもともしない。

名の示すとおり、鷹が森の中を飛ぶようにスピードを落とさず龍也の横に出る。

「せいっー！」  
「ふっ……」

そこからすぐに右ストレートを放つが龍也は軽く腕を叩いて軌道をずらす。

メギッ……ドオオオンッ……

龍也の代わりにソラの拳を食らった木は粉々になり、吹き飛ばされる。

「俺に直線の攻撃は効かん」

「ですよー」

苦笑しながらも一旦距離をとり、右手の上に魔力弾タイプの神罰・断罪光剣を生み出す。

「威力は低いですが、B Jを着ていない龍也さんならそれなりにダメージありますよ？」

「ならば撃てばいい」

余裕を見せる龍也、しかし視線は鋭く断罪光剣からは外さない。

「神罰・断罪光剣！」

撃ち放つ一瞬前、弾道を予測し軽く身をよじる龍也、断罪光剣はその一瞬後に元龍也が居た場所を通過する。

「流石に一発では避けられますよね……」

「群で来ても結果は同じだ、当たらない場所へ動けばいいだけだからな」

両者は再び沈黙。

静かに時間が流れる。

「  
……  
」



それを打ち破ったのは龍也、何かに気づいたように顔を上空に移す。

「どつやらタイムリミットらしいな……」

「……そうですか」

ソラに背を向け歩き出す龍也、それを追い掛けようと動き出そうとするソラに向かって龍也が。

「そこにいる奴を守ってやれ……サンダーミーティア」

「っ!？」

右手に溜まった雷を上空に投げながら呟く、ようやくティアナの存在に気づいたソラはすぐさまティアナの横に移動、右手を掲げ。

「ワイドエリアプロテクション!」

【展開します】

ティアナごと囲うドーム型のプロテクションを張る、次の瞬間。

ガガガガガガッ!!!

轟音と共に大量の雷が無差別に辺りに降り注ぐ。

Side ティアナ

「……ティアナさん? 大丈夫ですか?」

あまりの出来事に放心していた、ソラさんの強さもそうだけどそれをいとも簡単に退けたあの男の人にも。

「おい？ ティアナさん？」

魔法も使わずあんな大規模な雷を使うあの男の人、正直規格外すぎる。

「うゆ……もしかして聞こえてないかな？」

そんな相手に一步も引かないソラさんも異常だ、あれで能力リミッター付き……、正直信じられない。

「はあ……ティアナ・ランスター二等陸士！」

「は、はい！」

つと、いけない、もしかして私ソラさんを無視してた？  
いけない……、色々ありすぎて混乱してるかも。

「怪我はないですよね？」

「は、はい……問題ありません」

「ならば皆と合流、その後の指示はそっちに行って確認してくださいね」

笑顔で言われ頷き表に向かう、私の心を占めるのは“劣等感”だけだった。

第12話『ホテル・アグスタ後編』（後書き）

「あとがき物語の神子の館」

ソラ「という訳で今回のホテル・アグスタ編は終了です」

イヴ「今回はゲストも来てる、『魔法少女リリカルなのはフロンティア』  
「魔導師と少年達の記録」より面林孝俊さん、中林雄人さん」

孝俊「久しぶり……って、見た目変わらないな……」

雄人「はじめまして」

ソラ「ようこそ！ 見た目は……まあ仕方ないんです」

孝俊「しかし……今回は激戦なのか？ 辺りの被害が凄そうだが」

雄人「確実に音速を越えた拳で無傷とは……信じられないですね」

イヴ「イメージは10センチトラックに轢かれた感じ」

ゲスト「……………」

ソラ「耐性ができてるので、それでも何回も食らえば危ないですけど、主に内蔵が」

孝俊「十分かと」

雄人「たしかにそうですね」

ソラ「あはは……（苦笑）」

イヴ「今回はこれまで、お孝俊には【弱気は最大の敵Tシャツ】、  
雄人には【脇役魂Tシャツ】をプレゼント」

ソラ「また来て下さいね」

孝俊「ありがとう、じゃまたな！」

雄人「ではまた」

鷹様、こんな感じで良かったでしょうか？

番外編4「虹と神子」(前書き)

久々の更新です

ようやくわが手にネットが入ったので今回はその報告も

感想・ご意見・あとがき出演などお待ちしております

## 番外編4 「虹と神子」

SIDE 翡翠

久々の休暇を貰い街に出てみた、適当にぶらぶらと散策していると裏路地辺りから微妙に漏れてくる怒声に気づきのぞいてみる。

そこにいたのは小学生くらいの少女だった、白いコート薄い青いインナー、これまた白いロングスカートを着た小柄な体躯、銀色の髪をポニーテールにしている、活発そうでありながらどこか文系染みた雰囲気も漂っていた。

「おらガキ！ 俺らの言うことが聞けねえのか！？」

「五月蠅い方々ですね……、だいたいいい大人がこんなこととしていて恥ずかしくないんですか？」

大柄な男に囲まれた少女……事件です、姉さん。

というか、物怖じしない子だなあ、普通あのくらいの歳の子がそんな状況になつたら取り乱すんじゃないか？

「生意気なんだよ、クソガキが！！」

正面の男が痺れを切らしたのか殴りかかる、思わず飛び出ようとした瞬間、それは起こった。

「とじや」

ドカンッ！！

突き出された腕を“片手”で掴むとそのまま10mほど投げ飛ば

される男A。

小柄な少女（130cmくらい）が大柄な男（180cmくらい）を投げ飛ばした光景に思わず啞然としてしまっ、つうかありえないだろ。

「ば、化けもんが！！！！」

後ろで固まっていた男Bが再起動して近くに落ちていた鉄パイプを振りかぶり殴りかかる、だが。

「よっ、せい」

後ろを振り向いて確認することもなく鉄パイプをつかみ、妙に可愛らしい掛け声とともにまるで玩具のように軽々とその鉄パイプを曲げてしまっ、どんな筋力してるんだ？ 強化魔法だとしてもあれはあり得ないだろ？

「まったたく……せつかくの旅だというのに邪魔をして……」

さっきまでの子供じみた声ではないその声音に背筋に寒気が走る、背中に氷を突っ込まれたかのような感覚に思わず息を止めてしまっ、押しつぶすような威圧感にいやな汗をかく。

「生まれてきたことも後悔させてやるっか？」

俺泣きそっだ。

つかあの子の周りにいた男ども全員膝から崩れ落ちてた、どうやらあまりのプレッシャーに気絶したみたいだ。

「はあ……、ホント厄介なのに絡まれたなあ……コレどうしょ？」

やれやれといった感じの少女が不意に振り向いて此方を見る、ぱつちり目が合った。

「そこの方、管理局に連絡していただいていいですか？」

「え、あ、はい」

反射的に答えた俺は正常だ。

Side ソラ

とある喫茶店、そこでボクは出会った青年、御剣 翡翠さんと雑談をしていた。

「しかし、ソラさんがまさかはやて隊長達と同年とはなあ……」

「あはは、見えないよね？」

「どこからどう見ても小学生です」

一度碎けて話してしまえば、あのゴタゴタで見せた“覇気”に彼は恐れることはなくなっていた、元々精神的に強かった処も幸いしてるのかもしれないな。

「でもすげえな、推定魔導師ランクニアS……くらいでしたっけ？」

「うん、あくまで推定だけどね」

流石に“異世界”で本当の階級を言うわけにもいかず適当に話をでっちあげて転移事故ということにしておいた、管理局の穴はいくらでも知っているから特に疑われることなく職務質問もくりぬけた。



「へえ…すじ」

ドオオオオオオオンッ！！

「「っ!？」」

突然の爆発音とともに、窓ガラスが吹き飛ぶ。

咄嗟にシールドを張って前方を確認するとありえないものがそこにあつた。

「な、なんだありや!？」

「……っ（キメラアニマルtype C!？ 確か超大型四足歩行タイプ……変換資質“炎熱”の広域戦闘型……）」

報告ではレリックの爆発に巻き込まれ虚数空間に落ちたと報告書が上がってたけど……、まさか異世界に飛ばされてるなんて……。

「なんだあの魔力量……最低でもAAAはあるぞ……」

「……封時結界展開」

即座に結界を発動、これ以上被害を出さないようにする。

「翡翠くん、アレと戦闘しますよ」

「本気ですか？」

全長30mほどあるキメラアニマルを指さしながら翡翠さんが訪ねてくる。

「もちろんです、アレの攻撃は自らを中心とした魔力爆発、体表面

温度は摂氏2000度ほど、決して接近戦はしないでください」

「……詳しいですね？」

「詳しくは語れませんがね……大技を出すので時間稼ぎをお願いします」

さて……術式展開、殺傷設定。

S i d e o u t

「イビル！ ユニゾンだ！」

「おうよ！ ユニゾン、イン！」

翡翠はイビルとユニゾン、瞳の色がクリアブルーと血のような赤となる。

「魔刃剣・連牙！！」

熱の届かない距離から連撃を繰り返し動きを止める、しかしその攻撃もダメージは見受けられない、魔力の過剰生成による魔力ノックアウトの不可、さらに肉体的耐久力はその体躯が示すように高く、強力な魔法でもなければ止めることすら難しいのである。

それに対し翡翠は連撃を持って足止めを行う翡翠の技量は常人を遥かに上まわっているといえる。

「誘うは永久の世界

数多の人々が眠る地

母なる大地と大いなる空に見守られ

唄え大いなる戦女神

【ヴァルキリー・レクイエム】！！」

翡翠が稼いだ時間を利用し、長い詠唱と集中を終えたソラが目を見開く。

ソラの掲げた手の上には上下にベルカ式、左右にミッド式の魔法陣に囲まれた光の塊、それは純粹魔力を圧縮収束された限定空間殲滅魔法。

【ヴァルキリー・レクイエム】 難易度：SSSランク 威力：SSS

雷滅崩玉に代わる“非殺傷設定”ができる限定空間殲滅魔法、半径5〜100m範囲内の対象を文字どおり殲滅するためのソラの切り札の一つ、強大な力は余波だけでもかなりのダメージがある為集団戦には向かない。

今回は余波を対消滅させるために範囲が多少せまい。

翡翠くん！ 余波気をつけて！

未だ足止めを食らっているキメラアニマルに対してそれを振り下ろすように撃ち放った！

「レディ……ブレイク！！」

キイイイイイイイ……！！！！ パアアアアアアッ！

！！！！

余剰魔力がぶつかり合うことによって生まれた余波が突風となつて辺りにまき散らされる、翡翠はソラの張った障壁と自分自身のシールドで余波を防ぐ。  
先ほどまでキメラアニマルがいた場所はぽっかりと空いたクレイタ以外存在するものはなかった。

S i d e 翡翠

あれから三日、ソラさんとは会っていない。  
詳しく調べてみたが【ソラ・フォード】なる人物は存在せず、彼は謎の存在として俺の心にとどめている。

あの時の事故は天災として処理されそれ以上の捜査はされなかった。

#### 番外編4「虹と神子」（後書き）

（あとがき物語の神子の館）

ソラ「というわけで久々の更新で、沫乃憂谷様の【魔法少女リリカルなのはRainbow Flower】虹ノ花、此处に〜】とのコラボSSでした」

翡翠「短い感じがするけど…」

ソラ「どうしてもネタが浮かばなかったそうです…、ちなみに納得いただけなければもう一回書くそうです」

翡翠「無茶するなあ」

ソラ「自業自得ですね」

翡翠「そういえばお知らせあるんですよね？」

ソラ「はい、次回の話からおそらく本編とは違った展開が増え確実に原作崩壊が起こります、それについての批判や中小はおやめください」

翡翠「んじゃ、また会いましょう」

沫乃憂谷様こんな感じでよかったですでしょうか？

### 第13話『強さ・弱さ』

Side なのは

「報告は以上だね」

『『はい!』』

皆の返事に違和感を感じて、一人暗い顔をしているティアナを見る。

その瞳には後悔・焦り・恐怖があった、良くない目だと直感で悟る。

ソラくんからの報告だと龍也さんとの一戦を見たらしい、正直ソラくんは色々と異常だからある程度成長しないうちにアレを見てしまつと誤解が多いかもしれない、今のうちにティアナに教えてあげないと。

「で、ティアナは……ちょっと私とお散歩しようか？」

「……はい」

Side ソラ

ある確信を胸にユーノさんと合流する。

「あ、ソラ」

「久しぶりです、ユーノさん」

ボクが話し掛けると振り向いて笑顔を向けてくる、でもこれから

この笑顔を絶望にしなきゃいけないんですよえ。

「ソラ、僕もようやく六課に合流できるんだよね？ 最近じゃのはと一緒に居られる時間が少ないからようやく……」  
「すみません」

ユーノさんの表情が固まる、次の表情は憂鬱げな表情。

「これから指定の場所に行ってほしいんです、喫茶【ミナツキ】……このメッセージを持って行ってください」

「……任務？」

「はい、六課ではなくエルベンラルトとしてです」

ユーノさんはため息をつくときとジト目でこちらを見てくる。

「ソラはいいよね、ほぼ毎日彼女達と一緒にいられるんだから」

「ちゃんと特別手当と休暇を用意しますから、怒らないでください」  
「い」

「だいたい、ボクだって会ってはいても中々時間を割けないんですからあまり変わらないんだけどなあ。」

「絶対だよ？ でもミナツキって……」

「現在広域指名手配されてる水無月龍也さんの経営する喫茶店ですね」

「（つつこんだら負けなんだろうな……）何故僕なの？ イヴやりユウカでもいいじゃないか」

「事を穏便に済ませるためです、適任がユーノさんだけだったんです」

というか、なぜ龍也さんはわざわざボクに分かるように場所を特定できるものを残したんでしょうね？

side 龍也

煙草を吸いながらカウンターでカップを磨いていると裏口から来客の気配がした、これはおそらくカリムだな。

「今日はクローズだからな、カウンターに」  
「貴女にはバレバレですね、リュウヤさん」

苦笑しながら裏から顔を出すカリム、服装は街でよく見かける女性と同じくラフな格好、それに髪型や伊達眼鏡で変装して一見では見分けられないだろう。

「まあな、紅茶か？」  
「ええ、あとケーキもお願いしてもいいですか？」  
「ああ」

保存しておいたケーキを保冷庫から取り出し、皿に載せてカウンターに乗せて紅茶をいれにかかる。

「ん……」  
「リュウヤさんはあの計画を止めるおつもりなんでしょう？」

その言葉に一瞬作業の手を止めてしまいがすぐに再開する、あの計画とは俺の妹をさらったやつらの進めている計画だ。

【奇跡の神子復活計画】、世界に終焉をもたらすと予言された計



画であり初代神子・聖母とも呼ばれる存在の復活計画である。

奇跡の神子とは因果を操りこの世全ての理を律することのできる存在らしい、人である限り彼女に逆らうことはできず魔法も技能も彼の者には意味はなく、いかなる手段でも【他殺】できないらしい。例外は神子への反逆権を持つ【豊穰の神子】か【異界の王】とかいう存在とか聞いたな。

「当たり前だ、俺の目的でもあるしな」

淹れ終わった紅茶をカップに注ぎカリムに差し出す。

「それにあの少年、ソラともコンタクトを取った、そのうち接触してくるだろう」

「え！？ もう接触したんですか！？」

驚きの表情のカリム、俺は何も言わず苦笑するだけ。

「ライターを落としておいた、あの少年なら意味を理解できるだろう」

アイツがネタで作ったものだが、意外と活用できたな。

「でも…」

「あの少年は愚かではない、安心しろ」

さて、いったい誰をよこすのか気になるところだな。

六課に戻ってきた途端、ティアナが個人訓練に行っちまった……。大丈夫かよ？ ああいうのに限って馬鹿みたいな自主訓練するから不安だ、まあリュウトっちがストー…ゲフンゲフン…様子見しに行っただから問題ねえとは思っただけ。

「……………」

「（き、気まずい…………）」

あれからしばらくしてフォアードメンバーで食事食ってるけどスバルがさっきから元気ねえ、つかこっちに対して何か言いたげだ。大体察しはつくんだが、アレに関して言い訳はする気ないしなあ…………どうすっぺ？

アリー、中央ロビーに集合、スバルもついでに連れてこい何故に？

突然の念話に疑問を返す、リュウトっちはしばらく沈黙していたが答えが返ってくる。

ティアナのためだ

あいさー、んじゃがんばって連れてく

ため息をひとつつくと、スバルがビクツと反応する。  
なんだ？ やっぱアレが引っ掛かってんのか？

「スバル？ 中央ロビー行くべ？」

「え？ な、何で？」

「ティアナ無茶してるみてえだかな、リュウトっちが引っ張ってくっから話しようや」

おいらについても、ちょっと話さないかんこともあるしね？

side リユウト

自分の周りにスフィアを展開、正確に狙いをつける訓練を淡々とこなすティアナ。

俺から見れば無意味に見える訓練、だがそこには近接戦闘と遠距離戦闘の違いがある為口ははさめない、が、かれこれもう4時間以上ぶっ続けだ、そろそろ休ませないと訓練や突然の任務に支障が出るだろう。

「ティアナ、話がある」

「っ！」

俺の存在に気付いてなかったのか、驚くティアナ。そのせいでバランスを崩して倒れそうになる。

「よっと」

「あ……」

まあ、倒れさせるわけがないがな、倒れそうになるティアナの腕を取って引っ張り上げる。

俺の不注意でもある、それでケガをされては男がすたる。

「自主練のしすぎだ、そんなことでは身体を壊すだけだぞ」

「……ほっといてよ……」

俺を突き飛ばして、フラフラになりながらも自らの足で立つテイアナ、表情は俯いていて分からない。

「あんに……あんなんかに私のことなんて分かるわけないですよっ……！」

「……語らずして知ることなし」

「な、何がよっ?!」

静かに、語るように、落ち着かせるように、言の葉を紡ぐ。

「真の強さを知りたいか？」

「え……」

喰いついたな。

さて、少々語るとしようか。

アリー、中央ロビーに集合だ、スバルもついでに連れてこい何故に？

む……、い、言うのが少し恥ずかしいな。

テイアナのためだ

あいさー、んじゃがんばって連れていく

ぐっ、やはり恥ずかしい。

集まったのは4人、リユウト・アリスト・ティアナ・スバルだ。アリストが手持無沙汰なのかさつきから手の中でアレスを転がしている。

「さてと、まずはおいらが話そうかな？」

全員の視線がアリストに集中する、苦笑しながらも少し憂鬱気な表情になる。

「今日のティアナのミスショット、あれはおいらにとっていやな記憶を引っ張りだすんだよ」

アリスト5歳、幼馴染の少女と遊んでいたときのことだ。

近くで違法魔導師が管理局員と戦闘中で包囲網を抜けられアリストたちの遊んでいた公園まで逃げてきた、その時、違法魔導師の放った“殺傷設定”の流れ弾がたまたま近くにいたアリストの幼馴染に直撃した。

のちのニュースでは即死だったらしい。  
なにもできなかつたアリストの脳裏には今もその光景が焼き付いている。

故にティアナのミスショットに過剰反応してしまったのだ。

「とまあ……、おいらはそんなことがあったせいであんな風に怒鳴っちまっただ」

語るアリストは買っておいたコーヒーを一気に飲み干し、握りつぶす。

「未だにおいらはああいったことがあると冷静な判断なんてできなくなる」

語り終わるとスターズ二人の表情は暗くなっていた。

唯一その話を聞いていたリュウトは無表情だ。

「次は俺だな」

リュウトは龍也との出会いを名前を伏せて話した、自らが人造魔導師ということも含めて。

そして、いつの日か聞かれた問いを言葉にする。

「強さとは何だ？ 弱さとは何だ？」

それを聞いたスターズ二人は何を簡単なことを、という表情をする。

「ちなみにティアナはどう考える？」

「そんなの簡単じゃない、なのはさんみたいに魔力が高くてすごい魔導師が強くて……私みたいな凡人が弱いだよ」

それを聞いたリュウトとアリストは微妙な表情をする、呆れているようなそんな表情だ。

「その人が言うには、強さとは“敗北を理解する者”、弱さとは“

敗北を嘆く者”だそうだ」

一拍置き、ティアナの反応を見るリュウト、どうやら理解できていないようで眉を顰めている。

「敗北を糧とするか、それともそれによって腐るかの違いだ。ちなみにティアナ、今のお前は後者だ」

「っ!?!」

険しくなるティアナの表情、それでもリュウトは表情を崩さず言い放つ。

「今のままではお前は強くなれない、いつまでも弱者のままだ」

side ユーノ

午後7時ほど、クローズの札が掛けられたドアをたたく。

「すみません、ソラの使いで来ました」

中からは人の気配が二つ、一人は間違いなくミナツキだろう。

「……」

しばらくするとドアの鍵が開けられ、10年前よりかなり成長したミナツキリュウヤが現れた。

「ん？ あの時のフレットか」

「フェレット!?!」

ぼ、僕の印象ってそれくらいなの!?!

「で?」

「……ソラからメッセージを預かってきました……」

何を言っても聞いてくれなさそうだからとりあえず目的を果たすことにした。

「中に入れ、コーヒーでいいか?」

「あ、はい、どうも」

あれ? 意外とやさしい人だな。

中に入ると落ち着いた雰囲気店内にどこかで見たとような女性が座っていた。

「え!?! ユ、ユーノ・スクライア司書長!?!」

「ええ!?! カリム・グラシア理事官!?!」

えええ!?!? なんでこんなところに!?!?

というか最初全然分からなかった……。

「……コーヒーだ」

「あ、えつと……ありがとうございます?」

とりあえず混乱を飲み込んで冷静になる、思考をして現状を整理、予測と確立、あと勘を使用して推測を立てた。

「グラシア理事官、もしかしなくてもリユウヤさんの協力者?」



「え、あ、はい」

「あとリュウヤさんに惚れてる？」

「!?!?!」

あ、正解みたいだね。

何となくなのはと重なる雰囲気を感じたからなあ。

「ん……少年からのメッセージは了解した、後日そちらを訪ねる」  
「分かりました伝えます」

そこでコーヒーを一口飲む。

ん？ どこか懐かしいというかなんというか、こつ記憶に触れる味だなあ。 あれ？ 背筋に寒気が？

「どうした？」

「いえ……覚えのある味なので……」

こつ、飲みなれてるんだよね……。

具体的に言つと地球の海鳴で。

「ああ、仕入先が翠屋とかいう喫茶店と同じだったな」

「ああ……なるほど……」

第13話『強さ・弱さ』（後書き）

（あとがき物語の神子の館）

ソラ「今回は皆さんおなじみ【魔王降臨】の回ですよ

イヴ「感想待ってる」

龍也「ついでにリクエストもな」

シンジ「つかお気に入り増えねえなww」

第14話『魔王』（前書き）

みなさんお待ちかね（？）の魔王降臨編ww

最近執筆が亀のように遅いですが見捨てず見てください！！

あとあとがきにてちょっとしたクイズを出したいと思います、正解者にはsts後に続くオリジナルストーリーでの“キャラ登場権”を差上げたいと思います

では本編へドウゾ

## 第14話『魔王』

side リユウト

あの話し合いから、俺たちの距離感が少し変化した。  
というか、目の前で繰り広げられている光景に俺はついていけない。

「オラオラオラオラアアア！」

「くうっ…」

才能など殆どないのがアリー、そう言われたのはつい最近のこと。  
ソラさんがアリーに対して言い放った言葉だ、厳しいというより  
酷い言い様だが実際のところアリーが突出して優れている所など防  
御力くらいのもの、スピード・攻撃力・空間把握能力・作戦立案ど  
れをとっても並なのだ。

だが、それを補って余りある突き進む勇氣、新人FWメンバー中  
最大の魔力保有量、そして。

「ストライクアーツがなんだ！！ 母様のコンボに比べりゃなんて  
こたあねえ！！」

「理由が意味不明だよ！？」

自分は弱いという確かな理解、実力の差をしつかりと見極め、最  
善の選択を勘で行う。

頭は弱いがその動物的直感は格闘戦が得意なスバルを相手にして  
立ちまわれるほど、その攻撃に洗練された動きはないが獣のごとく  
執拗に、攻めにくい動きをもって放っている。

だがそれでもやはり…。

「うおりゃあ!!」

「グフツ!？」

結局は素人の攻撃、隙がでないな。

視界の端に写ったクロスファイアに反応してそれを見切り避ける。

「リュウトよそ見してていいの？ まだ模擬戦中よ」

「そうだが、詰みだ」

俺の相手であるティアナに向けて一言告げる、さっきのクロスファイアは中々鋭かったが龍也さんの攻撃に比べたら見切りやすかったしな。

「は？」

「氷結の刃……飛べ！」

気配察知により居場所を掴み遠当ての要領でまとわせた氷結属性の魔力刃を飛ばしてティアナに当てる。

「きゃあっ!!」

「俺の勝ちだ、近寄りすぎだな」

言葉短く勝利宣言、朝の自主訓練は最近時々来るようになった、自らを鍛えることに異論はないからだ。

まあ、流石に夜の訓練はさせていないが。

「リュウトも相変わらず強いわね……」

「俺なんてまだまだだ、そしてあまり焦るな」

ティアナは冷静なうちはいいんだが、一旦冷静さを欠くと突撃思考になつていけないな。

「明日はなのはさんと2ON1だ、今日はこれくらいにしておこう」

頼むから普通に模擬戦してほしいな、そうすればティアナは強いんだからな。

side ソラ

「……………」

最近、ティアナさんの動きに僅かに変化が訪れている。いい傾向でもあり、ある種危険もはらんだ動きでもある。

リュウトくんは剣の扱い方を教えながら（実際動いているのはア―サー）思考の端ではそんなことを考える。

基本的にボクの教導方針は“直感・センスを活かす戦い”である、リュウトくんは戦闘センスが良いためルーチンや基礎の繰り返しではなく、邪道な戦い方を教えている。

これは基本を繰り返し彼本来の力を殺さないため、彼は通常訓練では並にしか育たない。

集団戦には多少不向きだが、戦場を縦横無尽に駆け回れる動きをしてもらおう、守る戦いではなく攻める戦い方。なのはさんには厳しい言葉をもらっているが、今更この教導方針は変えられない。

アリストくんの場合は獣染みた直感を活かした戦い、これも邪道ではあるけど彼はこれに嵌っている。

相手の動きに合わせて只管執拗に攻撃をする、スタミナ・魔力があ

る程度高いからできる戦い方ではあるがまだまだ発展途上、隙もまだ大きいからまだFWメンバーでは下のほうだ。

『創造主ソラよ、リュウトは概ね我が剣捌を覚えたようだ』

「分かった、それじゃあ御苦労さまアーサー」

アーサーを送還し肩で息をしているリュウトくんを見る、センスに頼った戦いは思いもよらぬミスを起こす可能性もある、時折自ら意図せぬ動きも出てしまう、それを上手くコントロールできるようにするには技術を持たなければならない。

アーサーの剣は“基本”の集合体でしかない、故に読み取りやすく模倣しやすい。

敵からすると基本ばかりで切り返しやすく、しかし、基本の集合体のせいで攻め辛いという利点もある。

「じゃあリュウトくん、ちょっとクールダウンしたらボクと模擬戦だよ？」

「はい」

リュウトくんは吸収が早い、もしかしたら“具現”に一番近いかもしれないですね。

Side アリスト

「ふう……」

訓練を終え苦手なデスクワークもなんとか終わらせて自室でのんびりする、今日の訓練もハードだった……最近じゃ合間を見つけて

趣味のお菓子作りもできやしない。

「……まただ……またあのいやな予感だ」

おいらの直感によく当たる、それのおかげで今まで生きてこれた  
しやってこれた。

だけど最近じゃいやな予感ばかりする、前はティアナのミスシ  
ヨット、そのさらに前は同僚の重体。

正直こういふ勘は外れてほしいんだがなあ。

「……ああもう!! おいららしくねえ……!!」

グダグダ考えんのは苦手だ…、たとえ何があるうともソラさんや  
なのはさんがいるんだ……大丈夫……。

ピリリと辛い 彼女の口づけ

「お? 母様から電話? 珍しい……はい、もしm」

「アリー……、おきてるううう?」

ノオ!? 耳が!! 耳がああああ!?

『な、なに? どうしたのアリー?』

「母様がいきなり大声出すからでしょーが」

まだキンキンすつけど大丈夫だろーか?

『ああ、ごめんね。 ちょっと面白い電波受信しちゃったから』

「電波ツスか」

母様はおいら以上の勘の持ち主、よく電波って言うてるけどその



勘は外れなしの百発百中、占い師としてやってけるのではなからうかというほどなのです。

「で、どんなん？」

「ん〜？ アリーに彼女ができそうな予感よ〜！」

へ？

「え…いや…ちよっ!？」

「ふふふ、近い将来孫ができる予感もあるわ！ 具体的には5年後ね!〜!」

え?! まさかの断言!? しかも5年後とか!?

もう一度言うけど母様の直感の外れなし、我が親父殿も直感で手に入れたくらいだし。

『ということであり、頑張りなさい』

「命令形?! 何を頑張れと!?!」

『そりゃもちろん よ!』

／(。□＼／□。)／

『はやく孫見せてねえ〜』

一方的に切られる通信、おいら泣いてもいいですか？

Side なのは

「それじゃあ訓練のまとめ、20N1での模擬戦始めるよ、まずはスターズから」

「はい！」

「ライトニングとフェザーズはあたしらと観戦だ」

「行きますよ」

みんなが範囲外に出たのを確認、私は上空で二人の準備が整うのを待つ。

ティアナもスバルも訓練の成果をすっかり出してくれるかちょっと心配だけど、これまでしつかり訓練してきたんだから信じてあげなくちゃ。

「じゃ、始めるよ！ レイジングハート！」

【アクセルシューター】

「シューット！」

Side ヴイータ

なのはのやつ、相変わらず容赦ねえな。

いくらリミッターかかっているとはいえなのはの技術は曇ることねえかな。

「はあはあ…もうスターズの模擬戦始まっちゃてる？」

「おう、なのはのやつあたしがかわるつつつても聞きゃしねえかな…最近なのはの訓練密度も濃いーから休ませてえんだが」

「なのは、部屋に戻ってからモニターに向かってばっかりなんだよ」

訓練メニューの見直しに陣形の確認、妥協せずにこれ以上ないくらいに煮詰め続けるあいつのいいところでもあるんだが…。

「お、クロスシフトだな」

「……」

ん？ アリストの様子が変だな……、なんだ一体？

「おい、アリスト、どうしたんだ？」

「なのはさん……止めてくれ」

「は？」

なんだ？ 目が血走ってるみてえだけど……。

「ティアナもスバルも……止めてくれ……」

おいおい？ なにがどうしたってんだ？

普通じゃねえぞ、こいつ。

Side なのは

スバルの危ない軌道、ティアナの切れに欠けるクロスファイア。普段の訓練では絶対に教えない駄目な戦い方。

「うおりゃあああ！！」

そして、教えていないティアナの砲撃魔法、それも仲間を巻き込むかもしれないタイミング。

「……………」

気配がする、あつちのティアナは幻影だった。  
いまはうえかな？

「レイジングハート……………モードリリース……………」

【了解】

どうしてなのかな？ 私、間違ってたのかな？

ガアアアアアン！！

痛む、ティアナのクロスミラージユから延びていた魔力刃を掴んだ掌、それに威力は落ちても重いスバルの拳を受け止めた左手。  
でも、もっと痛むのはココロ。  
無茶して、危ないことばかりする二人に対して自分の教えていたことが間違いないんじゃないかと心が悲鳴を上げる。

「おかしいな…二人とも…どうしちゃったのかな？」

「は…」「え…」

二人なら、二人なら私の教えている意味が分かってると思ってたのに……………。

「頑張ってるのは分かるけど…模擬戦は…喧嘩じゃないんだよ？」

それなのに……………。

「練習のときだけ言うこと聞いてるふりで…本番でこんな危険な無

茶するんなら…練習の意味…ないじゃない…ちゃんと練習通りやる  
うよ…ねえ?」

「あ…あの…」

このままじゃ駄目だ……。

「私の言ってること…私の訓練…そんなに間違ってる?」

【ブレードレイズ】

掴んでいた魔力刃の感触が消える。

後方に跳んだティアナは二発カートリッジをロード、先ほど幻影  
でみた砲撃を準備する。

「私は！ もう誰も傷つけたくないから！！ なくしたくないから  
!!!」

泣きながら叫ぶその姿に、私は自分の昔を重ねてしまう。  
無茶して落ちた、あの時の私を幻視した。

「だから……強くなりたいんです!!!!」

「ティア……」

このままじゃ駄目…、私と同じ目に逢っちゃっ……だから。

「少し…頭冷やそうか…? クロスファイア」

「うわあああああ！ ファントムブレイ……」

「シューッ」

ドオオオオン!!!

「ティアア！　っ！？　バインド！？」

だから…教えてあげないと。

「じっとして…見てなさい」

クロスファイアを収束、ティアアナでもできる術式での簡易砲撃。

「っ！　なのはさんっ！！」

それを、ティアアナに向けて撃ち放つ。

そこに、割り込む影が見えた。

「フルアーマーフィールド！！！」

side アリスト

一発目は我慢できた、それは問題じゃねえ。

でも二発目は見逃せねえ……フラフラになってるティアアナに向けてもう一発なんて体罰以外のなんでもねえ！！

「許さねえ……これは教導なんかじゃねえ……ただの体罰だ！！！」

感情が暴走しているせいか魔力がアホみてえに溢れ出る、体中に過負荷の魔力スパークが起こっているのを自覚する。

「……っ」

なのはさんはありませんあり得ないもの見ているような表情になる、単純な話、おいらが浮いてるからだろう。

空戦適正はおいらにはなかったけど、ただ浮いてるだけならおいらだつてできる。」

「そこまでにしときなよ」

なのはさんに跳びかかろうとした瞬間、おいらを雁字搦めにする“緑色”の鎖。

誰の魔力光だ？

「や、なのは。久しぶり」

「ユー…ノ…くん？」

そこにいたのはどこかの民族衣装風のB Jをまとった淡い金髪の青年、その腕の中には気絶したティアナが抱えられていた。

「よつと…さてと、高町なのはは一等空尉」

続いてやってきたのはB J姿のソラさん、普段は穏やかなその目は鋭い眼光を放っている。

「先ほどの行為を模擬戦における過剰攻撃と判断し、アドバイザーとして自室謹慎2日を言い渡します」

有無を言わせぬ力強い発言、その目は今度は此方に向けられる。

「アリスト・ノヴァ、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター。

貴方達は訓練を混乱させたとみなし同じく2日間の自室謹慎を言い渡します」

その時、ソラさんの表情はどこまでも感情を殺した冷たいものだった。



第14話『魔王』（後書き）

「クイズ・神子ちゃま！」

ソラ「始めました。クイズ・神子ちゃま！」

イヴ「正解者には“キャラ登場権”を進呈、ちなみに答えは感想に書いてくれば良い」

ソラ「ではさっそく問題です！ あ、ちなみに本編読んでいるだけじゃ正解は見つけられないので皆さんの直感を信じてください」

「問題」

アリストはお菓子作りが得意です。

ではそこで問題！

アリストが一番最初に作り方を覚えてたお菓子はなんでしょう？

ヒントはバケツ

では感想などお待ちしております

## 番外編『偽物VS星空+神子』（前書き）

今回は番外編です

さて、活動報告でも書きましたが今回 *striker*s 後にお届けするオリジナルストーリー第四期のキャラクター募集をしたいと思います。

条件は以下のもの

- ・チート性能禁止（乗せてもいいですが、弱体化します）
- ・年齢はヴィヴィオと同じくらいに設定（11くらいを目安にしてください）
- ・なるべく詳細をお願いします（最低でも名前・年齢・性別・デバイスの有無・魔力量・魔力光・容姿・性格 *etc*）
- ・ちなみに活躍しまくる予定

オリジナルに入った瞬間から登場キャラクターが大幅に増えるため個々のシナリオが用意されています。  
具体的には

ソラルート  
龍也ルート  
なのはルート  
フェイトルート  
ヴィヴィオルート  
スバ・ティアルート  
エリ・キャロルート

とまあ……、話数は多分かなり多いのではなかるーか？

ちなみに募集するキャラクターの数は4人！

1：1の割合なので

一応番外編のときにも同じ内容が書かれます  
応募方法は【メッセージ】にお願いします

どしどしご応募お待ちしております！！

ちなみに、クイズの正解はプリンではないんです  
多分誰でも作ったことはあるんじゃないでしょうか？  
あ、最近はないかな？

番外編『偽物V S 星空 + 神子』

Side 紅音

息が上がる。

喉が渴く。

身体が痛む。

めまいがする。

本能が恐怖する。

それは、あり得ない存在との出会いだった。

（数分前）

「ここか……次元干渉型ロストロギア【神樹の葉】があるのは」

独自にリークした情報をもとに探しにきた無人世界、自身の能力である【星詠み】に導かれるように一人で来た。

そこは緑豊かな世界、未だ原生生物などしかおらず文明などない。

「……？」

だが、膨大な魔力反応を出すはずの【神樹の葉】の反応がない、そのかわり妙に大きい魔力反応があるだけだ。

「先を越された？ いやそれはないはずだ」

そもそも管理局でも確証がないために動けないでいる一件だ、【神樹の葉】は確かに危険なロストロギアだが、“人の手で発動させなければならぬ”という条件がある為、この世界では問題ないと

もいえる。

その【神樹の葉】の反応がないというのはやはりおかしい。現在魔力を放っている人物がいる現場に行き、真意を確かめればいいことだ。

「これは…!?!」

そこにいたのは小さな少女、長い白髪をポニーテールにして服装は白い上下に腰に青い外套みたいなのを巻いている……って、よく見れば男の子か？ 胸ないし。その少年がゆっくりと振り向く、ゆっくりとした動作で特に変なところはないのに酷い悪寒がした。

「ああ、まだ敵がいたか」

幼い声、普通なら怖がることもないなんともない声に咄嗟にルカをセットアップし構える、彼の眼は光が消えてとても正気には見えない。

「あは…… あっはははははははははは!」

突然笑い出す少年、どこか壊れた人形を連想させ嫌悪感がわいてくる。

「しんじやええええ!」

勢いよく振りぬかれる拳、それを見切って半身身体をずらす。しかしすぐにそれが失策だと気づかされた。

ミヂイッ

回避したはずの拳からの拳圧だけで身体が悲鳴を上げる、気づけば俺は10mほど吹き飛ばされていた。

「ぐ……あ……」

息が上がる。

喉が渴く。

身体が痛む。

めまいがする。

本能が恐怖する。

だが、あれは放っておいていいものじゃない。

「大丈夫ですか？」

「は……？」

思わず目を疑う、目の前にはさっきの子とは服装だけが違う子が立っていた、手には2mほどはあろうかというデバイスを持っている。

「申し遅れました、ボクはソラ・フォード……いま暴れているアレを倒しに来たものです」

笑顔で言うソラ、容姿や服装は酷似しているが纏っている雰囲気は正反対だ。

「俺は飛鳥紅音だ……今は機動六課所属で……」

「あ………やっぱり異世界かあ」

苦笑しながら言うソラ、異世界って…？

「まあいいです、とりあえず殲滅しないとね」

いや…、ちょっと物騒なところは近いかもしれない。

「あれえ…なんでオリジナルがいるかなあ…？」

「意外と復活早かったね？ 結構本気でなぎ払ったんだけど」

これは…先ほど俺がいた場所が崖になってるんだけど…マジなのか？

それを食らったと思わしき偽ソラは服こそボロボロだが傷ついてはいない、魔力も減っていないようだし…化け物だな。

「む…、流石ロストロギア…しかも素体情報がボクなだけあって厄介だなあ」

「俺も手伝います」

さすがにアレを一人でどうこうできないだろう、しかも暴走中のロストロギア…何が起こっても不思議じゃない。

「いくぞ！」

side out

弾ける火花、2mはある大剣を振り回すソラ。

絶え間なく紅音から打ち出される魔力弾。

防戦を強いられる偽ソラ。

戦闘は一方的であった、いくらロストロギアが規格外といえどもオリジナルであるソラに実力十分な紅音がいるのだ、苦戦する要素などない。

しかし、これといった決め手も中々出せない状況、ソラ本人が保有する能力自体本来ならば多対一の戦況に有利なものばかりなのだ、それを出させないためのソラの接近戦であり、紅音の魔力弾である。

「うっとおしいなあ!!」

「ナイト！ プラスパワー！」

【プラスパワー・エクステンション】

身体能力向上系魔法【プラスパワー・エクステンション】、常人を遥かに超える身体能力を持つソラがこれを使うことにより、より強力な斬撃を放てるようになる、しかしそれはソラを模倣している偽ソラも同じこと。

「あはっ プラスパワー!!」

拮抗は続く……しかしここにいるのはこの二人だけではない。

「ルカ、一気にカタをつける……デストロイフォーム!!」

茜色の魔力光が溢れ出し、夜笠に厚手の革つなぎ、プロテクターと長いマフラーらしき布で口から下を覆い、髪が逆立った紅音が現れる。

紅音の切り札の一つ“デストロイフォーム”、過去ある名で呼ばれていたときの服装そのままの姿。

力を溜める紅音、それを見てなにか危険を感じ取ったのか偽ソラが跳びつこうとするが…。



「三重結界捕縛!!」  
トライケージ

「ちいつ!!」

それを三重に張ったケージ系魔法を使って行動を阻害する。

「  
フリースペル 自在式・ステイクマ 拡大之傷」

手に持った剣で自らの手を切り、彼独自の自在式を発動させる、ソラはそれだけでは斬撃が通らないと判断。

「彼の者に敵を引き裂く騎士の加護を…」スラッシュ・エクステンション 【斬撃強化】…二重奏、彼の者に天駆ける翼の加護を…スピード・エクステンション 【速度強化】…三重奏、彼の者に屈強なる龍の加護を…ディフェンス・エクステンション 【防御強化】」

未だ力を溜めている紅音に斬撃・速度・防御のブースト魔法を施す、また自分自身も決めを使うために魔力をどんどん高めていく。

「(…すごいな、近接・中距離・遠距離・補助、どれも高レベル…まさに万能型魔導師だな…)」  
オールラウンダー

十分力が溜まり後は切りつけるのみ、狙うのは利き腕であろう右腕。

そうすれば大幅に戦力が落ちるだろうと予測を付けてのことだ、しかし、そこで思いがけない念話が入る。

「えっと、紅音くん？ できれば足をつぶしてもらえますか？」

「……理由は？」

「アレを完全消滅させるためには外郭と中核を同時破壊しなければなりません、故にそれを行うためにはアレの足を潰してもらわない  
にきたい ロストロキア

『といけないんです』

少し考える紅音、自分の持ちえる魔法では流石にロストロギアごと消滅させるのは難しい、ならばその手段を即実行に移せるソラに任せるほうがいいと判断、頷くことで了承の意を伝える。

ピシッ！

二人のやり取りが終わった瞬間にケージに罅が入る、ソラはそれが破られるまでの時間を計算、カウントダウンに入る。

『5…4…3…2…1…GO…！』

「！！うおおおお！！」

ソラの声を聞き、茜色の閃光となつて突撃する紅音。

迎撃態勢をしている偽ソラだったが、ケージを壊すのに多少無茶をした反動で動きが鈍っていた、それを見逃さず低姿勢で足へと斬撃を放つ！

キーンッ！

「くうあつ！？」

甲高い音と共に偽ソラの足から鮮血が飛び散る、普通なら切り落とされても不思議ではないが強大な魔力でのバックアップもあり切断には至らない、それでも深く切り傷を負いよめく偽ソラ、拡大<sup>ステ</sup>之傷<sup>イケム</sup>の効果で徐々に広がる傷を見て苦渋の表情になる。

そこに右手に結界に包まれたナニカを持つソラがゆっくりと近づいていく。

「なっ…正気か！？ それは…」

「雷滅宝玉」らいめつほうじぎょく…化け物相手ならこれを使っても問題ないですからね」

究極の消滅魔法、雷滅宝玉。

過去一度だけ使われた防御不可能・非殺傷設定不可能の最凶の魔法が再びその手に灯る、光速手前まで電磁加速された原子は解放された瞬間あらゆる物質を素粒子崩壊を引き起こす、これを回避するには効果範囲外に逃げるしか方法はない。

「では…さようなら、【哀れな過去の遺物】ロストロギア 神罰・怒号烈風！！」

蹴りと共に放たれる神罰・怒号烈風、偽ソラは強力な上昇気流とともにものの数秒で上空1000mに達する、瞬間追従するように放たれた結界に包まれた雷滅宝玉によりさらに吹き飛ばされ結界に閉じ込められる。

「解放…雷滅宝玉」

瞬間、結界内が閃光に包まれその中心にいた偽ソラ、そしてその体内にあったロストロギア『神樹の葉』もろとも消滅した。

番外編『偽物VS星空+神子』（後書き）

くあとがき物語の神子の部屋く

ソラ「今回は番外編、『魔法少女リリカルなのは く星空の奏者く』とのコラボSSをお送りしました」

イヴ「雷滅宝玉はもう使わないんじゃないかなかった？」

紅音「あの後事後処理…というか、証拠隠滅が大変だったな…」

ソラ「あ、あはは…さすがにS級ロストロギアを完全消滅させれるのはアレくらいしかなかったので」

紅音「とりあえず…真正面からソラさんに向かっていくのは愚策と  
いうのはよくわかった」

イヴ「さすがチート」

ソラ「あ、あはは…」

紅音「じゃ、俺はそろそろ帰るよ」

ソラ「はい、また会いましょう！」

沫乃憂谷様、こんな感じでよろしかったでしょうか？

第15話『暗躍』（前書き）

さて……

クイズのほうの正解なのですが……

アメ

なんですよねえ

アルトネリコやった事のある方あんまりいなかったのかな？

今回4人の募集ですので、何名か選考から漏れてしまいます  
そついったキャラなどはチヨイ役で出るかと思えます

では本編をどうぞ！

## 第15話『暗躍』

Side ソラ

ユーノさんに医務室にティアナさんを送ってもらった後、ボクは自室でベットに転がっていた。

なのはさんは人一倍“他人に迷惑をかける”ことを嫌う、それは自己で判断した基準で時には相談せずに内にため込むことも多い。

教導官になつてからはユーノさんという相談役がいなくなつてしまったため余計に不安をため込んでいたようにも見える、エルベントラルト隊舎と無限書庫を往復するユーノさんも各地を飛び回るなのはさんと連絡がとりづらい。

そして今回の“模擬戦における過剰攻撃”、普通なら新人教導官や悪質な上官にみられるものだが、今回はそれなりの年数を経たなのはさん、やさしい気性の彼女がこんなことをしでかしたのをいまだに納得できない。

「ストレス？ いや…トラウマ…」

どれだけ考えても答えは浮かばない、他人ヒトの考えていることなんてわからないのは当然だけれど…。

「ソラ、大丈夫？ 様子見に来たわよ」

「ソラくん、ジューズ持ってきたよ」

「あたしはすぐ戻るけどなあ」

「うちもや、せやけど一気に4人も抜けるんわきついなあ…」

部屋のドアが開き、入ってきた足音が四つ。

上からアリサさん、すずかさん、ヴィータさん、はやてさん。

「あ、ごめんね……ちょっと今回いろいろありすぎて……」

「うちも考えとったんよ、なのはちゃんがあないな暴走するとは思えへんかったし」

「あたしは妙に納得した感じはあったんだけどな、なのはのやつ最近思いつめてるみてーだったし」

思いつめてた？　そういえばなのはさんは短期教導がメインで長期の教導はこれが初めてだったっけ？

「なのはって責任感強いからかしらね？　変に背負いこんじゃったんじゃない？」

「うん…、あとは考えの食い違いかな？」

一人では思いつかないことも、ボクより長い付き合いのアリサさんやすずかさん。

そしてなのはさんの近くにいたヴィータさんや、全体を見渡している部隊長であるはやてさんには思うところがあったみたい。

「今回はこの程度の処分ですけど……、もしこれが他で起こったならいろいろ問題だったかもね……」

全員が沈黙する、いくら有能な魔導師だろうと何をしてもいいわけじゃない。

それこそこれで怪我を負わせればそれは立派な傷害罪、今回の一軒は一発目も二発目もかなり作りこまれた模擬戦専用魔力弾、魔力ダメージ以外は殆ど影響のないものだ。

それでもどうも体調の優れない風に見えたティアナさんに対してなにか悪影響が出ないとも限らない、教官は一人ひとりの体調管理も仕事のうちなのだ。

この謹慎処分で色々気づいてもらえればいいんですが…。

A L E R T

そんな時、騒がしい音とともに六課内にアラームが鳴り響いた。

S i d e ジェイル・スカリエツィ

玩具の動作テストを兼ねて六課の近くにチューンした2型を飛ばす、機体速度・反応速度ともにまああのデータがとれている。

さすがにあの六課のメンバーなら問題なく撃ち落としてしまうだろうが、この玩具は<sup>ガラクタ</sup>そのため飛ばしている、問題ない。

『ドクター』

「おや？ 君から連絡なんて珍しいじゃないか」

『ドクターの玩具が遠くの空に飛んでるみたいだから…』

あの近くにいるのか、不用心だなあ。

「もうすぐきれいな花火が見えるだろう」

『レリック？』

「それはないさ、それなら君に真っ先に話を通してるよ、あれが壊されるまでのデータがほしくてね」

捜査パネルを叩いている指を一旦止め微笑みかける、昔の自分では考えられないような表情だろう、彼と出会ってから変わったひとつともいえるだろうね。



「あれが終わったら彼の喫茶店に行くといい、私のツケにして色々食事をとるといいよ」

『ありがとう、ドクター』

ちょっと嬉しそうな表情のルーテシア、どうも彼女はあそこの紅茶とお菓子がおきにいいらしいね。

「ん？」

そんな談笑をしていると画面の端に見慣れないデータを見つける、それを見た瞬間私の身体中に悪寒が走る。

「ウイルスデータだど!？」

それは極小に圧縮されたウイルスデータプログラム、それが解凍された瞬間だった。

「くっ…ルーテシア!! 君は直ぐに彼の処へ…切れてしまったか……っ」

このウイルスには覚えがある、ヤツの作ったデータだ……。さすがの私でも奴の専門分野で勝てるとは思えん……。このアジトも終わりだね……。

「ウーノ! いるかい!？」

「どうされましたか? ドクター」

あのウイルスはあと5分ほどでこの施設を飲み込むだろう…。その前に片をつけなければ。

「残りの娘たちを起こしメガーヌ女史の生体ポットも運び出してくれ！」  
「わかりました」

冷静に緊急事態ということ悟ったのか何も聞かずに対応するウーノ、こういった面ではさすがといえるだろうね。

「行先は？」

「こうなった以上、彼の助言に従うしかあるまい……」

さて…早速準備をしなければ…。

Side リユウト

アラームの音に反応して集合場所に行くところにはならない奴らを見つけた。

「アリーにティアナにスバル……ついでになのはさん、あんたら謹慎中だろ！」

上官だとかそういう問題じゃない、これって命令違反なんじゃないのか？

「えっと…いてもたってもいられなくて……」

「なのはさん…ソラさんに怒られますよ？」

この人ワーカーホリックだな…、それでも命令違反です。

「ん？　なんているんですか？　そのの4人…」  
「「「え、えっと…」」」

上がってきたソラさんに睨まれて冷や汗をかく4人、というかなんでB」姿なんですか？　まさかここからアレらを撃ち落とす気なんだろうか？

「さてと…現在ガジェットドローン2型が24機、キメラアニマル type B、空戦鳥獣型5体…：それらがこちらに向かって来ているんです」

ため息をつきモニターも見せてくれるソラさん、リニアに出てきたあの空を飛んでいるガジェットに翼の生えたライオン似のキメラアニマルが六課に向けて飛んできている映像だった。

「市街地ですからSランクまでですね…これからボクが一気に殲滅しますから貴方達へのお説教はその後です」

そう言っってほほ笑むソラさんの目は笑っていなかった。

S i d e o u t

「聞こえていますね、レジアス中将？」

その言葉を聞いた瞬間、その場にいたソラ以外の人物たちが微妙な表情をする。

嫌われてるなあ、レジアス中将。

「……誰かと思えばソラー等空佐か……」

「ええ、市街地における大規模魔法使用の許可をいただきたくて、ボクの許可を出せるのは今のところ貴方とシンジさんだけですから」

苦渋の表情をするレジアス、彼は海の勧誘を断り、八雲・瑠華・イヴ・ユーノなどといったSランク以上の魔導師達と共に首都防衛についている功労者だ。

レジアスにしても中々厳しく出れない相手でもあるのだ。

「…4ランク解除承認する、頼むぞソラー佐」

「ええ、ありがとうございます」

コンソールを操作して解除コードを打ち込む、その瞬間ソラから魔力があふれ出すように高まる、ソラ本来の魔力量はSSSランク、その一部を開放しただけでこれなのだ。

「ユーノさん、捕縛結界お願いしますね」

「わかったよ、今回は“本”も使うね。」

ロストスキル

神子技能発動、

アンリミテッド

“無限魔

ソトライブラリー  
導図書館”…展開」

展開されるのは現れては消える本の群れ、その中から一冊の本を取り出してその本を開く。

「我が乞うは敵を閉じ込める堅牢なる檻……開け“監獄の魔導書”

！ 捕らえよ！！」

ユーノが発動させた魔法により遠距離発動で超広範囲結界に捕縛結果が生み出される、半径10km・縦幅20kmの球体型。

内部からの攻撃を受け付けず、外部からの攻撃を取り込む高位結

界魔法。

「ナイト、モード3rd、カートリッジロード」

【魔導杖モード、ロードカートリッジ】

大口径のカートリッジが吐き出されミッド式魔法陣が背後に現れる、ソラの右腕には神罰・断罪光剣、左腕には漆黒の帯…神罰・漆黒封刃、両方ともSSランクを超える攻撃力を持った魔法。

さらに上空にはベルカ式魔法陣により生み出された巨大な漆黒の剣、デアボリックエミッション・ブレイドがセットされていた。

「敵を貫け断罪光剣！ 敵を飲み込め漆黒封刃！ 闇に沈めデアボリックエミッション・ブレイド！！」

膨大な魔力の開放とともにその魔力の余波で強烈な風が吹き荒れる、そこはユーノがワイドエリアプロテクションで防いでいる。

数瞬後、闇色の光と閃光と共に捕縛結界内に魔力爆発が吹き荒れ中にあつた全てを消滅させた。

「ふう…こんなものかな？」

余波でポロボロのBJを消し、制服に戻ったソラが結界内の残存がないのを確認、妙にすつきりした表情で微笑んでいた。

Side 龍也

仕入れも終わり喫茶店で準備していると慌ただしい音が響いてくる、この気配は…ああ、あいつらか。

「何の用だ？ ジェイル」

「はあはあはあ……いやいや、すまないね……ここに来るほかなかったのですね」

「はあ……何人来たんだ？ ……ん、16か」

それに生体ポットまで持ってきて……なにがあつたんだ？

「龍也……ケーキ」

「ほれ、紅茶は少し待て」

紅茶やコーヒーを淹れている間、何があつたかを聞きため息をつく。

奴はまたやつかないな戦力を得たわけか……。

「六課に行くぞ」

「……それしかないんだらうね」

「あの少年のことだ、うまくやるだらう」

そうでなければ困るのだ、奴を滅し、我が妹を救うためにはな。

第15話『暗躍』（後書き）

「あとがき物語の神子の部屋」

ソラ「というわけで今回はここまでです」

イヴ「次回から機動六課は過剰戦力ともいえる戦力になるわけ、最近空気がリユウカもヤクモも出てくる」

アインス「私もだな」

ソラ「さて、次回からだんだんと六課強化をはじめますよ」

イヴ「これ以上強化？ 世界征服でもするの？」

アインス「まあ…理由はそのうちわかるだろう」

疑問・質問・誤字脱字・リクエストなどあればどしどしください！  
では次回もお楽しみに！

第16話『六課の休日・出発編』（前書き）

まずは謝罪を

長らく放置してすみませんでした

詳しくはあとがきにて…

さて、これから先はオリジナルの展開しかありません！！

原作を9割くらい無視して話が進んでいきます

で、作者がそろそろ糖分禁断症状になってきたので最初は簡潔に、後から砂糖多めでお送りしたいと思います

ちなみに……今回は今までで一番長い話になります

予定としては今回の【出発編】

【デート編】 【事件(?)編】です

渋いお茶、もしくはブラックコーヒーを用意してお読みください

では………始まります………



## 第16話『六課の休日・出発編』

あの後、ソラによってなのは・アリスト・ティアナ・スバルの四人は素晴らしい（目の笑っていない）笑顔で1時間ほど説教をされ、涙を流していたとか。

そのあと、なのはの過去が暴露（アニメ参照）され、さらにはユーノの告白シーン（バルディッシュより記録提供）も流された（ユーノは完全にとばっちり）。

それだけではなく、1時間間に各方面から記録映像を取り寄せアリスト・ティアナ・スバルのハプニング映像が流された、この後全員が本気で泣いたらしい。

（数日後）

前線メンバーに衝撃が走った。

『全員一日休日』、これを部隊長であるはやてから告げられたのである、新人だけではなく隊長陣でもある。

「ちよつ、は、はやてちゃん！ いくらなんでもそれは……」

なのはが前線が全員休日にするのは問題があると言おうとした瞬間、はやてがそれを手で制する。

「ええんよ、というかつちかてお休みや」

「えっ、う、嘘!？」

今回休日を令を出したのは他でもない部隊創設後見人「カリム・グラシア」、抜けたFWメンバーの代わりに教会騎士団を送る手はずになっている。

部隊長であるはやては本来なら休日などあるはずもないが…。

「ホンマやで？ ソラくんの部隊からイヴ二佐が来てるんよ…それでうちの代わりに部隊の管理なんかをもらうんやて」

部隊指揮権限がはやてと同じイヴが起用されすでに引き継ぎが終わっている、ちなみにそれらすべての根回しをしたのはソラ、アドバイザーとして六課メンバーは働きすぎであるための処置だ。バックヤード陣にも後々各員に個別で休日が渡される予定だ。

「というわけで、みんな自由にしてええで。うちもソラにデートに誘われとるしな」

「で、でも空戦魔導師が極端に少ないんじゃ…」

「安心しろ、俺がいるからな」

そこに現れたのは金髪のショート、紅い瞳を持った顔だけを見れば青年に見える女性（胸が女性だと主張している）しんのうで神能寺 りゅうか瑠華だった。

「りゅ、瑠華さん!？」

「なんだ？ 俺では不満か？」

ニヤリと笑う瑠華に対してなのは首を横に振る、地上部隊エルベラルトの中でも上位に位置する戦闘能力をもつ瑠華、現在の魔導師ランクはSS、圧倒的な魔力量・神子能力により『歩く兵器』として有名になっていたりする。

「ならば安心して出かければよい」

そういい颯爽と去る瑠華、実際なのはと瑠華の模擬戦での勝率は4：6である、なのはが負け越している相手であるから何とも言えないのが現状である、ちなみにシグナムやフェイトは7：3で勝ち越している。

「まあ、そういうことや。　　こんな滅多にないんやしユーノくとデートすればええやん」

「あう／＼／」

真っ赤になるのはを見ながら心の中で「ういういしいなあ」とか思っているはやてであった。

Side　ティアナ

ヴァイス陸曹にバイクを借りて待っているスバルの元へ向かおうとした時、バイクを弄ってるリュウトとジープタイプの車を掃除しているアリスト見つけた。

「なにしてるの？　二人とも」

「ん？　ティアか」

「おいらは車の掃除、ライトニングの二人を街まで送る為になあ」

あ、そうなんだ…。

てつきりフェイトさん辺りが乗せてくのかと思ってただけ。

「ちなみにフェイト隊長はヤクモ副隊長と出かけるそうだ」

「で、ガキ二人は気を使って俺らに送ってもらって言うちまったらしくてなあ、急遽おいらが車を出すことにしたんよ」

ちなみにミッドでは管理局に入っていると乗り物を操作することが増えるため年齢が低くても自動車免許などが取れる場合がある、それで、アリストはそれで運転免許を取ったみたいね。

「そつだ、俺達も街に出かけるが、ティア達も一緒に回るか？」

「え？」

「男二人では華がないからな」

言われて頬が熱くなるのを自覚する、最近になって私のことを愛称で呼ぶようになってよく笑顔も見erようになった、リュウト普通にかっこいいから毎回ドキッとしてしちゃうし…って、今はそういう話じゃなくて！

「べ、別に私は構わないわよ！」

「それは僥倖」

ああもつ！！ その笑顔やめなさいよね！！／／／

「おつし、こんなもんだろ……って、どしたんティアナ？ 顔真つ赤だぞ？」

「うっさい！！」

「何故に怒られた？！」

空気読まないあんたが悪いのよ、まったく！

「アリー、俺は先に行くから後で合流」

「あいよ、途中で事故るなよ」

フルフェイスタイプのヘルメットをかぶりエンジンをかけリュウト、というかすごい良い音出してるわね、そのバイク。

【行くか？】

【ええ、というか音大きいわね】

【オプシヨんだ、切り替えできる】

というか、深夜その音出したら捕まるわよね。

スバルを後ろに乗せてツーリングの要領で並走する私とリュウト、結構なスピード出してるのにそれに余裕で並走するあのバイク良い馬力出してるわね。

「ひゃっほー」

「スバル、ちゃんと捕まってるわねと落ちるわよー」

「だいじょーぶ！」

まあ、こいつがそう簡単にバランス崩すとは思えないものね。  
というか、アリーの車も速いわね…、エリオにキャロは大丈夫なのかしら？

Side アリスト

「おーい、二人とも大丈夫か？」

「はい」

「これくらいなら」

ま、内側には中々風は来ないからな。こつこつタイプのおープン型は上手く風の流れをコントロールしてるし。

「向かう先は駅でいいんか？」

「はい」

「そこから移動して中央まで行って買い物する予定なんです」

ほー、察するに良い所教えてもらったみてえだな、教えたのはさしずめアリサさんにすずかさんってところか？

「シャーリーさんにも教えてもらったんですが、アリサさんがそのデータの代わりって言ってこちらのデータを上書きしてしまったんです」

「なんだか『子供には早い』だそうで…」

シャーリーさん、いったいどんなプラン渡そうとしたんですか？  
つと、そろそろS字の連続カーブか…、さすがにエリキヤロもいるしこつからはスピード落とすか。

「あ…ティアナさんたち離れていきます…」

「こつから連続カーブだからな、あのスピードのままだと結構Gがかかるからな」

一人ならあのままぶつちぎってもいいがそうもいかないからな。

「「すみません」」

「そういつときはありがとつだぞ、二人とも」

まったく、ガキが気を遣いすぎなんだつこの。

まあ、そうならざるを得なかった事情があったのかもしれないけどな。

「おいらならいくらでも手を貸してやるから、あんま謝ってばっかいるなよ？」

「すい…いえ、ありがとうございます」

「ありがとうございます、アリストさん」

「きゅくる〜」

よしよし、ガキは笑顔を絶やさないのがいいのだ、特に女の子ならばな！

笑顔を忘れちゃったらそこからは良いことなんて寄ってこない、神様はいつだって笑顔を絶やさないものに幸せをくれるんだかな。

「しつかし…なんでいきなり休みになったんだろーな？」

「さあ？ フェイトさんたちも困惑していたみたいです」

「朝礼でいきなりでしたし…」

なんかこう…後々後悔しないよう遊んどいたほうがいいかも。

今日はそれなりにお金あるし……スバルにプレゼントしてみよっかな？

Side ソラ

皆を見送り、ボクたちも出かけることになりました。

人数が多いのでワゴンタイプの車を出してそこにボク・アリサさん・すずかさん・はやてさん、ヴィータさん。

運転はアリサさんで助手席はボク、後ろには残りの皆が座ってい

る。

「で、結局行くあてはあるん？」

「デートだし、プレゼントもしたいからウィンドウショッピングが一番かとおもって」

「それならクラナガンね」

エンジンをかけて出発、今日はみんな私服でかわいらしい服装だ。アリサさんは赤いカーディガンに白いワンピース、すずかさんは黒のカーディガンに淡い青色のキャミソールとクリームイエローのロングスカート、はやてさんは白の半そでの上に淡いピンクの上着を羽織って、膝辺りまである若草色のスカート、ヴィータさんは袖なしのデニムコートにデフォルメされたドクロの半そで、黒いミニスカートにニーソックス。

ちなみにボクは上下とも空色の中華服です……下はちゃんとズボンです。

「しかし……よくこんな無茶できたな」

車に乗り込んですぐにヴィータさんがつぶやく。

たしかにかなり無茶しましたけど今楽しませてあげないとしばらく……いや、事件解決まで皆さん絶対休む暇すらなくなりますからね。

「ほんまになあ、でもこうして皆で出かけるんは久しぶりやなあ」

「そうだね、前は1年以上前だったよな」

「そうだったなあ」

「ん、それじゃ出発するわよ！ 時間は有限なんだから！」



久々の出番だ!!!!!!

…? 電波か?

「どうしたの? ヤクモ」

「いや、ちよつとテンションが上がってるみたいだ」

久々のフェイトとのデートだ、テンションが上がらないわけがない!  
い!

普段は執務官の仕事が忙しいから二人とも中々一緒の時間が取れない、それでも時間を合わせて週に1回は一緒の時間は作ってるけど長期任務になると中々な?

「ね、ねえヤクモ…この格好へんじじゃないかな?」

不安そうな表情のフェイト、というかその質問は美人なフェイトが言っても答えは決まってる。

「とっても似合ってる、俺には勿体ない位な」

「え? えへへへへへ」

かわいいなあ、もう。

「でもでも! ヤクモだってカッコいいよ?」

「あ、ありがと／＼／」

だめだ、ニヤニヤしてしまう。

仕事なら無表情にできるが、どうもフェイトの前だと隠すこと

出来ないんだよな、まあ隠すつもりもないんだが。

「今日はどっちの車で行こうか？」

「ん〜、久々にヤクモの車に乗りたくない？」

俺の車はフェラーリ・288GTOをモデルにしたミッド仕様の車だ、二人乗りだが中々乗り心地は良い。

「ドライブメインでいって途中で買い物かな？」

「だね！」

嬉しそうに腕に抱きついてくるフェイトにどうしても頬が緩んでしまう、今は思いつきり羽を伸ばす時だ、仕事は一時忘却の彼方へと追いやっておこう。

「それじゃ行こうか」

Side ユーノ

なのはの部屋の前で待ち始めてから30分、そろそろ待つ時用の小説を読み切っちゃいそうだ。

中からの気配からするとあたふたしているのが手に取るように分かる、多分着る服に悩んでいるんだろうけど…。

【ね、ねえユーノくん！ピンクと白だったらどっちがいい？】

【ん〜、白かな？】

……何の話だろ？

【ちなみなのは、今のはどの服の話？】

【え？ 下着だけど？】

……………え!?

【……………にゃああああ?! / / /】

あゝ、うん / / / 聞かなかったことにしよう / / /

【なのは、とりあえずこの前プレゼントした服着てくれるとうれし  
いかな？】

【う、うん / / /】

五分後

「おまたせ、ユーノくん / / /」

「うん、似合ってるよなのは」

白のワンピースに桃色のカーディガン、リボンは若草色。  
ちよっと赤くなっているのははいつも通り綺麗だった。

「じゃ、いいっか?」

「うん!」

第16話『六課の休日・出発編』（後書き）

（あとがき物語の神子の部屋）

イヴ「今回は出発編、次回からデートに入る」

灰猫「おつすオラ作者！ まずは皆様に心からの謝罪を……一か月近く放置してすみませんでした」

イヴ「ごめん」

灰猫「実は旅行や仕事のスケジュール変更でドタバタして中々書く気力がなくここまで長引いてしまいました」

イヴ「これだけじゃあれなので、オリジナルキャラクター募集の件、決定したキャラが二人いる、発表する」

灰猫「まずはラモン様より送られてきましたキャラクター、ルツカ  
「ミリエラ！！ そして黒天使様のフォルト「クルーク！！」

イヴ「これであと男女1人ずつになる」

灰猫「今日はこのあたりで、では次回をお楽しみに……！！」

第17話『六課の休日・楽しいデート編・前』（前書き）

お待たせしました！

第17話は本来一話に全てをまとめようと思いましたが、スランプに陥りこのままでは一向に上げられないと判断、半分ほどで投稿に踏み切りました

クオリティが低いですが、どうか読んでください

励ましのコメントを下さったGIN様には感謝の言葉を贈りたいと思います、本当にありがとうございます

感想などは本当に力になるのでお待ちしております

最近他の方々の感想を書いていませんが、ちゃんと読んでいます、この場で他の作者様がたに報告したいと思います

では本編をどうぞ！！

第17話『六課の休日・楽しいデート編・前』

Side リユウト

スバルが行きつけというアイスクリーム屋の前でのんびりしていると一台の車がパーキングに停まる、どうやらアリーも来たみたいだな。

「おまつとさん」

「お疲れ」

片手をあげてねぎらいをかけておく。

「あ、アリストくんおつ…か…れ？」

「ずいぶん早いじゃな……い……？」

ティアナやスバルも気づいて出迎える、それより二人はどうしてそんなポカンとした表情になっているんだ？

「なんだ？　どうかしたのか二人とも」

「い、いや…アリストくんだよね？」

そういえばこの二人はアリーの髪上げた状態見たことないんだっただな、意外と目つき鋭いから普段は前髪を落としているから…面倒だからというのもあるらしいが。

「おいら以外の誰だっただ…って、やっぱりこの格好だわな」

雰囲気はアリーの元来のお気楽な感じだが、深紅の瞳とその眼光

は異様に目を引く。一重だから仕方ないとはいえ切れ長だから睨んで見るようにも見える。

苦笑するアリー、車運転中はどうしても視界を遮らないように前髪をあげるからな、ある意味コンプレックスだそうだからあまり見せたがらないしな。

「アリストくん！ 今日はそのままして！」

「何故に!？」

突然スバルが叫ぶ、なんだ？ 琴線に触れたか？

まあ、たしかに髪上げてる時のアリーは中の上あたりの見た目になるから並んで歩くならそうしたほうがいいという女心だろうな。そこら辺を分かってないアリーは救い様がないな。

Side スバル

「ゲーセンか…久しぶりだなあ」

「私たちもだよー」

普段はだらしのない感じだったけど、髪上げるだけでここまで印象変わるとは思わなかったなあ、確かに目つきは悪いけど雰囲気は相殺してるし。

ちなみに今ティア達とは別行動…っていつても同じゲーセン内ではあるんだけど、リュウトくんが音ゲー方面に行っちゃったからティアはそっちに行ってる、私はアリストくんと一緒にUFOキャッチャーをしにきてる。

「むむ、カワイイぬいぐるみ発見！」

「あ、動物戦隊シリーズだね」

動物戦隊は5年くらい前から放送されはじめた動物たちが自然を守る為に戦うアニメ、老若男女問わず大人気で関連グッズはどこでも見かける、マリーさんもたしか集めてたなあ……私もだけど。

「お！ あれって黒猫のクーじゃん！」

「うわあ、珍しいね」

今期の動物戦隊は五匹組みで、犬・猫・ハムスター・フェレット・飛竜の組み合わせ……竜が浮いてるけど気にしちゃダメなんだよ？で、黒猫のクーは敵でもなく味方でもない無愛想な猫、時々助けしてくれるけど毎回のように報酬に餌を要求する、一部では人気あるけど中々関連商品の出ないキャラでもある。

「よし、ゲットD A Z E」

「私としては白猫のハーのほうがいいなあ」

ボソッと言うとコインを入れようとしていたアリストくんの手が止まる。

「ほしいの？」

「え？ あ、うん」

思わず頷くと、真剣な目をしてUFOキャッチャーの中をじっと見つめる、白猫のハーは黒猫のクーのすぐ横、その一点を見続けるアリストくん。

「……………見えた！……！」

「何が!？」



突然叫ぶアリストくんにびっくりしていると、コインを投入し迷いなくボタンを押すアリストくん、アームが向かった場所は白猫のハアの頭上。

「あ……」

でもアームが下りていくと白猫のハアは倒れてしまい失敗したように見える。

「計画通り……（ニヤリ）」

そのままアームが下りていくと黒猫のクーのタグをひっかけるように左のツメが入り込み白猫のハアの右肩と股下を挟み込むようにアームが閉まる、タグは白猫のハアの身体がある為ずれ落ちず、二匹同時に景品出口に落ちてくる。

「よし！ ほれスバル」

「わっと」

二匹を取り出して私のほうに白猫のハアを投げて渡してくれる、  
とうにかすごい技術力だね。

「ありがとう」

「なあに、スバルの笑顔が見ただけで十分だって」

わわわ／＼／ ちよっと、ニヤニヤしながら変なこといわないで  
よー／＼／

「にっしっし」

「もう／＼／／」

アリストくんって、意外と素面で歯の浮くようなセリフ言うからびっくりしちゃうよ／＼

でも耳赤いし実は恥ずかしかったりするのかな？ でも…、私の秘密をまだアリストくんは知らない。それを知った時にアリストくんの見る目が変わるのがとてつもなく怖い……。

Side ティアナ

リュウトと一緒に音ゲーコーナーに来てみたのは良いんだけど…。

「……うおおおおお！！」「」「」 野次馬の声

鍵盤みたいなキーを押すビー ニとかいう機体の前に20人くらいの観客がいるため、なかなかリュウトの番が来ない。今やっている人の……レベル12……最高難度ね。

「人間業じゃないな……」

先ほどからタイミングを外すことなくキーを押す人物、まわりは難しい譜面になると一斉に静かになりそこを抜けると大歓声を上げることを繰り返している。

聞いた噂だとこのレベルの人はかなり少ないらしい、最高難度の曲にもかかわらず先ほどからほとんどミスをしていないし。

「あ、終わったわね」

「しかも帰るところなのか……さて、やるか」

野次馬の人たちもぞろぞろと消える中、リュウトはコインを取り出してカードを機体に入れてパスワードを入力、リュウトが選択したのはレベル10～11ほどの曲。

それにしても曲の名前が読めないのがあるわね…たしかなのはさんたちの出身世界の文字だったかしら？

「……これだな」

で、リュウトは曲を選択、振り仮名からしてオオイヌノワルツかしら？

「……普通に上手いじゃない……」

順調に点数を稼いでいくリュウト、素人目じゃあんだって人間業じゃないわよ？ それにしても楽しそうね、リュウト。

20分後

「おつかれ」

「やはり12はまだ無理だな…数曲しか」  
「十分じゃない」

とりあえずリュウトが終わった時点で協力プレイのできる機体のコーナーに移動、そこにあったガンアクションの機体にコインを入れる。

「んー、久々だけど上手く行けるかな？」

「毎日撃ってるだろ？」

「それもそうね」

機体の大きさの関係で多少肩が触れ合うくらいの距離でやるこのゲーム……う、うれしくなんかないんだからね！ け、計算でもないわよ！！ ちょ……ちょっと期待はしてるんだけど。

「む……」

「な、なに？」

「いや……ティアナ香水付けてるのか？ 多分柑橘系……」

ちょ？！ 私ほんの少ししか付けてないのに気づいたの！？ ま、まあ……という時のために通販で買ったんだけど……。

「ま、まあね」

「そっか……おっと、始めるか」

もう、もうちょっと気の利いた言葉聞きたかったわね……。

Side キャロ

エリオくんと一緒に来たのはアリサさんオススメのデパート、いっぱい色んなものがあって面白いです。

服はフェイトさんに買った服です、フリードは今はカバンの中で大人しくしてもらっています、流石に飛び回るのは駄目ですから。

「いっぱいお店があるね、どこにいこっか？」

「うーん……迷うね」

エリオくんと手をつなぎながら歩いていると一つのお店に目ごと

まった、なかにはたくさんぬいぐるみが置かれているみたいです。

「ここにする？」

「う、うん！」

中にあるぬいぐるみ達はどれも手作りみたいで同じものが一つもありません、しかも種類はかなりいっぱいどれにするか悩んじゃいます。

「すごいね…全部手作りだよ？」

「ほんとだね……」

どれも綺麗に作られていて値札は付いていません、店員さんあたりには見当たりませんし…。

「あら？ カワイイお客様ね」

と、思っていたら奥のほうから綺麗な女性が此方に来ました、手にはデディベアを持っています。

「えっと、なんだか値札が付いていないみたいなんですけど…」

「ん？ なんだ少年、彼女にプレゼントかな？」

微笑みながら問いかける女性の言葉に顔を赤くしてわたわたししているエリオくん、えっと…照れてるんだよね？

「ふふ、ちよつとからかいすぎちゃったかな？ ああ、値段は全部

20ミッドドルよ」

「どつする？ キャロ」

エリオくんはまだ赤いままだけど私に聞いてきます、もしかして私にプレゼント？

「い、いいの？／＼／」

「う、うん／＼／」

「（あゝもゝ、かわいいわね！！ 娘を思い出すわあ）」

私はちょっと迷いましたがちょっと大きめのドラゴンのぬいぐるみを選びました、どことなくヴォルテールに似ているかもしれませ  
ん。

「あの、これお願いします！」

「ええ、それじゃゝ……今回はおまけして15ミッドドルでいいわ

よ

「えっ！？」

突然の言葉に私たちは驚きの声をあげてしまいます、お姉さんは大きく頷いた後、何か思い出したように宝石のようなものを私に渡してくれます。

「お守りよ、もう私には必要ないから」

「え……？」

「ふふ、また来てね」

第17話『六課の休日・楽しいデート編・前』（後書き）

（あとがき物語の神子の部屋）

ソラ「今回は前後編に分かれて投稿します、このまま書いていても中々投稿できないだろうとの判断だったらしいです」

アインス「私の話はまだないな……」

イヴ「私も」

ソラ「言い訳はありますか？ 灰猫さん？」

灰猫「えと……素で忘れてます」

アインス「デアボリックエミッション!!」

イヴ「無影連拳……（高速連打裏拳）」

灰猫「ヒデブツ!?!」

ソラ「次回は後篇、ボクたちとユーノさん達と八雲さん達ですね」

アインス「もしかしたらまた時間がかかってしまうかもしれないが、どうか待っていてほしい」

イヴ「じゃ、次回……またね」

灰猫「………（へんじがない ただの しかばねの ようだ）」

┌

次回もお楽しみに!!



第18話『六課の休日・ほのぼのデート編』（前書き）

えー…スランプを何とか脱したのでこれからは随時更新していきたいと思います

具体的には二週間に1話くらいは……できればいいんですが来週はかなり仕事がハードなので上げられないと思います

では本編をどうぞ…！

## 第18話『六課の休日・ほのぼのデート編』

Side ソラ組

その面々はかなり目立っていた、美少女の集団。

その中心には雑誌にも載っているソラ、今回は変装もしていないためいつも通りのポニーテールであるため目立っていた。

通りかかり振り向く人は多いが声を駆けてくる人物は少ない、なによりその空間に割って入る勇気がないともいえるのだが。

「あ、アリサさんほっぺにクリームついてるよ？」

「え？ どこよ？」

公園の休憩所でクレープを食べている5人、そこで正面に座っているアリサのほっぺにクリームが付いているのを見つけたソラは近寄って行ってほっぺについているクリームをなめとる。

「はい、とれたよ」

「ちよっ、ソ、ソラぁ／＼／＼」

周りの目もある為少し焦るアリサ、周りはその光景に思わず目をそむけ口元を押さえていた、我慢できなかった人は砂糖を吐いて…  
…むしる噴射している。

「あ、アリサちゃんおいしいなあ」

「うー、うれしいけど恥ずかしすぎるわよ！／＼／＼」

意外と初心な反応をするアリサにはやてがニヤニヤしだす、それをヴィータはあきれたような表情で見っていた。

「はやて、あんまいじめつと後がこえーぞ？」

「……せやな」

でっかい冷や汗をかきながら目線をそらすはやて、それをすずかは口元をおさえながら笑っている、

「それにしても…あいかわらずソラはそういうのに執着心ねーよな」「にゅ？」

クレープを啜えながら首をかしげるソラに苦笑するヴィータ、仕事や訓練中は真剣な表情が多いソラ、こうしてまったりとしている表情は中々見られないものである。

エース オブ ストライカー、ソラの代名詞であり、管理局では参戦した戦いに負けはないといわれる者に与えられるものだ、地上ではその容姿も相まって老若男女問わず人気が高い。

子供たちの間ではその小柄な体格でベルカの騎士すら吹き飛ばすその姿で人気が高い、時々だが魔法学校などに呼ばれることがあり、そういつたときは必ずもみくちやにされているのだ。

「ソラを好きになったのはこういうのを隠さねーとこだったんだよな…／／／」

そんなヴィータの言葉に皆が頷く、ソラはちょっと恥ずかしそうに微笑んでいた。

「ボクも皆大好きだよ…これからずっと…死がボクらを別つまで…ね？」

その言葉に幸せそうな表情をするアリサ達、和やかに流れるその

空間に周りは大量の砂糖を噴射しているのであった。

Side なのは

久しぶりのユーノくんとデート……なんだけど……。

「で！ お二人の馴れ初めはどんなものだったんでしょか!？」

しつこそうなパラッチにつかまってしまった……、一人のときならまだしもよりにもよってユーノくんとデートを邪魔するなんて……。

「……少し……頭冷やす……？」

私はとりあえず時々邪魔するお兄ちゃんに向けるように尋ねてみる、パラッチは表情が固まって動かなくなる、ユーノくんがパラッチの前で手を振ってみるが全く反応がない。

「うん、気絶しているみたいだね」

にこやかな笑顔で伝えてくれるユーノくん、だらしのないなあこの人。

「どこに行こうか？ というか髪型変える？ そうしないとまたあいつのに捕まっちゃうし……」

「そうだね……」

髪を解いて髪を下ろす、これだけでも結構ばれないのは不思議で

ならないけど、これでなんとか普通にデートできそうだね。

「ねえねえ！ これ似合うかな？」

「とつても似合ってるよ？ でも……これを選ぶならこつちも一緒にしたほうが可愛いよ？」

ユーノくと来たのはシークレットルーム、VIPだけが入れるって言う場所らしい、一見さんは本来は入れないらしいんだけどソラくんの紹介状……というか、エルベンラルトの部隊証明証を見せたら普通に入れてくれた。

どうもソラくん達はこここの常連らしくて大体のものはここで揃えてしまいうらしい、アリサちゃんの納得できる服などはこつという所くらいしかないみたい。

そして、ここには空間シミュレーターを使い系列店の全ての情報から実際のものと同分たがわれないものが自由に選べる、さすがに試着などはできないけどね？

「それにしても……た、高いね」

「そうかな？」

今選んでくれた服でも500ミッドドル……、日本円で5万円もするもの。

確かに私のお給料も結構な額だけど、同じくらい税金も高いからこついった高いものをそうほいほいとは買えない。

「まあ、僕も結構な額を貯めてるし……、僕からのプレゼントだから気にしなくてもいいよ？」

「ええ！？ か、買ってもらうのは悪いよ」

いくらなんでも遠慮しちゃうよ、すごい金額になるだろうし。

「たまには僕にもカツコつけさせてよ…ね？」

「……………う、うん／＼／」

ほんと、何気ない表情がかっこいいんだから／＼／

「じゃあ私もユーノくん似合う服選ぶね！ もちろん私が払うからね！！」

「うん…そうだね、お願いしようかな？」

ユーノくんが優しい笑顔で頷いてくれる、こういうのっていいよね？

Side フェイト

ヤクモの車で結構遠くまでドライブして、自然が多い場所までやってきた。

こちら辺は所々に移動型店舗があつて中には雑誌で紹介された処もある、そのうちの一つの惣菜パンを売っている店でサンドイッチとコーヒードで昼食を取っている。

「それにしても…こんなのにんびりしたのは久しぶりだね」

「そうだな、俺たちは執務官だし仕事が多いから中々2人きりつてわけにはいかないからな」

先にサンドイッチを食べ終えたヤクモがゴミを屑かごに投げ入れる、片目になっているのに距離感をつかむのがうまいのは流石だな

あ。

「今回もソラが勝手に決めたせいで驚いたが……」

「うん、でも休めれるときに休まないかね」

最後のひと欠片を口の中に入れて租借、おいしいパンを使ったサンドイッチはとても満足のいく味だった、ただコーヒーはやっぱり翠屋には敵わなかったけど。

「ああ、それにしてもここら辺は静かだな……落ち着く」

「郊外だし、それにクラナガンのほうが楽しいんだよ」

今回はドライヴがメインだったからここまで来てたけど、普段はこんな遠くまでは来れない、緊急任務がいればすぐにでも出動しなければいけないから、結局近場で済ませることが多かったし。

「また：暇ができたらかこういう風にしたいな、フエイト」

「そうだね」

場所を移動して高原のような場所、そこで二人して寝転がっていた。

ここはヤクモの知り合いが所有している土地らしくて、整えられた森やこういつた高原っぱいのが広がっている。

所有者は無料でここを開放しているらしい、でも場所が場所なだけにあまり人は来ないらしいけど。

「ん〜…草のいい香り……」

「草むらには香草も多いし、それに自然が育てた草花は生命力に触

れているからな」

思いつきり空気を吸って空を眺める、真っ青な空に僅かに漂う雲。なのは達と出会ったあの時には思いもしなかった日々、とても楽しく幸せなこの瞬間。

絶対に手放したくないこの瞬間をヤクモとずっと感じていたいと思っただ。

Side チンク

龍也殿の家にかくまわれて数日、今回は夕食の食材を買うためにノーヴェと共に街へと出かけていた。

さすがに戦闘用のボディースーツでは流石に出かけることはできなかったため、喫茶店に置いてある制服を借りることになった。

だが……どうしてこう……ヒラヒラしているのだ？ どうやらあの協力者の趣味らしいが……。

「うー、チンク姉……これ恥ずかしい……」

「我慢しろ、これくらいしか服がないのだから」

「これ作った奴ぜってーぶっ飛ばす！」

照れ隠しか？

私としてはもう少しスカートの丈の長いものの方がいいな、やはり。

「それにしても……この買い物リストやけに少ないな……」

「ああ、ドクターと龍也殿の話では明日にはあそこに行くらしいからな」



あの場所を逃げ出すように出てきてから妹達の調整に追われ中々動けなかったがようやく行動が起こせるようになった、もう我々の再起は不可能だがそれでもやらねばならないことは残っている、私たちが大手を振って生きて行ける世界……人造生命体の新たな“可能性”……生命の“可能性”に挑戦するドクターの新たな夢に。

「このような考えができるようになったのは龍也殿達のおかげだな……」

「チンク姉？」

「気にするな、ただの一人言だ」

与えられた“義務”でも“役割”でもなく……一個の生命を与えられた我々自身が抱く“可能性”を信じ歩む“未来”。

私達は輝ける“未来”へと行くことができるのだろうか……。

第18話『六課の休日・ほのぼのデート編』（後書き）

あとがきはお休み

感想・誤字脱字・リクエストお待ちしております

第19話『動き出す闇』（前書き）

かなり長い間更新できずに申し訳ありませんでした

次回も下手をすると年を越してしまいそうです

ただ、もしかしたら番外編…というかクリスマス企画を投稿するかもしれません

もしリクエストなどあればお気軽にどうぞ

では、本編をご覧ください

## 第19話 『動き出す闇』

Side 龍也

一台のトラックを尾行し始めて既に5時間が経とうとしている。アイツからの情報でこのトラックに積まれている“少女”が奴の処に行くという、俺のミッションは奴らの潜伏先まで行き、我が妹と“少女”を確保すること。

だったのだが。

「ちっ……鉄屑め……」

トラックに積まれているレリックに反応したのかガジェットドロイン？型が15機ほど群がってきた。

「しかたない……少女だけでもかく……」

ガアアアアアアアン！！！！

確保しようとしてバイクを止め近寄ろうとした瞬間、爆発音とともに“虹色”の魔力が渦を巻いて吹き荒れる。

これが“聖王”特有の魔力光とかいうものか、確かに質・量どちらも優れた魔力ではあるな、しかし七色の魔力光か……意外と綺麗なものだな。

「はぁ……はぁ……っっ……」

「この子供か……」

雰囲気は今は不安定だが……ふむ、まあ問題はないだろう。

「……………」

静かに距離を置いて座る。

あまり近づきすぎでは怖がるだろう、今は落ち着くのを待っただけだ。

（10分後）

魔力が収まり、おぼつかない足取りで近づいてくる少女。

リュウトと同じく人造生命体、聖王のDNAを使い作られた生命。つくづくこういったことに縁があると自分でも思う。

「……………」

「ついてくるか？」

俺の質問に頷く少女、そっと頭をなでてやると驚いた表情の後抱きついてきた。

自我もしっかりしているしケガもほとんどない、多少汚れているが店に戻ってからウーノ辺りにでも頼んで風呂に入れればいいだろう。

「名前は言えるか？」

「…………… ヴィヴィオ」

## Side ギンガ

時刻は昼、事故現場について真っ先に目が行ったのはバラバラになったガジェット、運転手は事故のショックで記憶があいまいになっているらしく詳しい情報を得ることはできなかった。

現状からして中であつた何かの爆発で四散した感じ……、中にあつたのは壊れた生体ポット、おそらく中にいた人造魔導師がこのガジェットたちを破壊したのだろう。

「おゝ、こりやまた派手にやられてんなあ」

「……え！？ 何でシンジさんがここにいるんですか?!」

検証をしているときいきなり後ろから声がして振りかえると、そこにいたのはシンジさん。

時空管理局本局技術開発部総責任者、階級的には少将待遇らしい。1年ほど前からお付き合ひしている私の恋人さんでもある。

「ちょいとな、しかしこりやひどいな……おりゃ!!」

ギヤイン!!

突然振りかえりざまに蹴りを放つシンジさん、すると鋭い金属音と共に蜘蛛のようなガジェットが現れ吹き飛ばされていく、私はしばし呆然としたまま立ち尽くしていた。

「ガジェットドローン? 型……レリックくらいしか反応しねえコイツが何でこんなところに現れるんだ?」

シンジさんの手が振るわれると辺りに淡い光に包まれる、【不干渉領域】とよばれる“魔力を必要としない”特殊技能、精神力を一種の“エネルギー”と捉えそれを持って事象を起こす魔法とは違う

“技能”。

でも現段階ではシンジさんくらいしか使える人はいない、複雑な論理・計算・特殊思考を必要とする技能は習得に並々ならぬ時間を要するからだ。

「んー……ステルス無効に設定して現れねえのなら他はいないのか……」

そうつぶやくシンジさんの背後が揺らぎ、一人の少年が姿を現す。

「シンジさん！！後ろっ！！」

「おう分かってる、こつというのは慣れた」

シンジさんは笑顔を見せながら振り向きすぐにそのまま相手に向かって蹴りを放つ。

シューティングアーツを修めている私にはその蹴りの威力がはつきり分かった、魔力強化を使った魔導師並の蹴り、それが腕を振りぬこつとしていた少年の顔面に叩きこまれる。

……顔面は危ないんじゃないんだろうか？

「ちっ、フィールド系防御か…完璧な不意打ちだったはずなんだが？」

「危なかったよ……、流石最強の非魔導師だね」

「だーれが最強だ、俺はちよつと強いだけだ」

ちよつとってレベルじゃないと思います。

相手はそれに対して苦笑いするだけ、どうも思い当たる節があるらしく「そうだね」と軽く相づちをうつっている。

「君達には苦勞しているんだよ、コソコソ僕等を嗅ぎまわってさ」

「それが“約束”だしなあ？　そんでお前は【神王】のクローンで間違いないんだろ？」

「……どこまで知っている」

険悪な雰囲気漂う中、シンジさんは涼しい表情で懐から一枚のカードらしきものを取り出す、データディスクというわけではなさそうだけど？

「さあてな？　ちなみにこいつは試作型疑似リンカーコアシステム搭載、プロトタイプS型『ファントム？』」

【スタンバイ・レディ】

“魔力”を持たないはずのシンジさんがデバイスを起動させる、形は無骨な直剣型。カードリッジシステムはないようだが形態を見る限りアームドデバイスに分類される物だと思う。

それを逆手に持った状態で姿勢を低く構えるシンジさん、相手も警戒して構えを取る。

「おめえを捕縛する、覚悟できてるよな？」

「戯言をー！！」

そして、示し合わせたかのように2人は同時に動き出した。

Side out

ぶつかり合うのは少年と男性、膨大な魔力を使い力押しで男を打ち倒そうとする少年と、技を見切り最小限の力のみで状況を支配する男、シンジ・ライドウ。

さて、まずシンジ・ライドウとは何者かから話をしよう。

時空管理局本局技術開発部総責任者というのが彼の肩書である、



彼の開発するデバイスや新技術は管理局においても重宝され、特に高ランク魔導師・レアスキル保有魔導師用の専用デバイス作製や低ランク魔導師用の高効率魔力運用専用ストレージデバイスなど、最新式のデバイスの開発、また、新しい戦艦に乗せるための魔力炉など様々なモノの開発に携わっている。

そんなライドウだが、アリサとすずかが攫われた事件の際に不意打ちで昏倒させられてから体を鍛えるようになった、それもミッド主流のストライクアーツではなく各次元世界の武術家を訪ねその技術を学んで来ていた。

5年という歳月を経て、その時間を開発と武術訓練を並行して行い今の技量まで上り詰めた、管理局において非戦闘員でありながら推定ランクSの非魔導師。

「甘い！ 貴様の攻撃は蜂蜜練乳ワツフル並に甘すぎる！！」

「ちいつ！ 何なんだよ！！」

少年の巨大な魔力刃に籠っている威力は推定AAAランク、それを出力設定Dランクのファントムで捌ききっている。

正面から受けたならば間違いなく一瞬にしてシンジは真っ二つになっただけであろう、それを日本の剣道に似た捌き方…つまり刀身の横を叩き軌道を逸らすことで防御する。

飛び散るように煌めく魔力光、力でもライドウは少年に劣っている、魔力強化を受けた人間の力は使っていない者にとってはあり得ない力を生み出す。

実際に10歳のエリオの攻撃でも大の大人を吹き飛ばすほどの力を秘めているのだ、それを身体能力に優れる神子の肉体で行うのだから、普通は魔導師でもキツイ。

だがそれでも、ライドウにとっては些細なこと、必要なのは軌道を読む事、そして正確に側面から叩いて逸らすこと、魔力弾ならばギリギリで回避してアームドデバイスの強度を使い叩き潰す。

「止めだ、堕ちろ！」

「ぐあつ?!」

そして、無理に攻めてきた少年を軽くいなし、魔力刃で胴をなぎ払った。

「ちつ、転移魔法陣：逃げられたか」

だが、少年の仲間だろう魔法陣に吸い込まれるように消えていく少年を見て舌打ちをするライドウ、勝ったには勝ったが納得のいかない結果となるのだった。

Side 龍也

バイクを走らせていると、突然周りに結界が張られる。

一旦バイクを止め警戒する、現在俺の腕の中にはヴィヴィオがいる、この子をかばいながらでは思うように動くことはできない。

「…それなりに強い奴が五人…全員高ランク魔導師か」

配置的に俺を取り囲むように実行犯が五人、結界担当は外のようだな。

やたらと雷を放つてもヴィヴィオが感電してしまう可能性もあるし、だからと言って体術でも反動でヴィヴィオが傷つく可能性がある。

現在俺の出せる力は3割、高機動型魔導師ばかりなら危険だな。

「やれやれ……ヴィヴィオ、此処を絶対に動くなよ？」  
「…うん…」

俺のできる事は敵の攻撃に合わせるカウンターのみ。そして、一刻も早くこの場を立ち去ること。

さて？ どれほどのものか試してやろう。

「久々の守る戦いか…。 水無月家現当主・水無月 龍也、行くぞ！」

Side out

戦いは一方的に行われた、ヴィヴィオを捕獲するために派遣された雇われの荒事を生業にする者たち。それなりの修羅場を潜り抜けてきた彼らにとって今回は楽な部類の仕事のはずだった。

誤算があつたとすればそれは龍也の正確な戦闘能力が分からないことだろう。

龍也はシンジと同じく非魔導師である、しかし、彼は“水無月家の一人である。武の神子の血を色濃く受け継ぐ一族にあつて唯一その資格を受け継がなかった長子、水無月家は古くから武の神子としての教育はするがそれは龍也には意味がなかった、そも武の神子とは多彩な魔力変換資質を同時保有し近中距離戦闘を得意とする“騎士”だ。

だが龍也にリンカーコアは存在せず、古くから行われていた神子の教育では一切育たなかった、一般的に見れば少し強い程度。

それが何時の頃からか、一人独自の修行をするようになった。

内容は単純、精神統一と高所での限界状態での修行である。

深い山の奥で必要な食糧・水などを全て自らの手で取り余った時間を精神統一に当てる。人間は文明がなければ自らの限界を出さねば生き残ることすら難しい、さらに龍也が修行場を選んだのは樹

海と呼ばれるほど深い森の中、携帯もGPSも意味を成さない人の文明の利器を拒む大自然の中彼は只管に生きた。

野生の獣が生きるその中で一人の人間は酷く弱い存在だ、人間が無手で敵うのは大の大人でも大型犬が限界、それも一対一の場合に限る。余程運がなければ大型生物には歯が立たないのである。

理由は単純、人間の身体能力の限界にある。

人間の筋力は必ず本能的にリミッターが掛けられている、それは理性では外すことのできないものであり、限界を出せない理由でもある。長い訓練を積みめば8割ほど出せるだろうが、それも一瞬だけであろう、それを出してしまえば人間の筋繊維などすぐに切れてしまう。

だが龍也の肉体のポテンシャルは1年間の修行の果てにその限界を超えた、血のなせる技かどうかは分からないが確かにその筋力は常人を遥かに超えるモノとなっていた。

そして、人間の脳も同じく全てを使えているわけではない。それを開花させた龍也に備わった能力は二つ。一つは彼が最も使う“帯電”、そしてもう一つが“時間”である。

これは俗に言う超能力のようなものである、しかしそれら二つは某禁書のように強力ではない、どちらも精々レベル2ほどであろう。

だが龍也はそれをあのビリビリ中学生並にまで力を増幅させる物を所有していた、代々水無月家に受け継がれてきた家宝の三つの古代兵装ティファクト、今はリインフォース・アインスの核となっている知識の指輪、様々な形へと変化する無形武神の指輪、所有者を守護する守りの指輪。そのうち無形武神と守りの二つの効果を上手く組み合わせ自らへのフィードバックを0にすることで許容量以上の雷を操ることに成功した。

さらに筋力を限界まで上げた龍也の脚力は異常だった、分かりやすく言うなら某無敵超人並と言えば想像できるであろう。それに時間の能力が加わり超加速が可能になっている。

現在龍也の能力は30%、それでもその能力はAAAランクの魔

導師であろうと一撃で落とせるレベルである。

「化け物が！！ 何故誘導弾が当たらない！！」

「甘いんだよ、俺と正面から挑もうとするならもう少し鋭くしろ」

龍也が使っているのは基本的に体術のみ、そこにそこ等辺に落ちている小石を弾丸の如く指で弾き誘導弾を狙撃し落としている。

たまに外の魔導師が転送魔法でヴィヴィオを誘拐しようとするが、バイクに搭載された特殊なジャマーがその位置空間の把握を邪魔し上手くいっていない。そして中に居る魔導師も近づけば龍也の拳、離れば礫にやられその数を残すところリーダー格一人になっていた。

「さて、そろそろ終わりだ」

ここまで特に構えていなかった龍也が構える、狙うのはリーダー格の男。

即座に上空へ逃れようと飛行魔法を使い距離を取るがお構いなしにその場で狙いを定める、腕が帯電しそれを拳を放つと同時に開放した。

「雷神ミムルの槌ニール！！！！」

生まれたのは巨大な雷の柱、それに吹き飛ばされるリーダー格の男、その一撃は結界をも貫き辺りを爆音が包む。

「さて、撤退するか」

驚いて目が点になっているヴィヴィオを抱え、悠々とその場を後にする龍也であった。

## 第20話『動き出すモノ達』（前書き）

更新がかなり遅れて申し訳ないです

今回はギャグ回ですが話が本編からかい離しているのでオリジナル路線です

次回から恐らく修行編に入りますのでおそらくギャグはしばらくなくなります

ですので楽しんでみていってください

今回遅れた理由はスランプと仕事のストレスでしょう。

最近対人恐怖症の気が見えるので。。。

被災地でこの小説を読んでいる方にはこれを読んで少しでも楽しんでいただければと思います。　いまだ多くの行方不明者がおられるので一人でも多くの人が見つかることを祈っています

俺の地元は東海三県の一つなので東海大地震に恐怖していますが、今は被災地の方々の無事を祈るばかりです

では本編をどうぞ

## 第20話 『動き出すモノ達』

その日、機動六課は荒れていた。

機動六課のフォワード陣が休日を貰っていたときに起きた3つの事件、その主犯人物が一人として捕まっていない状況で、地上部隊はかなりの焦りを見せていた、さらにその事件にレリックが絡んでいたため機動六課もその混乱に巻き込まれた。

最初こそ大した事件ではないと思われていたが、調べが進むほどの不気味で不可解な点が多すぎ、事件は解決の兆しを見せなかった。

「むう……中途半端に入ってくる事件調査報告では対処できんな」

「そんなことないで？ 瑠華さんやなかつたらここまでできへんよ」

そんな状況の中、部隊長室では八神はやて・神能寺瑠華が先の事件に関する報告などを行っていた。

「第一の事件にかかわるのは恐らくスカリエツティだろう、ガジエツトドローンの残骸が発見されている」

「第二は不明やな……シンジ技術長の回答待ちや」

「第三は…これも魔力反応のみ、送ったサーチャーは全滅だったからな」

地上部隊はこれに関して嚴重警戒体制を敷いたが、おそらく遅いだろう。

どうにも初動が遅く犯人にしてみれば穴だらけ、そんな状況では犯人逮捕は不可能だろう。情報操作などなく単純に指揮系統の問題だ。

「それにしても……いくら機動六課が海の所属とはいえシンジが此

方に来ることになるとは」

「地上の技術部は中々頑固やからなあ…、シンジさんもたらいまわしにあつたみたいやで？」

事情聴取のあとの対応は微妙だったそうだが、元々管理局用の宿泊施設にも空きが少なく地味にプライドの高い地上技術部は受け入れを拒否。結局シンジは知り合いの家に厄介になったそうだ。

「今日の午後には来るんやけど、詳しい話はないんや。何か聞いとらへんか？」

「詳しい話はソラカイヴくらいしか知らん」

2人はそのあとミーティングを続けるのであった。

side 喫茶【ミナヅキ】

その時、喫茶【ミナヅキ】は荒れていた。

「チンク姉！ 着替えのバックってこれだけツスカ？！」

「そ、そのはずだ！」

「デウーエ姉さまへの連絡っていれましたか？」

「あららあ？ そういえばしてないわねえ」

「ドクター！ 起きてください！！！」

「おい、リュウヤが切れそうだぞ？」

「トーレ姉さま、落ち着いていないでお手伝いお願いします」

「あ、こらテメエ！！ あたしの荷物踏むんじゃねえ！」

「あ、ゴメン」

準備をさせておいたはずのナンバーズの全員が何故か当日になっ



て慌てているのだ、龍也は額に青筋を浮かべ不機嫌そうに煙草を吸っている。

そこにトコトコと走り寄ってくる小柄な影、ヴィヴィオが笑顔で小さなバツクを抱えてそれを突き出しながら。

「できたー」

「おー、ヴィヴィオちゃんは偉いねえ」

「ああ、たしかに」

龍也の横でチクチクと人形を作っていたシンジが小さな拍手、龍也は煙草を携帯灰皿に押し込んだ後軽く頭をなでている。ヴィヴィオは嬉しそうに「えへへー」と声を上げながら頬を染めている。

「しっかし、大所帯になつたなあ」

「確かにな…つと、今度はルーテシアか」

「シンジ……これ破れた……」

持ってきたのは少し破れた彼女のお気に入りゴシッククロリータ調の黒いドレス、どうもひっかけたらしく破れの部分がみつともない。

「んー…、これなら5分くらいで終わるな、ほれ貸してみ」

「ん、お願い」

龍也は手持無沙汰なのか近くに置いてあった妙に古めかしい本を読みながらヴィヴィオに手品を見せている。

「それでシンジ、手はずは整っているんだよね？」

「ああ、滞りなく。機動六課には信用のおける人材のみ、レジアス中将にやすでに了解済み。さらに三提督にもな」

協力者、それが龍也とシンジの関係である。

その関係はおよそ9年前、シンジがイヴにやられた後フラフラとさ迷っていたときにまで遡る。そこで出会った二人は2、3言交わしただけだったがそのころすでに壊滅状態だった水無月一族の不足を補う代わりに龍也の戦力を借りる契約を結んだのだ。

龍也の妹が攫われた当初も犯人捜しに協力し今もその関係は崩れていない、龍也の指名手配に関してはほぼすべてが冤罪の為シンジは龍也の行動がしやすいように裏工作担当である。

「さて…いよいよ決戦なのだな」

「ああ、ずいぶんと時間がかかっちゃまったがな」

慎重に慎重を重ねてきた結果なので時間は仕方がない、バックにいる最高評議会は無視できるほど無能ではないし、権力も強い。シンジは技術・情報関係に関しては光るものを多少持っているとはいえあまり大胆に動けば即座に発見され消されてしまう。

「敵の情報は7割ほどは掴んでる、あとはそれをどれだけ生かし切れるかにかかっている」

「下手を打てば罠に嵌る…か。　　ヴィヴィオが選んだのはコレだな」

「わあー」

「龍也、スゴイ」

真面目な話のはずなのだが、服を縫っている奴と手品を見せている奴の2人組ではどうにも緊張感というものが欠けているように見えた。

荒れていた、それはもうこれ以上ない位に。

突然市街地に現れたガジェットドローンの軍団総勢300機、その対応に狩りだされたのは機動六課で臨時部隊長を務めていた地上部隊『エルベンラルト』副隊長、イヴ・フォード二等陸佐だった。

「あ、ありません」

「ガジェットドローン反応、消滅していきます」

イヴは『全知全能の神王』のクローンである、正当血統は遙か昔に別の存在になってしまっているために血は途絶えてしまっている、それをあの男が最後の神王のDNA情報を手に入れ作り上げたのがイヴだ。

「ロストスキル神子技能、アイオニオンヘタイロイ神王之軍勢」……全てを蹂躪せよ我が力、かつての仇敵アルハザードの鉄屑を飲み込め」

彼女の能力は『気配遮断』と『物量破壊』である、彼女の神子技能『神王之軍勢』は召喚される『魔獣』『神獣』『妖獣』の混成軍団である。

それら全てがイヴの指揮下に入る、その数は60体、それぞれがキャロの持つ本来の姿のフリードに並ぶ強力な『獣』であり並の術者では操れはしないのだ。それをイヴは事も無げに操って統制し、その物量で持ってガジェットドローンを破壊していた。

そんな時レジアスが通信画面を繋げてきた。

「……イヴ二佐、何故ワシの所にこれが来ておるんだ？」

「その子はレジアスが好き、だからそばに居させてあげて…強いから」

レジアスの顔に頬ずりするのには妖獣「猫又」、その内包する魔力  
…妖獣に関しては妖力だが…は大凡Sランク、さらに猫又の操る妖  
術は対象を傷付けない。その代り性質の悪い攻撃ではあるのだが、  
イメージは東方の弾幕を思い浮かべてもらえばいい、もちろんル  
ナティツク。

顔見せのときに連れていったことがあったのだがそれ以来レジア  
スに懐き、今回の召喚に乗じてレジアスの所まで行ったらしい、警  
備の穴をすり抜ける辺りその高い能力がうかがい知れる。

「……いつまでだ？」

「気に入られたら一生、安心して、魔力は自家発電だから」

「……嬉しいやら困ったやら複雑だ」

「にやあう」

「ああ、その子人間形態になればヒトの子供うん、それ以上は言わ  
んでいい」…ジョークなのに」

side アリスト

おいら達は現在出勤待機中、イヴ二佐のアホみたいなた強さを見て  
啞然としていた。

完全フルバックのはずなんだが、召喚獣の操作範囲がハンパねえ。

「キヤロ、あんな真似できるもんなのか？」

「む、無理ですよ！ 私はフリードともう一匹で召喚獣のコントロ  
ールは限界です」

だろうな、召喚ってのは知能が高い生物であればある程コントロ

ールが難しいらしい、間違ってもイヴ二佐の様に知性の高い魔法生物を60なんて数コントロール仕切れるはずがない、かならず暴走してしまう。それを成してしまうんだからその技量はやはりソラさんの同僚と言わざるを得ない。そういやファミリーネームが一緒だな…姉弟か何かかな？

「ふふ、イヴは世界でも1、2を争う『召喚術師』ですからね。ほら、あれは天空の守護者『天龍』、それに魔山の又シ『墮神楼』、あつちは『九尾の妖狐』ですね」

せ、節操ねえ！？ 竜種に動く大樹、それに通常の何倍もある獣  
レアスキル  
ロストスキル  
……希少技能じゃなくて神子技能……すげえ。

「基本エルベラルトは特殊な能力、神子能力ロストロキルを保有しているし、魔導士としてのスキルも上位ランク……まあ、ボクらは地上での危険任務・対高ランク魔導士の対応が主な部隊ですから妥当ですけど」

いや、明らかに過剰戦力です。

それでなくとも一人いるだけで状況が変わるSランク以上の魔導師、それが5人も集まっているエルベラルトは地上部隊……いや、管理局最強の部隊でもあるんだと思う。

【マスター、トラップに反応アリ。同時にサーモグラフィーターにより内一人がマイスターと90%の符号を感知しました】  
「ふむ、これは本格的に此方にきたみたいですね、皆さんお迎えに行きましようか？」

なんぞ？

side シンジ

六課直通の橋の入口に着いた瞬間金だらいの洗礼とわ……、あまりに危機感がなさ過ぎて当たっちゃったじゃねえか。これがギャグ補正か？

「ちよつ、大ジヨブツスカ？」

「問題ねえ、ちと痛いかな」

ウエンデイが心配してくれるがまあ問題はねえよな、所詮ギャグだ。

「ツつつかこらテメエだろこのヒラヒラした服よこしたの！！」

「なんだ？ 気にいらねえのかノーヴェ」

「つたりめえだ！！ こんなの好き好んで切るわけねえだろ！！」

そんなことはないぞ！ ギンガは喜んでくれてたんだぞ！

あと何気にカリムなんかも着てるよな？ あれは単純に龍也に見せたいだけなんだろうけどよ？

「しかし遠いな」

「仕方なかるーが、本来なら車で来るはずだったんだが【車はログアウトしました】状態なんだからな、転移も即サーチで御用フラグだ」

「シンジ殿は時々訳の分からない言葉を使うな……」

「スマソww」

いやあ、メタなこと言えば俺の元となった人物が人物だしなあ……あ、画面の前の人は知ってる人だぞ？ いわゆるこの世界の神様だ



レ!?

おいらには理解不能なんだが…。

「ふむ、確かに成長したが俺を倒すのにはあと15手足りないな…

…頭を冷やしてこい」

「のああああああ… (ドボンッ)…」

…あ、ありのまま今起こったことを言うぜ?

いきなりリュウトっちが突っ込んでいたら次の瞬間には一番長身のひよろつとした男に斬りかかったんだが片手で受け止められて海に投げ捨てられたんだ。

身体強化魔法とか防御魔法とかそんなチャチなもんじゃねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を垣間見た…そんな気がするぜ…。

「来たぞソラ少年」

「お前たち! 広域指名手配犯ミナツキリュウヤにジェル・スカリエッティ!! ……で、なぜシンジ技術部代表まで…?」

「よお、フェイト執務官 ま、ここは俺の顔を立ててちと刃は納めときな、詳しくはあとで話すからよ?」

いったい何が何なんだか???



第21話『清濁併せて』（前書き）

大変長らくお待たせしました。

短いですが何とか21話が完成しました。  
どうか楽しんでみてください！

では本編をどうぞ！ うっぴい

## 第21話『清濁併せて』

機動六課・ブリーフィングルーム

現在集まった人間は現在三種類に分類できる。

警戒心を最上まであげ何時でも対処できるようにしている者。

状況に追いつけずあたふたしている者。

特に緊張もせず自然体の者。

「さてと……では今回の説明は一応階級的に一番上の俺から説明させてもらっせ」

そして、全員の見える位置に立つシンジ。 管理局技術部主任・少将待遇である彼は手元の小型PCを操作し部屋の明かりを落とす、それに反応してフェイトとなのはが動くこうとするが。

「ほれ座ってる」

「あたっ」

「きゃっっっ」

何処からか取り出した飴玉を投げて額に当てる、上手い具合に上空に上がった飴玉はそのまま2人の口の中に入る。

「あ、甘い」

「そりゃ飴だかな……ほらヴィヴィオもあげるから指くわえない」

結局女性陣全員＋ に飴玉を配りため息をつくシンジ、そのおかげか険悪な雰囲気はなくなっていた。

「さてと、説明させていいだろうか」

シンジが手元の端末を弄ると空間ディスプレイが表示される、まだ何も表示はされていない。

「まずここに龍也がいることから説明させてもらう、まあ待遇的には俺の私兵って感じだな」

水無月 龍也の罪状は9割以上が冤罪。そのどれもが時空管理局上層部による独断である、その事を筆頭に数々の管理局の暗部がさらけ出されていく。

「そ、そんなことあるわけない!!」

「それこそねえよフェイト執務官、組織つてのは大きくなればなるほど薄汚え部分が出てくるのは当然だ」

フェイトの言葉を一刀両断するシンジ、時空管理局がいくら綺麗事を言おうとも実際にそういった暗部があるのは事実、非人道的な研究施設の約8割は管理局とのつながりがあるほどだ。

「そして、現在俺が追っているのは【奇跡の神子復活計画】を追っている」

【奇跡の神子復活計画】……概要としては簡単だ、古代アルハザード時代において勢力を二分していた【魔法文明アルハザード】と【特殊能力文明エルベンラルト】の英知を復活させ、【奇跡の神子】にその全ての力を集約し世界を支配する……まるで子供が考えるよ

うな幼稚な思想と概念で纏められた計画。 予想される被害は人的損害が数百億、物的被害が数兆ミッドドル、環境破壊や絶滅種の箇所多数。 およそ人が行うにとしては損害が大きすぎるそんな計画である。

しかもこの予想は平均であり、最悪の場合はこの数十倍にも及ぶ被害が出ると予想されている。

「ちよつ、いくらなんでもありえへんのとちゃうん？」

「いんや？ 古代兵器が数十機に無人古代遺失物戦艦が五隻、それに神子のクローンが多数、さらに【奇跡の神子】と【ゆりかこの聖王】となりや被害はこんなもんだ」

表示されるのはどこから流されたのかわからないが現エルベラルトのメンバーのクローンが完成しているとの報告書、さらに……。

「スカツちの協力で分かったんだがレリックも既にあっちゃんにわたってる……ここにいてるヴィヴィオは聖王のクローンの唯一の成功例。 俺の言っていることは分かるな？」

すでに役者はそろっている、それを暗に全員に伝える。

「補足するなら、現代における武の神子……俺の妹は向こうに囚われ洗脳されている可能性が高い……あいつに勝てるのは現在において俺かユーノしかない」

龍也の補足に一部を除いた全員が反応する。 エルベラルトに置いてナンバー4と目立たない位置にいるがユーノは管理局でも有数の魔導師、今でもトリプルブレイカーを完全にシャットアウトしたのはユーノのみであり、その実力は全世界が知っている。 問題があるとすれば火力不足といった面のみだ。

「ソ、ソラさんじゃ勝てないんですか？」

思わずと言った感じで説明を求めるティアナ、それに口角を釣り上げて不敵に笑いながら。

「狂戦士となった武の神子である俺の妹の實力は推定SSSランク、さらに【豊穰の神子】であるソラは【武の神子】に対して弱点が多すぎる」

ソラに弱点などないと思っていた面々は驚愕の表情をする、それも当り前だろう。ソラの戦闘スタイルはオールラウンダー、つまり苦手な距離は存在しない。にもかかわらず弱点が多いとする理由、それは。

「近接戦闘では【武の神子】は最強だ、他の神子の追隨は許さない、さらに魔力変換資質【四属性】スケウエアホルダー……そして何より、“音”の魔法を習得している我が妹はソラの天敵だ」

ソラは度重なる瀕死の重傷でその身に耐性を付けることができる、斬・打・刺・魔・毒・熱・電気、しかし、どうしても克服できないものがある、それが“固有振動”と“衝撃”である。

どんなに体が頑強であろうとも脳を揺らされれば脳震盪を起こす、人体構造上仕方ないことである、さらに身の内に直接届く“衝撃”や“固有振動”はどうあっても防げないものである。

「これを防ぐにはユーノ並の結界術師か俺の様にそもそも当たらない奴が必要になる」

「ちなみにランク換算で龍也はSSSランクだ」

その言葉に（一部を除く）全員が驚愕と言うより呆然とした表情になる、その発言に驚いていないメンツはエルベンラルトのメンバー、そしてティアナ・リュウトであった。

「で、これからの戦いはかなり厳しい戦いになるだろう。ここに居るメンバー総出で何とかこの計画を潰さなければならぬ……そのために、全員に【具現化】ラインエンドを習得してもらう」

『ラインエンド???』

【具現化】ラインエンド……その本人が秘める潜在能力を可視化したものの総称。各個人によってその姿は千差万別でありそれ自身に攻撃能力はないが、潜在能力を100%引き出す能力を秘めている。現在確認されている具現者ラインホルダーは7名。エルベンラルト所属の6名、それに龍也である。

「あれ？ シンジさんは使えないんですか？」

「煙レベルなら出せるぞ？」

哀愁漂う笑顔で言うライドウに誰も二の句を告げなくなる。

しばらくの沈黙の後、復活した一同。

「さて？ これから諸君には具現化がもたらす恩恵を見てもらっためにとある模擬戦を見てもらう」

「模擬戦？」

「ああ、ソラと龍也の5割組み手だ」

全員が訓練場に集まり、モニターで観戦できる場所に移動する。模擬戦を行う2人は間を200mほど置き互いにそれなりにリラックスした様子で身体を解している。

「(うーん…龍也さんの5割かあ…重症にならないといいな…ボクが)」

「(ソラ少年の5割か…掠ったら死ぬな)」

両者ともに互いの力ものほどを知っており、どうしようかと悩んでいる。

「ソラ少年」

「はい？」

「魔法禁止な？」

「無理です無茶です無謀です重傷負います」

「…チッ」

「何バカやってんだ貴様ら)。#)」

そして審判役兼解説のシンジがツッコんだところで仕切り直し、両者が構えを取る。ソラは左半身を前にしたカウンタースタイル、龍也は煙草に火を付けヤンキースタイル。

「んじゃ、はじめ」

side アリスト

緊迫した空気の中俺はモニターを見続ける。

俺たちの教導の際には見せない構えを見せるソラさんが放つのは押しつぶすような覇気、まるで天から落ちてくる大きな手のひらのように辺りに重圧がかかる、そして背後にあるのは胡坐をかいた大きな坊主、そこから感じるのはソラさんから放たれている覇気と同じもの。

そして龍也と言うおじ……ん……男性から放たれているのは鋭利な刃物を連想させる殺気、構えこそどこのヤンキーのようにやる気のない感じを受けるものだが、それを殺気が凌駕している、背後に浮かぶのは仮面を付けたピエロ、どこか小馬鹿にしたような表情に見えるが、そのうちから漏れ出る殺気は見ているだけで気持ち悪い。

「んじゃ、はじめ」

シンジのおっちゃんから放たれた言葉が終わった瞬間、龍也さんが消えソラさんが吹き飛ばされる、一瞬何が起こったかわからなかったが直感が訴えている……これはまだ序章に過ぎないんだと。

side out

初撃は龍也が取ったが、ソラがいた地点に残された光球に気付いた龍也は即座に上空へと跳ね上がる。一瞬前まで龍也がいた地点に光球が弾け矢となり抜ける、一瞬でも躊躇していればその攻撃で



龍也は敗北していただろう。

ソラの方は特にダメージはないのかビルの壁に足をめり込ませながら停止し、即座に詠唱、上空にベルカ式魔法陣を構築する。

「墮ちろ！ デアボリックエミッション！！」

「チツ…いやらしい攻撃だな」

龍也にとって一撃を貰うことは即座に敗北につながる、それを回避するため指輪の一つを銃へと変化させ、電撃の槍をベルカ式の陣の一部へ向け打ち放つ。

過電圧によって青い稲妻と化した槍は陣を歪ませ構築された魔法を撃ち砕く、これも一瞬の判断ミスで効果がないものだが、神速の反応で撃ち抜くことに成功する。

「…………ツ！」

一方観戦組は、その数秒間に起こった出来事に驚愕していた。

「あの速度で展開する魔法陣に影響を与えて打ち消すなんてなんて出鱈目…………」

「あの雷もすごい威力だけど、そんな物を自在に操るリュウヤも恐ろしい…………」

隊長を務め、自身もエースと呼ばれるのはやフェイトがそう漏らす。

「……………うわぁ…す、すごいね？」

「……………ほ、殆ど見えなかったけど……………うん」

「すごいねえティア……ティア？」

「……………（ガクガクブルブル）」

そして、何が起こっているかよく分からないが驚いているキャロやエリオ、それにスバル。そしてトラウマを刺激されて震えるティアナ。

「……………うっぷい」

「……………おrrry」

そしてなまじカンの鋭いアリストが目まぐるしく変わる戦況に酔い、ティアナと同じくトラウマを抉られたリュウトが壊れ始めていた。

再び戦場では龍也が接近し肉弾戦へと移っていた、刺すように放たれる龍也の拳が的確に急所に打ち込まれる、だが単発では効果がなく耐性のできたソラの肉体によって弾かれてしまう、連続で当てて内臓を撃ち抜く攻撃をしようとするがその軌道にソラの掌底が割りこみダメージを負わないようにしている。

「挨じり抜き手！ 五！！」

「ぐう？！」

「四！！」

右の挨じり抜き手の後に左の挨じり抜き手がピンポイントで同じ個所に撃ちこまれる。

「三！！ 二！！ 一！！」

「零！！」

右左右と抜き手を決め、ほんの少し溜めた左のフィニッシュブローがソラに突き刺さり数百m吹き飛ばす。

「……………あ、やりすぎた」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5113k/>

---

魔法少年の物語 ～奇跡の神子～

2011年11月27日03時45分発行